

北辰會雜誌

第六十六號

大正二年四月二十日發行

(非賣品)

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌

第六十六號

卷之六十六	第一號	第一頁
卷之六十六	第二號	第二頁
卷之六十六	第三號	第三頁
卷之六十六	第四號	第四頁
卷之六十六	第五號	第五頁
卷之六十六	第六號	第六頁
卷之六十六	第七號	第七頁
卷之六十六	第八號	第八頁
卷之六十六	第九號	第九頁
卷之六十六	第十號	第十頁
卷之六十六	第十一號	第十一頁
卷之六十六	第十二號	第十二頁
卷之六十六	第十三號	第十三頁
卷之六十六	第十四號	第十四頁
卷之六十六	第十五號	第十五頁
卷之六十六	第十六號	第十六頁
卷之六十六	第十七號	第十七頁
卷之六十六	第十八號	第十八頁
卷之六十六	第十九號	第十九頁
卷之六十六	第二十號	第二十頁
卷之六十六	第二十一號	第二十一頁
卷之六十六	第二十二號	第二十二頁
卷之六十六	第二十三號	第二十三頁
卷之六十六	第二十四號	第二十四頁
卷之六十六	第二十五號	第二十五頁
卷之六十六	第二十六號	第二十六頁
卷之六十六	第二十七號	第二十七頁
卷之六十六	第二十八號	第二十八頁
卷之六十六	第二十九號	第二十九頁
卷之六十六	第三十號	第三十頁
卷之六十六	第三十一號	第三十一頁
卷之六十六	第三十二號	第三十二頁
卷之六十六	第三十三號	第三十三頁
卷之六十六	第三十四號	第三十四頁
卷之六十六	第三十五號	第三十五頁
卷之六十六	第三十六號	第三十六頁
卷之六十六	第三十七號	第三十七頁
卷之六十六	第三十八號	第三十八頁
卷之六十六	第三十九號	第三十九頁
卷之六十六	第四十號	第四十頁
卷之六十六	第四十一號	第四十一頁
卷之六十六	第四十二號	第四十二頁
卷之六十六	第四十三號	第四十三頁
卷之六十六	第四十四號	第四十四頁
卷之六十六	第四十五號	第四十五頁
卷之六十六	第四十六號	第四十六頁
卷之六十六	第四十七號	第四十七頁
卷之六十六	第四十八號	第四十八頁
卷之六十六	第四十九號	第四十九頁
卷之六十六	第五十號	第五十頁
卷之六十六	第五十一號	第五十一頁
卷之六十六	第五十二號	第五十二頁
卷之六十六	第五十三號	第五十三頁
卷之六十六	第五十四號	第五十四頁
卷之六十六	第五十五號	第五十五頁
卷之六十六	第五十六號	第五十六頁
卷之六十六	第五十七號	第五十七頁
卷之六十六	第五十八號	第五十八頁
卷之六十六	第五十九號	第五十九頁
卷之六十六	第六十號	第六十頁
卷之六十六	第六十一號	第六十一頁
卷之六十六	第六十二號	第六十二頁
卷之六十六	第六十三號	第六十三頁
卷之六十六	第六十四號	第六十四頁
卷之六十六	第六十五號	第六十五頁
卷之六十六	第六十六號	第六十六頁
卷之六十六	第六十七號	第六十七頁
卷之六十六	第六十八號	第六十八頁
卷之六十六	第六十九號	第六十九頁
卷之六十六	第七十號	第七十頁
卷之六十六	第七十一號	第七十一頁
卷之六十六	第七十二號	第七十二頁
卷之六十六	第七十三號	第七十三頁
卷之六十六	第七十四號	第七十四頁
卷之六十六	第七十五號	第七十五頁
卷之六十六	第七十六號	第七十六頁
卷之六十六	第七十七號	第七十七頁
卷之六十六	第七十八號	第七十八頁
卷之六十六	第七十九號	第七十九頁
卷之六十六	第八十號	第八十頁
卷之六十六	第八十一號	第八十一頁
卷之六十六	第八十二號	第八十二頁
卷之六十六	第八十三號	第八十三頁
卷之六十六	第八十四號	第八十四頁
卷之六十六	第八十五號	第八十五頁
卷之六十六	第八十六號	第八十六頁
卷之六十六	第八十七號	第八十七頁
卷之六十六	第八十八號	第八十八頁
卷之六十六	第八十九號	第八十九頁
卷之六十六	第九十號	第九十頁
卷之六十六	第九十一號	第九十一頁
卷之六十六	第九十二號	第九十二頁
卷之六十六	第九十三號	第九十三頁
卷之六十六	第九十四號	第九十四頁
卷之六十六	第九十五號	第九十五頁
卷之六十六	第九十六號	第九十六頁
卷之六十六	第九十七號	第九十七頁
卷之六十六	第九十八號	第九十八頁
卷之六十六	第九十九號	第九十九頁
卷之六十六	第一百號	第一百頁

内 容

史的警句集(歴史)..... (一) 浦 井 生
歌集「こゝろ」を読む(批評)..... (二三) 其 月 生
悲哀の情緒(講演)..... (二六) 水 衣 生
情調の藝術(評論)..... (二三) 鳴 澤 生
旅より旅へ(紀行)..... (三〇) 井田さら男
真吉の家(創作)..... (四三) M. M. 生
變化(創作)..... (四九) 井口白汀
賢聖院史談(歴史)..... (六三) 平 泉 澄
姉妹(脚本)..... (七一) 横 湯 生
夕煙(歌)..... (八四) 大谷繞石
暗黒(歌)..... (八四) 井田さら男

夜のなやみ(歌)..... (八五) 山 本 白 聲
赤き帯(歌)..... (八五) 佐 藤 曙 汀
淋しき心(歌)..... (八七) 龍 溪 玄 深
床の上(詩)..... (八八) 白 汀
薄暮黄鐘調(詩)..... (九三) 日 色 瑪 尼
「趣味と修養」を讀みて..... (一〇二) 杉 田 生
袖倉島見聞録(紀行)..... (一〇六) 伊原敬之助
四高俳句會句鈔..... (一一五)
行軍日誌..... (一二七)
擬國會議事録..... (一二〇)
各部報..... (一二〇)

(1111) 羅馬帝國の崩壊
 (1112) 羅馬帝國の崩壊
 (1113) 羅馬帝國の崩壊
 (1114) 羅馬帝國の崩壊
 (1115) 羅馬帝國の崩壊
 (1116) 羅馬帝國の崩壊
 (1117) 羅馬帝國の崩壊
 (1118) 羅馬帝國の崩壊
 (1119) 羅馬帝國の崩壊
 (1120) 羅馬帝國の崩壊

史的警句集——浦井生

Had I served God as diligently as I have served the King, He would not have given me over in my gray hairs.

前號に見へたる英王ヘンリ八世の主相ウルジイが王の逆鱗に觸れ反逆罪を以て擬せられし時彼が捕縛に向ひたる Sir William Kingston にいへる言にて予は僧職に在る身なれば國王に誠忠を盡したるだけの熱心を以て神に仕へたらんには神は予の如き白髮の老翁を見放して敵に渡すが如き無慈悲な事はなざるまじ予が國王陛下のために盡したる勞苦も徒勞なりきと王の無情を愁訴したるなりセークスピアの史劇ヘンリ八世に之を描寫し其筆神に入ると稱せらる

Hail, Caesar, those who are about to die salute thee (Ave, Imperator, morturi tu saluant)

死に臨みて陛下の萬歳を祝奉る！何んたる悲愴の語ぞ是はこれローマ帝政時代に於て gladiator が演武場なる皇帝の玉座の前に整列し敬意を表する際述ぶる法定の祝辭なり抑も劍客の闘戯は其源をエトルスキ人の慣習に發し貴人の葬儀に際し常に召使ひたる奴隸をして主人の墓前に於て真劍の切り合ひを爲さしめ主人の死に殉せしめしが後ローマの軍隊の出征するに方りて奴隸を犠牲として軍神の血祭を行ふに至り再變して純娛樂となりローマ人は常に闘戯の目的を以て

多数の奴隷を養成し時々出して決闘を行はしめて樂むに至り奇妙にもローマ人の無上の嗜好となり終に恰我邦の相撲英國のフットボールの如くローマの國技となり其流行は歲月と共に愈々甚しく帝政の繁榮時代に至りては劍客戲の興行場としてテアテルムフラビウム一名コリセウムの如き驚く可き大建築を興せり全部大理石を以て造り四層より成り高四十六メートル長百八十メートル幅百五十メートル看客四萬餘人を収容するに至り一日に五百乃至八百組の劍客を闘はしめきと云ふ此技の殘忍なる現今西班牙人の最も嗜好する闘牛戲と古今其軌を同うすといへり

Happy is the king who has a magistrate possessed of courage to execute the laws; and still more happy in having a son who will submit to the punishment inflicted for offending them. 英王ヘンリ四世の言なり王の御宇皇太子ヘンリ(後ヘンリ五世)の親友なる青年貴族某人と争ひ暴行せる件を以て告訴を受け大法官 Gascoigne 之を審理す皇太子は其親友が囚人となれるを聞き憤怒して自ら法廷に出て其身は皇子にして未來の國王なれば法官は恐懼して唯々命を奉すべきを思ひ勢鋭く法官が皇太子の友を拘禁せる不都合を叱責し直に某を釋放せんことを要求し劍を按して裁判長ガスコインを脅せり然るにガスコインは動する色無く容を改めて法律の尊嚴を保たためには皇太子の貴きと雖も寛恕する能はざるを告げ皇太子の態度を以て國王陛下の法官に對する不敬罪と爲し之を捕へて獄に下さんとす皇太子はガスコインの論告を聞いて大に悟り喜んで服罪し且つガスコインの勇と職に忠なるを賞せり國王ヘンリ四世之を聞きガスコインの法を行ふて硬直なるを欣び且皇太子の舉動を激賞せりとぞ

Here I am, here I stay.

一八五五年クリム戰役起り英佛聯合軍クリム半島のセバストボルを攻撃す十月九日より包圍始まりしが露兵の抵抗頑強を極め曠日彌久之を抜く能はず翌年六月十八日攻圍軍は總攻撃を試み全然失敗す因て更に準備を整へ九月八日再度の總攻撃を行ひ佛將元帥マクマオンはマラコフに向ひ英將コードリントンはグレートレダンに向ふ英兵は撃退せられたれど佛兵は惡戰苦闘の後竟に其目的を達せり蓋しマラコフは恰も旅順に於ける二百三高地の位置にあり之に據らば城の死命を制すべし城兵終に支ふること能はず守將ゴルチャコフ火を放ちて退き十一日同盟軍は確實にセバストボルを占領せり實に三百三十六日の攻城戰なりき而して八日の總攻撃に於てマクマオン將軍はマラコフを占領し一呼吸つき居けるに軍司令官ベリシエーの傳騎走り來たり司令官の命を傳へて曰く捕虜の言に依れば敵はマラコフ塔内に地雷火を裝置し置けりと極めて危し貴官は迅速に其陣地を去らる可しとマクマオンは微笑しつゝ鉛筆もて一紙片に答申書を記し之を傳騎に渡せり其書に曰く小官此所に在り小官は此所に停まる

He was as great as a man can be without virtue.

佛國著名の政治家にして文豪なる De Tocqueville (一八五九死す) がナポレオンを評せる語なり

Here is Plato's man

ギリシアのキニック派哲學者 Diogenes (紀元前三二三死す) がプラトンにあてつけたる皮肉的の語にしてプラトンは人類の定義を下して A two-footed, wingless animal といへり因てデオゲネスは

翼を取られ羽毛を撈られたる鶏を見て大に呼んで曰く人々見よやプラトン君の人間は是なりと
Here lies Elizabeth, who lived and died a maiden queen.

女皇エリサベスは其先代女皇マリアが西班牙國王フィリップ二世の配たりしたため英國は西班牙の屬領に等しき状態に陥り英國の損害名狀すべからざりしに鑑み英女皇の身としては外國の君侯と結婚すれば國の不利を招くを思ひ國の爲め終身夫を持つまじこの決意を爲せり因りて議會が女皇の結婚を請願するや之に答へて朕は朕の碑銘に如斯記されんことを冀望すと是に由りエリサベスを處女王といふ

Himself said it (ipse dixit)

紀元前五百年代に於てギリシアに大哲學者あり Pythagoras といふサモスに生まれたるに因りサモスの聖人といふ數を以て宇宙の根源なりといひ初めて地球の球形なるを説く等新說多くギリシア哲學の新時期を劃せり彼は又歐洲に於ける菜食主義の祖と稱せらる後シチリアのクロトン市に移り幄を垂れて教授す弟子六百其師を信すること極端に及びピタゴラスの言といへば微塵も誤無き者として盲從せりされば後世アリストテレスが其師プラトンの説と雖も駁撃を加へ予はプラトンを愛すれども眞理を愛することプラトンを超ゆといへりしに比して不見識甚しといはざるべからず因て今日根據無き主張を Ipse dixit といふ例へて Ipse dixit が如し

How cold is this bath of yours.

紀元前一〇四年ローマはヌミチア王國を滅せり此國は現今のアルジェリアにして第二次ポエニ戰役以來ローマの保護と爲れり國王ミキプサ二子ありアドヘルバル及びヒエンブサルといふ共に不肖なるが王の甥ユグルタ極めて才略あり王は其將來我が兒の仇とならんことを虞りユグルタを養ふて子とし死に臨みて國を三分し二人の實子とユグルタとに分配せり(一一八)然るに王の陵土未だ乾かざるにユグルタはヒエンブサルを殺して其地を奪へり(一一七)アドヘルバル乃ちローマに奔り之を訴ふユグルタも亦た使をローマに送り滿囊の金を擔ふて議政官の家を訪問し盡く之に啗はしむ議政官アドヘルバルを諭して國に皈らしめ又ミチアを兩分してユグルタと分ち領せしむ後五年ユグルタは不意に兵を起しアドヘルバルの居城を攻むアドヘルバルは急使をローマに送りて急を告ぐローマは使を派して和を謀りたれども此使者亦たユグルタの荀直を受け傍觀しければ城陥りアドヘルバル之に死しユグルタは又ミチアを統一すローマの議政官は猶之を不問に付せんとしたるも輿論沸騰せしかばユグルタに對して問罪の師を出せり(一一二)然るに司令官ベスチアはユグルタの賄賂を受け僅少の罰金を以てユグルタを釋し還る於是輿論は益々激昂しユグルタをローマに召喚し民會に於て收賂事件を審理せんとせしがローマの官憲はユグルタに好意を寄す者多く此議も竟に成立せず流石にユグルタもローマ官憲の腐敗に呆然たらざるを得ずして曰く嗚呼腐敗せる哉ローマ汝は賄賂客さへ得ば國を賣るも悔みざらんと因て此戰役を一名賄賂戰爭といふ此際又ミチア王室の疎族にマツシバといふものありローマに居りしがユグルタを排して王位を得んとし熱心に朝野の間に運動せしがユグルタは之を知り人をし

て之を暗殺せしむ於是輿論の沸騰其極に達し議政官も輿論に屈從し更に兵を發してユグルタを討つに至れり(一一〇)されどユグルタは巧に兵を用ひてローマ兵に當り戦局進捗せず一〇七年マリウス平民より出で、執政官に任せられ軍を督するに及び始めて局面一轉し一〇五年ユグルタは捕虜となりてローマに送られ Mamurra の獄に投じ殺されたり此獄は一名 Tullianum と稱し今日に現存せる古ローマの遺蹟として著名なり獄中に深き古井ありて罪人を之に投じ餓死せしむユグルタは之に投せらるゝや叫んで曰くローマの奴共の風呂は冷たいなあと此一言ユグルタの傲岸屈せざるの風を見るべし

I am already married to my country.

William Pitt は老ピットの次男なり二十一歳にして國會議員となり其處女演説に於て大に人を驚せりエドモンドバーク曰く未だ大木(老ピットを指し同時に大政治家を意味す)の片割れと思ひきや早や大木の本幹なりきと又ある人フオックスにピットは將來議會第一の人となるべしといひしにフオックスは否とよ彼既に爲れりと答へしとぞ一七八二年二十三歳にして大藏大臣となり翌年首相の印綬を帶べり一八〇一年職を去りしが四年再び起ち六年卒す氏は英國大政治家の一人にして内はイングランドとアイルランドとの政的合同を斷行し外は佛國の革命主義に對して絶對的反對の方針により佛國に對する三次の歐洲同盟の牛耳を握れり常に清廉身を持し其死するや四萬ポンドの負債あり議會の決議に因り國庫より之を辨償せり氏は終身娶らず嘗て親友ホレース、ウォルポールは氏のため佛國の前首相ネッケルの女を媒介せんとせしに氏は之を

峻拒して予は既に我國と結婚し了れりといへり此女後マダム、スタエルと稱し女流文豪となれり

I am a Roman citizen (Civis Romanus sum)

一八五〇年六月十八日英國外相 Lord Palmerston の演説を以て著名となれり該演説はバシフヒコ事件と稱する件に關しバーマストンの辯解にして此事件の概略次の如し

Don Pacifico はシムユダア人あり英領ジブラルタルに生まれたれば英吉利の國籍に屬せり此男ギリシアのピレウス港に住し嘗てポルトガルの領事を勤務せしとありき當時歐洲諸國に於てユダヤ人排斥運動盛に行はれ一八四七年彼の居宅は暴民の襲撃を受け破壊掠奪せられたり彼は直にギリシア政府に損害賠償を要求せしが其額は彼及び家族の慰藉料五百ポンド家屋家財の損害五千ポンド葡萄牙政府と關係ある有價文書の損害一萬一千ポンドにして合して我邦貨二十六萬五千圓を請求せりギリシア政府は此要求を不當として應せず於是英國政府は軍艦をピレウス港に向はしめ強硬にバシフヒコの要求を支持し事態穩ならずフランス政府は居中調停を力め希臘政府はバシフヒコの家屋家具の損害賠償として四千二百ポンドを支拂ひ葡萄牙政府と關係ある有價書類に關してはリスボンに於て英佛希三國の混成委員の調査を待つこととし委員會の結果はギリシア政府より百五十ポンドを賠償するに決して事件の落着を告げたり然るに歐洲各國は盛にバーマストン卿を批難し卿がドンバシフヒコの要求額の妥當を缺けるを責めずして猥りに其後援を爲すのみか國際上の禮義を無視して突然非常手段に訴へんとせし如きはれギリシヤの弱小

なるを侮れる倨傲の措置といはざる可らずと終に英國議會の質問書提出となれり而して其實此事件に關してバーマストンの態度の過激に失せしは掩ふへからざる事なれば彼が當面の責任者として答辯するは頗る困難なるや明なりされば彼は努めて事實問題を避け主として抽象的國權問題となし壯快痛切の辯を以て英國の外交政策を辯護して曰く諸君の注意を請はんとするは往昔ローマの人民は如何なる邊境の地野蠻の民の中に在るも一言予はローマ公民なりといへば大なる敬意を以て遇せられ些の侮辱をも加ふる者なかりとか是れ何故ぞ渺たる一ローマ公民の背後に強大なる羅馬帝國の後援ありし爲なるにあらずや我が政府の外交方針は此の古のローマ人の如く我大英國の臣民をして仮令何れの國に在るも本國政府は須臾も其保護を怠ると莫く他の不正なる迫害を寛過せずとの確信を有せしめんとを期するにありと此巧妙なる辯論に因り議場の形勢頓に變し政府信任案は多數を以て通過せり爾來人バーマストンを呼びて Patriotic Minister といひ政府の方針を Patriotic policy といふ而して外國は之を罵りて Shoopolicy といふべし

I am King of the Romans and above grammar (Ergo sum Rex Romanus et supra grammaticum)

第十四世紀及び十五世紀はローマ教會の腐敗甚たしく一三〇九年より同七七年まで教會のバビロニア楚囚と名けて法王は佛國のアビニオンに在りローマに法王を缺き法王はフランス王の傀儡となりて教會の信用地に墜つるあり一三七八年より一四一七年迄は教會の大分裂生じてローマとアビニオンとに法王兩立せり於是諸國其弊に堪へず巴理のソルボン大學の提議に因りローマ皇帝シギスムンド佛英伊西の諸國を促がしコンスタンツに於て宗教大會議を開き教會の根本

的改革を行むんとせり(一四一四—一八)此會議に於て皇帝の言論は往々文法を誤りしかば人之を注意せしに皇帝は朕はローマ皇帝なれば文典以上なりと答へたりといふ

I am looking for a man.

デオゲネス一日晝提灯に點火し之を携へてコリントの市中を徘徊す人異みて之を問ふ答へて曰く人多けれど眞の人なし予は之を求めんとす行いて慈愛の神を祀れる堂に至る神官あり堂前に立てりデオゲネス近く呼んで曰く此老翁を憐み恵むに銅貨一片を以てせよと神官曰く我兒よ予が同情を以て満足せよと堂内に遁れ入るデオゲネスは長大息しつゝ一大商店に至りしに店內に盛裝せる貴婦人ありて盛に買ひ物を爲せり乃ち進み入りて曰く貴女は御身の快樂の満足のために少からざる財を費すが如し此飢に苦みつゝある老父の爲めに數片の貨幣を惜む勿れと婦人はデオゲネスを凝視して曰く氣の毒なる老父なるかな之を與ふるに因り行ひて一片のパンを購へと錢を地に投せり而して婦人は其愛犬の首環のため十二銀を拂ひしかはデオゲネスは歎じて曰く嗚呼予は犬に如かずと更に行きて一貴人の馬車を馳せて來るに遭ふ乃ち之を要して哀を請はんとす貴人大に怒り罵りて曰く去れ狂人速に去らずんば汝を打倒し我馬を以て蹴殺し呉れんと一奴あり此事を見てデオゲネスの袖を牽きて路傍に來たり恭しく一片の銅貨を出して之をデオゲネスの帽に入れたりデオゲネス驚き叫ひて曰く天よ予は竟に眞の人を發見せり而して其人は奴隸なりきと提灯の火を吹き消して徐に家路に就けり

I am poor, very poor; but your king is not rich enough to buy me.

合衆國の Joseph Reed は米國獨立の際大陸會議の議員となり又ペンシルバニアの行政委員に任じ獨立戰爭に於て一方の將として奮闘せり英人彼を買收せんことを試みしに彼は斷乎として之を峻拒し英王は手を購ふだけの富を有せずといへり

I am the man who has given you more kingdoms than you had towns before.

スペインの軍人にして北米メキシコを征服せる Hernando Cortez が一五二八年スペインに還り皇帝チャールス五世に謁せし時皇帝はコルテスの履歷を尋ねしかばコルテスは怫然として此答を爲せり

I am the state (U' Fiat e'est moi)

普通に佛王ルイ十四世が一六五五年パリの高等法院(パルマン)に臨御ありし時一六一四年以後中絶したる議會(エターゼネロー)を召集せんとの議出たるを怒り院長を叱したる語とも法官の一人が辯論中に國王及び國家といへるを聞き咎めて此語を發したりとも傳へたりされど史家の慎重なる攻究の結果ルイ十四世の口より發したるに非らざる事明瞭となれり然らば何人が此熟語を作り出でたるか勿論明證なしと雖も恐らく文豪ボルテアならんといへり兎に角ルイ十四世の專制主義を遺憾なく形容したる語として人々に膾炙するに至れり

I beg you will not disturb my circles.

シチリアのシラクサの理學者アルキメデスの言なりシチリアは第二ポエニ戰役に於てハンニバルと同盟してローマと絶ちしかばローマ將マルケルス之を圍む(紀元前二一四—二一一)アルキ

メデス此時既に老ひたりしが種々新奇の防禦の機械を作りてローマ兵を苦しめローマ兵城を圍むこと三年に及へども抜く能はずマルケルス乃ち一計を案じ詐りて兵を退くシラクサ人を見つて謂へらくローマ兵困憊して退き去れりと大に守備を懈る偶まアルテミス大祭に會し終日酣歌踏舞し夜に入りて皆熟睡す城中敵に通せる者あり陰に之をローマ兵に報ずローマの壯士暗に乗じ城壁を踰えて城に入り其門を開くローマ兵之に踵いで闖入し城終に陥れりアルキメデスは城の已に陥れるを知らず其室に在り杖を以て圖を砂上に畫き熱心に教理を考索すローマ兵其室に入りて之に逼るアルキメデス之に謂て曰く乞ふ我が圖を踏破すること勿れと兵士怒て之を刺殺せり壽七十五マルケルス大に之を悼み禮を厚うして之を葬らしむ

I called the New World into existence to redress the balance of the Old.

一八二六年六月十六日英の外相カニングの議會に於ける演説なり始め中世紀の末葉以來葡萄牙領のブラジルを除きメキシコ以南の中央及び南アメリカ諸洲は盡くスペイン領なりしが此等の殖民地は本國の殖民地政策に平ならず十九世紀の始スペインが佛國のため占領せらるや諸州は相踵いで獨立を謀りナポレオン倒れ歐洲の平和克復の後も南米の獨立戰爭熄まずスペインの力もて如何とも爲す能はざるに至れり是於神聖同盟は君主正統主義の大方針に基きスペインを援けて米國の叛亂を鎮壓せんとの議生じ一八二三年十二月パリに於て之を議す之に對して合衆國はモンロー主義を發表しカニングは一八二五年一月一日を以てメキシコ、ウルグアイ、パラグアイ、チレ、ペルー、ボリビア、グアテマラ諸國の獨立を承認し通商條約を締結せり之を觀て

神聖同盟干渉の議竟に熄めりカニングは議會に於て是演説を爲したるが英國は決して義理や人情もて動く國柄にあらず萬事算盤上の打算を離れず英國の眞意はメキシコ以南のアメリカを英國の獨占市場と爲さん爲めなりしなり

I came, I saw, I conquered (Venii, vidi, vici)

紀元前四七年ケーザルはポンペウスを追討して埃及に在り小亞細亞ポントス王フハルナクス兵を擧げローマ領シリアを侵すケーザル直に之に向ひゼラの戰に於て之を敗れりケーザル捷をローマなる議政官アマンチウスに報して曰く來た見た勝つたドラコニクススピーチの好例として著名なり

I can see thy pride through the holes in thy dress.

ソクラテスの弟子アンチステネスは世の禮儀作法を以て無用なりとし邊幅を飾らざるを以て良風とし常に破れたる衣を纏ひて得々たりソクラテス之を憂へ一日渠に遇ふや痛棒を啗はして曰くアンチステネスよ慢心がお前の衣の破れ目からのぞいて居るよと

I received a city of brick; I leave a city of marble.

アウグスツスの語なり帝は大に土木を興しローマ市を改築したるをいふ

歌集こゝろを讀む——其 月 生

歌集「こゝろ」は篠原水衣君の近詠百五十六首を主に、大谷繞石君のを三十九首、井田、鳴澤、山本三君のを各五十首づゝ、合計三百四十五首ほどの短歌を集めた瀟洒たる美本である。

水衣繞石の兩師は勿論、井田鳴澤山本の三君は目下四高和歌會の驍將達である。で歌集「こゝろ」は同會最近の歌風を窺ふに最も適當の著作だ。

全體の調子は北國空の淡い悲哀を帯びてゐる。併し所謂十人十色、五君の作には即ち五種の特色がある。

先づ水衣君のは想は神秘で詞は纖巧とも評すべきか。一二度讀んだだけでは眞意は分らぬ。人影の胸の簾にともすれば映るけはひを宥めつゝ生く

と云つた様な歌ばかりで頗る苦心經營の結果と見える。で讀者も根氣よく考へなくては作者に濟まぬ。のみならず自分の心にも濟まぬ。少くとも一時間に一首以上讀んでは罰が當りさうだ。

夕されば小鳥あまた羽ばたきて瘦せたる胸に歸り來るかな

などは比較的解け易い謎で、

ふと夢の小窓を押せば三筋ほど髪流れ來て指に絡まる

とにかくも結ぶ紙縷の短かさを元に切れたる後の寂しさなどは余が解答が果して適中してゐるや如何甚だ覺束ない氣がする。故に百五十餘首偶々一首、露地口の八百屋の軒に赤廣告の二つとなりて淡雪のふるの如き現實的のものに接しても、何處ぞに潜める秘密は無きやと薄氣味悪く感ずる。要するに神秘歌人だ。

繞石君のは、水衣君のに比すれば、冬と夏ほど違ふ。

箱庭の山より高き家ありて家より高き草紅葉かな

磯濱につらなる高き網干木の末のみ見えて霞む家哉

其の人と並べ書かれし白壁の己が名消に行かまし朧夜

何處までも俳趣味津々たりだ。

繞石師の態度を持して主觀を詠すれば井田君の歌が出来、水衣君の歌體を模して客觀を叙すれば鳴澤君の歌が出来、兩君のを加へて二で割れば山本君の歌が出来ると見たは僻目か。

思ひ出の人の顔をば見ん爲めに目とづる習ひいつか覺えぬ

妻といふわが豫期せざる問題の廣がりてあり故郷の家

は井田君。

はじかれてあるがやうなり一隅の醜き男三等客車

冬近し吾若き日に親しみし石の形に似たる雲ゆく

は鳴澤君。

照り雲り庭に争ふ日にも似て我が此の頃の心亂るゝ

抽斗をあけて暫く考ふる黒き柱にわがうつる顔

は山本君。五十首中只二首づつを選べば強て余が嚮に述べた評語を立證する様に見えて聊か心苦しいが、こは余が初讀の際の欺かぬ感じであるのだ。

歌壇を退いて既に半歳、日毎荒れ行く余が心田に、ゆくりなくも滋雨を注いだ歌集「ころろ」の作家に衷心感謝して止まぬ。(二二、二五)

悲哀は飽くまで其對照物に固着せうといふ性質を有する。悲哀の恐るべきは此固着性であつて、悲哀は他に害を及ぼさぬから怨恨だの憤怒だのと云ふ情緒のやうに人の注意を惹かないし、幾分看過せられてるやうであるけれど、青年時代にあつては若し一步を過ると其害が那の邊まで及ぶかも知れないから、偶々斯ういふ情緒も研究して置く必要があらうと思ふ。悲しいと云ふ情緒は決して愉快なものぢやない。不快を去つて快を取らうとするのは人の通有性であるのに、なせ悲哀と云ふ不快な情緒がそんな強い固着性を有つてゐるのであらうか。悲しい悲しいと云つてながら死んだ愛兒の遺物を出して見たり、別れて未だ故郷の天地を想ひ出したりするのはどう云ふ理由であらう。

私はそんな問題を解く前に悲哀の情緒がどうして起るか簡単に述べて見やう。どうして起るかど云ふと語弊があるかも知れぬが、人間には先天的に悲哀の情緒を経験し得る素質があるものとして、一体どう云ふ場合に悲哀の情緒が喚び醒されるものか其原因を探つて見ると、希望を阻ぐるものに出會ふ時と自分の愛してたものが消失するか損害を蒙るか、愛してゐないまでも他の生

物が迫害を受くのを見るやうな場合、それから自分が直接打撃を蒙つたり、或は唯冥然と周囲の状況から悲哀の情緒が呼び起される事がある。

情緒は一般に早く消滅する性質を有する。だから肉躰に及ぼす影響も精神に及ぼす影響も著しく目に立つ事も無いでは無いが、悲哀の情緒は固着性がある爲じりじりと肉躰と精神とに影響を與へる。肉躰の方から云ふと、先づ脳と神経とが非常に衰弱する。神経衰弱症には色々他に原因もあるが一つは此悲哀から生ずるのは明瞭である。稍嵩じると精神病になる事もある。もう一步進むと自殺をもしかねない。脳や神経の中樞が悲哀の爲に攪亂せられる結果である。又血液の循環が悪くなる。心臓の鼓動が力なく脈搏が薄弱になる。のみならず筋肉の量も減じてくる。要するに吾々の生活力は著しく減退せられるが、其他、感覺も内臓も同様恐しい影響を蒙る。吾々の感覺は強い刺戟に堪へられなくなる。視覚も聽覚も成る可く温和な色か音、或は陰氣な色か音が好むやうになるが、然し此場合悲しいから愉快な色彩をもどめ愉快な音響を聞かうとする心を混同して考へてはならぬ。成るほど悲しい時には吾々は努めて明るい所へ出やうとするが、これは自分の生活力が減殺せられるのを妨げやうとする意識に明瞭に現はれない生活慾から來る事もあらうし且つ意志の努力に由る事も多い。であるからこれは本能又は意志の問題であつて、悲哀の情緒そのものはどうしても吾々の感覺と調和するやうな音響や光線を好むのである。ところで内臓はどうかと云ふと、吾々は直接胃に影響を及ぼされるのを實驗する。悲しい時には食欲が少ない。甚しい場合には嘔吐を催すことさへある。

次に精神にどんな影響を與へるか調べて見よう。心理學者は吾々の精神現象を便宜上知情意に分つてゐる。ところで悲哀の情緒は觀念の聯合や想像力の活動を著しく阻げる。一言でいふと智識の吸収力が非常に薄弱になる。悲哀に囚へられてる時書見しても十分理解し得ないのは悲哀の經驗を有する人は悉く知つてゐる事だと思ふ。次に情は非常に刺戟せられ易くなつてくる。精神が快活である時なら聞き流すやうな無禮な言語でも悲哀に沈んでる場合には無暗に癢に觸る事があつたり、少し優しい事でも云はれたりすると、ぼろぼろ涙を流すやうな事がある。要するに吾々の情は極く微細なものにも動かされるやうになるのである。意志の努力と云ふものも著しく減退するのは云ふまでもない。

斯んなわけで悲哀と云ふものは吾々の生理上に恐るべき結果を引き起すばかりでなく精神生活にも憂ふべき影響を與へるものだけに文學や藝術の對照となるところとして快を生ずるのであらうか。序だからこれも並せて研究して見よう。然し此問題は一朝一夕で論せられるものぢやない。文學者の見方美學者の立場心理學者の觀察など色々あつて一々其説を引用する暇もないから一括して云つて見ると大体次に述べるやうな理由の爲に快を生ずると思はれる。

悲哀を背景にした文學藝術に現はれてる事件と自分の周圍とを對照し比較して自分で慰安を得るにある。世の中には斯んな悲惨な境遇の人もある、だけれど自分は幸福だと考へる事から快が湧くのだと云ふのだが、此比較對照と云ふ言葉は餘程注意しなくてはならぬ、悲哀を背景にした文學の作物を吾々は一々自己の境遇と比較して味ふものであるかどうか。無意識に比較すると云ふ

事なら私も敢て異存は無い。所で人には夫々自分の想像でも空想でも推理でも經驗でも自分以外の者が是を系統的に組織して呉れると一種の快を感じる。卑近な例だが、賣卜者が不幸があると豫言して其豫言が的中した場合、相手の幸不幸は別として自分の云つたことが當つたと云ふだけで何となしに快であると云ふのと同様の理由で、吾々は快不快を問はないで唯平常思つてゐる事や何かの手段で纏める所に快を見出すことが多い。人世の悲惨に對する吾々の想像などが文學者の靈筆で描寫せられたとき、吾々は右の理由で不快を感じたり苦痛を感じたりするよりは寧ろ快を感じるのである。次に、吾々の心に多少の温みのある限り運命に弄ばれてる人間に對して同情の念が湧く。深刻な悲哀、想像の餘地も與へられない悲哀は實際不快である。然し悲哀が時の力が想像の力がで弱められると悲哀は同情を伴つてくる。同情は温いものである。温いものに不快は無い筈である。悲哀を背景にしたり對照にした文學や藝術を味ふとき吾々は十分に想像の餘地を與へられる。これも亦悲哀が藝術に現はれてる時快を生ずる一つの理由かと思ふ。次に注意すべきは吾々の美感である。假在と實在との間に吾々の心をして彷徨せしむる所に悲哀美と云ふ一種の美感が湧く。美感は決して不快のものでない。美感を引き起す理由は様々であるがいづれにしても吾々の心が平均を保つところに生ずるのは確かな事實である。假在と實在との間に吾々の心は平均を保つ。右に述べた理由以外に二三悲哀の情緒が文藝に現はるゝ時快を起す原因はあるが先づ大体は上述の理由である。

藝術に現はれる悲哀は斯う云ふ風に吾々に快を與へるが、實際の悲哀の情緒は肉体と精神とに

恐るべき影響を與へる。吾々の生活力は此情緒の爲に減殺せられるのである。殊に強い固着性を有するので脱却せんとしても中々難かしい。此固着性のあると云ふのは悲哀の對照物は悉く自分の愛するもの自分に快を與へたものであるからなのである。だから其脱却も容易でない。それならどうしたら豫防が出來やう、又一度悲哀の情緒に囚へられたら、どうしたら脱却し得やう。此問題は青年に取つては閑却して置くを許さない問題だと思ふ。然し自分は悲哀の情緒に惱まされてる人が必ずしも多いとは思つてゐない。又必しも深酷な悲哀の爲に人間は囚へられるものだとも斷言しない。が、若し用意を怠つてつまらない人生觀の爲に一生を過まる人が無いとも云へぬ。又どんな動機から恐るべき悲哀と云ふ苦い藥を飲まされぬとも飲まぬとも云へない。で私は此点に關して述べる前に一寸青年時代の悲哀の原因を考へて見る。

これには先天的に人間には嬉しい、楽しいと云ふ情緒があると同時に悲しい、情けないと云ふ情緒がある事を前提とする。一人人間が始めて悲哀の情緒を経験するのはレトマンの説では生後四ヶ月だと云ふのだが今では誰も之を信するものはゐない。どうしても生後一ケ年又は二ケ年のやうに思はれる。稍明瞭に現はれるのは勿論五歳以上である。此時分から十五六歳迄はよければ悲哀と云ふ情緒の爲に惱まされる事があるとしても其時期が極く短い。生理活動が旺盛であるから悲哀の情緒が起つても直ぐ反撥して追ひ退けて仕舞ふ。であるから此時分の悲哀の情緒は餘り心配する事はないのである。所で十五六歳になると吾々は肉體上の一大革命期に到着する。此肉體上の變化が精神上にも大なる變化を促がす。美しい春の野に遊んでゐたやうな心の上に何だ

か暗い影がさしてくる。其影の濃厚稀薄と云ふやうなものは勿論人に由て其差はあるがいづれにしても萬人の均しく經驗する所だと思ふ。目的とか理想とか云ふ光が明瞭になればなる程自分の周圍のものが何だか前よりも薄暗くなつてくるやうに思はれる。情を抑制するのは苦痛である。此苦痛を忍ばなくてはならぬ。文學藝術に對する趣味の湧いて來るのも此時期である。周圍のものに注意するやうになるのも此時期である。一方では盛んに空想を描き理想に趨かうとする。意馬心猿が狂ひ出す。が社會は其理想なり空想を容るゝやうに作られてゐない。知が情を壓へやうとする。だから心が絶えず攪亂せられる。煩悶の生ずるのも多くは是からで其結果神經衰弱を誘引するやうになるのである。勿論此時期に於て萬人が悉く深い悲哀を経験し身も世もあらぬやうな煩悶病に罹るとは斷言出來ぬが多少心の動搖は免れまいと思ふ。

それならどうしたら豫防が出來るか。別に難かしい事はない。唯身體を壯健にするやうに平常から心がけてるればいゝ。言語舉動をつとめて活潑にして悲哀に囚へられぬ工夫をす可きである。そして若し一朝悲哀に囚へられたら最後の治療法として注意を他に轉じなくてはならぬ。悲しいからと云つて自分の生理状態も心理状態も考へないで賑かな場所を選んで求むるなどは心得違ひである。前にも云つた通り悲哀に沈んでるときは鋭い刺戟に堪へられぬやうな生理状態になつてゐる。氣を紛らすことに焦慮して無理に騒々しい場所へ出入すると其爲神經は非常な惡影響を蒙る。徐々に脱却する工夫が最も必要なのである。それから泣くのもいゝ。悲しい時に流せよと云つて天から與へられた涙を耐えてゐるやうでは俗に云ふ實の持腐れである。悲しい時には十

分に泣くべきである。

斯う云つて終ふと悲哀の價値は全然無くなるが、一方から見ると悲哀の情緒は人の心を爽やかにする。高尚なる精神を養成する。宗教心を起す。思想を纏むる上にも大なる力がある。が是は他日話することにして要は唯深酷な抑壓的悲哀の情緒を恐るゝが爲に一言したまでである。

(右の一篇は過日北辰會の講演會で話した大要である)

情調の藝術——鳴澤生

(一)

藝術が齎らしてくれる凡ての情調の中で、たとひそれが微弱であるにもせよ、私はあの陶酔の堪へられぬまでに深い氣分をひたすら想ふ。陶酔とは或作品を通して渦巻いてゐる何等かの特殊情趣が、是れに接觸して來る人——所謂鑑賞者のハートと纏れ合つて純美なるミクスチュアを作つた場合に起つて來る一種の濃厚な幻的な心裡をいふのである。私は更に思ふ、こうした現實を遊離した様な美しい氣分は無限の生命あるもの。

私は氣分の苛々した時、又は腐り込むやうに肉体の倦怠を感じる時にはいつも情熱藝術に耽つて、そして醜惡な現實より逃れ去り、果てしも知らぬ情緒の曠野にさまよふのである。私は一切の自己や自己の行動を冷たい理智の權にのみかけて生きたくはない。夢のやうな返らぬ日の幻を追ひつゝ、私自身の内容を形成してゆく一部となしてゆかうと思ふ。

元へ返つて、——私は其生命が永續的だと言つた。それは幾度か幾度か擾亂と革命とを経て來た藝術乃至文藝の流れは、時には客觀萬能を謳歌したこともあつた。又イズムの興亡も擧げて數へきれぬまでである。現實主義、利那主義、かうした影を追ひ求める果敢なさに反抗を企てた人々

によつて、有りのまゝの現實が具体化されたものを眞の藝術とするに至つた。然し果してそれ等の運動が此藝術鑑賞者に作用する微妙な陶酔の味ひを永遠に滅却せしめ終つたかごうか。

(二)

茲に豫め斷つておかねばならぬことがある。私はどこまでも尖いメスを閃めかして藝術を解剖してゆかうとするクリテケルの態度に出やうとする者ではない。只飽くまでも觀賞の人として進むでゆく積りである。

何事に對しても革命性を振り廻したくなる人間の通性として、彼等本然の幻的美感到對しても幾多の反抗をあげて來たが、さて既往の藝術界を一見するに、いくら改革を唱導し新を唱へても、陶酔を貪望する美しい情緒は遂に何の侵害をも蒙ることはなかつた。薄いヴェールを覆ひかけたやうに一時曇りを帯びたこともあつたけれど、そうした冷たい文藝は只至つて生命の短かいものであつた。あの捲土の勢で押し寄せて來たナチュラリズムの如きも、曾てはあらゆる人生上の問題までも侵蝕して行つたけれど、幾何もなく其處には内部の擾亂が起つて來たのを見ても明らかなことであると思ふ。自然主義の滅亡それは其因を「陶酔の快調を追求する人間性の爆裂」といふことに求め得べきことと思ふ。

ネオロマンチズム。私は好むで主義呼ばゝりをしたくはない。けれども格恰な言葉がないから不本意ながら暫らくかう言つて置かう。それは勢いかくあらねばならぬ必然の要求から起つた傾向ではあるまいか。平調を厭ひ、湛水のもごかしさを呪咀するの餘り、時流を變じやうと燥心した結果、美しい本然性を放擲してあらぬ迷路を走つてしまつた藝術家の一群が、眼醒めて再び逆行の果敢ない有様となつた姿である。人間の胸底に固く鎖されて居る憧憬の情熱が再び時を得て發露した、極めてナチュラルな徑路であると言つてはいけなだらうか。

(三)

此等の復活的藝術家連はかう言つて辯解して居る

吾等は初期のロマンチズムへ歸つたのではない。かの空虚な幻影に迷はされたり、影のやうな理想に執着したりする古くさい昔の時流に復歸したのではない。辛い現實といふものに一度眼覺めて來た後の、科學的精神を流過して來た後の、悲痛な人生の修練を経て來た後の文藝である。

私は今その見解を嘲笑しやうとするのでもなければ、抗辯しやうと企てる者でもない。むしろ其かくの如くに復歸した新たにネオロマンチズムと銘を打つた文藝上の主義が華々しく進行してゆく姿に向つて衷心同感を覺ゆるものである。そして所謂苦い現實味を透きて來たといふ活動を以て、吾等の心靈に感ずるあらゆる夢幻を恣に展開して慾しい。人間の本性が革命的である以上、あらゆる時流を一點に停滯せしむるといふことは到底不可能の事に屬するが故に時には客觀主義を大呼するもよい。只然し人間は決して冷やかな一面のみではないといふことを腦裡に印刻

して置く必要がある。

再び言つて置かねばならぬのは、單にロマンチズムのみが私の言ふ陶酔の情調を全部發表してゆくといふ意味ではないといふことである。多くの近代の人達によつて唱へられて居るロマンチズム及びネオロマンチズムの意義が私には鮮明でない限り、私はかの情熱的文藝の凡てを代表するものとして、假に此れをネオロマンチズムと呼ぶ積りである。

(四)

私は文藝といふものに對した時、一面に於て自分は人生の陶酔者であるといふことを忘れたくないと思ふ。嗅げばよくよかな芳香を放つやうな醇美な作品に流れて居るあの甘いビジョンに何時とも知らず誘き寄せられてゆく微温湯のやうな快感を、其のまゝ私の自己として生きたい。情調の幼稚なるを罵られるかも知れない、また一群の人達には思想の因循なるを冷笑されるかも知れない。然し私はそれでいい。自己の果敢なき憧憬をひたすら幻の中に浮ぶ影に求め、其處に響く返らぬ歌を耳にする瞬間に、凡て現在の動搖と不安とを捨て、ゆくことが出来ればいゝと思つて居る。そこに尊い自我の姿を認め、一部分たりとも私の生活の反影を發見することが出来る藝術が生活の具体化ならば、自分の全我を擧げて投じやうと思ふ所の懐かしき世界、それが即ち私の生活の全部であり、また私の藝術であると信じて居る。かくて私は一面に於て藝術の私生兒であるといふことに甘んずると共に一面には人生の陶酔者たり得るといふ悲しい誇りに生きやう。そ

して藝術の内面には人間を陶酔せしめ得る情趣を有せねばならぬといふ私自身の極めて放縱な原則の下に、私を非難せんとする凡ての人達に應答してゆかう。

(五)

私は懐かしき幻の花見る心地の中に居て三重吉氏の藝術を思ふ。たよりになき現實の桎梏に捉へられて、空想の自己を一步一步虐げられてゆくあのもごかしき焦燥の日を、消えんとする追憶と過去の憧憬の中に、思ふがまゝ美し幻を創作して、あゝまで痛ましき自己を投げ出して居る鮮やかな官能描字は、私を快い陶酔の中に引き込むでしよう。捉え得ぬ幻の憧憬、光彩ある官能の働き、汲めども盡きぬ豊艶なり、カルな氣分、こゝに生じた燃え立つ情熱は、是れに接した人の胸に焼きつくばかりの濃厚な印象を止めずには置かぬ。

かうした際立つた異彩を放つ氏の藝術は、すでに幾多の現實に悶え悲しむ人の心を奮つて行つた。そして幾度か語られ幾たびか評壇に載せられた。或者は是こそ眞にネオロマンチズムの代表的藝術だと言つた、又他の人は其處に未だ現實に深い根底を持つた情熱と、嚴肅な生命の核心に觸れる力との缺亡を訴へて、そのネオロマンチズムとして許容する能はざる理由として擧げた。そして且つ氏の作品に表はれて來る情調、生彩、官能に於ては模倣すべからざる特色を有するにも拘らず、此れより窺ひ得る生活は、只美しい夢幻の花と單純なる追憶の空想とのみにして、現實に一度眼醒め、辛苦な努力に身を奪はれてゐる深い人生に眼を移す時、其藝術よりは何の得

る所もないとも言つた。氏の藝術の覺めては求むべきものでないと詳細に説いてゐた。

然し私の見解を以てすれば、氏の藝術の全部は擧げて所謂ネオロマンチズムであると思ふ。私は茲に氏を難する者に答へやう。成る程氏の作品は濃厚であり、肌觸りの好いネルの單衣に包まれた様な氣分に充ちて居る。且つ又現實の焦燥不安より、偏へに追憶の中へ避難所を求めて居る。然しかくのごとくして吾々が其作品に引ずられてゆく中に、其藝術的情熱は果して吾々の生活に何の要求をもなす所がないであらうか。いや幻の花それだけとしてのみ鑑賞して行つて満足することが出来るだらうか。そしてあの何の發見もない昔の遊戯藝術や、譯もなく幻に懂るロマンチズムと同一視する人があるだらうか、私は其人達の所謂現實を流過したといふ辛味に至る所に發見し得ると思ふ。ネオロマンチズムといふものはかくのごとき淺薄な觀察を以て云々せらるゝ程而く狹隘なスフィヤを有するものだと思ふことは出來ん。假に一步を譲つて氏をネオロマンチストの圏外へ出したとする。然しそれが爲めに氏の藝術に何の輕重を問ふことが出來やう。其れを難するはイズムの問題ではなくて、吾々の核心と何の共鳴する點がないかどうかといふことに歸着する。

(六)

「小鳥の巢」は作者の代表的傑作と稱せられてゐる最長編である。未來はいざ知らず過去に於て表はれた氏の藝術的内容は擧げて此一卷の中に盛られて居る様に思はれる。それは氏の數多い短

篇と「小鳥の巢」を讀むだ人は誰でも氣づくことであらう。私は此一篇に關して詳細なる感想を述べたいけれど、それは何時かのこととして、茲には只氏の行方に飽き足らないと思ふ人達に今一度熟讀する様に薦めておくに止める。

最後に一言して置きたい。私は氏を最も懐かしい作家として絶えず氏の作品に注目して居る。それだけ多く氏の前途に深い憂慮の念を禁することが出來ん。世評の如何を顧慮せず、氏の過去の藝術を其儘延長して何時までも永續して欲しい。其弱々しい繊細な印象は永遠に氏の作品を高く推賞することとなるであらう。悲しい思ひ出に咽ぶ時、堪へ得ない破壊の寂しさに打ち泣く時、私は幾度も幾度も氏の作を披いて、そして醜惡な現實に衝突していかに作者が古い懐かしい自己を振返つて見たかを臆ひ、幻の花のいかに動くばかり鮮明に描き出されたかを想像し、其情熱の燃焼に自己をたきつけて悲しい生活を生きて行かう。

(完)

「郷里から十八里も離れて居るんだ」といふことを、私は時々強く感じることもある。かうした時は、「旅の空」といふ気分が、非常に強烈な刺戟を與へて、鐵瓶から洩れる湯氣や、遠く聞こえる街の雑踏などを、一個の漂泊者が、旅の宿に寝轉んで居る心持に調和せしめやうと企てることがある。ある宵、私は此の感じを出來得る限り連続せしめるために、書棚へ手をかけて、古ぼけたノートを引張りだして、書残した友への旅便りを繰返しながら、心ゆくばかり嬉しい追憶に耽つたことがあつた。

記憶はもう散漫になつて居るが、昨夏の旅は、私には忘れがたい印象を残して居る。その気分を復活せしめて、再び旅便りのつもりで私はその一部分を抜萃した。

第一信 石山寺より

若い旅人が、浪漫的な憧憬に詩のやうな幻影を趁ひながら、馬場驛から湖畔へ下りて、琵琶湖の蒸気船に乗つたのは、もう午後五時近くだつたらう。夏の色彩の青い大きい湖面に、舳が切る浪の傳播を見遣りながら、乗合の京女から、種々な傳説をききつつ、粟津原を右に見て、瀬田橋を潜

つた。そよりくと湖面を吹いて來る風に、ふりむくと、比良の峯と三井寺の高い屋根が、淡く眼にうつる。湖畔の美しさには、私はたまらなく喜んだ、三十分ほどで。船は石山の石垣の下へ着いた。

琵琶湖へ來た人は、一度は必ず石垣の上に佇んで見るべきだと思ふ。青い水、白い雲、水草、白帆、靄かけた對岸、私は若い肌から、汗を拭ひながら水國の夏を限りなく讚美した。

船から下りて、一町ほど左へ行くと、石山寺の門前へ來る。運慶湛慶の刻んだ仁王が睨んで居る門を潜つて、昔を思返させる本堂までの道を、兩側の草花に見とれて通ると、幾つか坊があつてすぐ、「紫式部源氏之間」といふ白い紙に書いた字が見える。或る識者は、石山寺と源氏物語との關係を打消すけれど、私は矢張り對岸の連山の上に上つた月が、湖面へ銀波を鏤めるのに見られて、冴えゆく紫式部の筆を思ひ出したと思ふ。

本堂へ上つて、聞き苦しい京訛りの寶物説明を坊さんから、聞いた後、私は月見亭近く湖面を見下して、それからそれへと平安の昔を思返しながら、燃ゆる心に種々な想を描いて、今此の便りを書いて居るんです。

第二信 叡山より

馬場から大津までの支線は、湖畔に添うて走つて居る。丁度三國の濱を思出させる漁火がチラチラと點いて、詩にあるやうな湖畔の夏の宵を、此の水上市に限りなく月を賞して明かしたいと思つた。驛前の旅舎へ瘦せた身を横へたのは、夜の九時近くだつた。

女中が来て「今夜は唐崎が賑やかです」といふ。急に行きたくなつて、すぐ浴衣に着換へて、知らぬ道を、湖に添うて一里近くも歩んだ。有名な巨松の葉に注ぐ雨はいゝそうだが、今夜は月が出て居て、松葉に置いた露が、月光に光るのも、所柄趣がある。

廣い垣に添うて、湖畔の石垣に立つて涼んだ。大津の街も燈にそれと見え、三井寺のも高く光つて居た。

近くに小野小町が幼時に住んで居たと傳へられる家がある。當時、某宮女が忍びの姿で此家へ立寄つた時、小町が歌を奉つたのが縁となつて、小町が宮仕へをするに到つたのだと、誰かの話に聞いて居る。

此等四邊の目新らしい景情に憧れつゝ歸つたのは翌朝の三時。八時頃は三井寺の記念塔の横で、又湖畔を見下して、汽船の煙を眺めて居た。此處は會遊の地なので、すぐ山を下りた。私が再び蒸汽船に身を托したのは正午近くだつた。阪本を下りて、松並木に添うて十二三町、善光寺の前から、婆さんを案内に備うて叡山へ登つた。二十五町といふ峻坂には、疲れて居る身に一層の苦しさを覺えた。要和勞堂で一休みして、兩方に迫る山と山との間に、琵琶湖を扇面として、唐崎の松は要のやうに見えた。

日吉神社や東照宮の輪奐の美を讚え、根本中堂古雅の建物に、山法師の昔を忍びつゝ、辨慶堂で今力餅を食つて居るんです。叡山は雨が多いといふ。今も俄作りの様な雨が降り出した。

第三信 寂光院より

叡山は傳教大師によつて、鎮護國家の壇場たる延曆寺を建てた處である。老杉古檜轟々として天に參する鬱蒼たる大深林の間に道が通つて居る。大師自作の阿彌陀佛がある淨土院、辨慶が行をした跡、その念じた千手觀音、聖徳太子の椿堂、大講堂、此等凡てが、幽寂清閑の中にあつて私は暫く淺薄な歴史の智識を、手繰り返さねばならなかつた。

太子が支那から持參されたといふ沙羅双樹は白い花を咲かして居た。相輪塔を右に見て下ると、元黒谷で、私は此處で案内者に別れた。峻路十八町を、或は石車に乗つて轉ぼうとし、或は滑つて谷へ落ちやうとしたとして、やう／＼八瀬へ着いた。

手拭を被つて、柴を頭へ乗せた女が通る。高野川の潺湲の響きを聞きつゝ、一里行くと大原である。牛がのつそりと歩いて、いかにも此邊は、牛の尿の盡きざる程に長閑である。

村端れの茶屋で訪ねて、私は寂光院を訪れた。白蓮のやうな美しいが寂しい建禮門院の俤を胸に描きながら、熱烈な憧憬の念を強めた。榮華の絶頂から零落の谷底に落された女院は、世を捨て、此處で佛事に歸依されたものである。私は氣高いその絶焉を讚美した。

大原村から、約二十町の山奥で、石段を上つて、其處の尼さんから、寶物を説明して貰つた。女院に侍つた阿波の内侍の木像は白い布を被つて居る。大原や八瀬の女が、常に手拭を離さないのは、此れから起つたのだといふ。脚絆を反對にするのも、矢張り女院の風を真似て居るのださうな。

寂光院へ行く道すがら、私は京都へ行く積りだ、若狭への道を歩いて居た。「虞美人草」の宗匠

さんを笑つた私は、自分の失策を思合せて、思はず人知れぬ可笑しさに聲を洩らした。
響きは水の音ばかり。山と山の間包まれて点々と、家が散在して居る。寂光院の庭に立つて、
美しいが寂しい人々の生活を考へて、私は往昔を、なつかしい思ひに追憶した。

第四信 平等院より

寂光院を出て、私は京都へ行くべく、左右に迫る山と山との間を、脚下に響く高野川の流れを
きつ、暗夜に山裾に添うて疲れた足を引きずりながら歩まねばならなかつた。

八瀬から二里、私は京都へ着いて出町の橋詰から電車で伏見へ着いたのは、夜中の十一時だつ
た。

翌朝伏見の宿で目がさめると、これはたまらぬ篠つく雨である。旅情は動かぬけれど、止まる
べくもないので、私は午前は種々と旅便りに費して、夕景近く宿を出た。

雨の田舎道を西へ半里餘、上鳥羽の淨禪寺は、遠藤盛遠が誤つて切つた袈裟御前の戀塚で有名
である。住職から袈裟の木像と眞筆とを見せて貰つた。眞筆には

思ふ世を身ひとつにしていかにせん

あはれ木々に花の咲けるは

たゞ過去の衣川ごの御介抱あれかしこと、

菩提のたねに書き残しおき候

けさ

盛とうごのへ

残しおき候

と認めてあつた。平安朝の末路の衰頹を表はして居る戀の悲劇は、嘗て英京大劇場で「あづま
の曲」と題して演せられたことさへある。袈裟の死後七百年、眞風蓬々として今に至るも泯滅せ
ず、皇族貴婦人のを始めとして袈裟を慕ひ、讚へる幾百首の歌を見せられて、私は只驚くの外な
かつた。

附近にある松永貞徳の舊蹟と、菅公遠離の時通られたといふ天神川を見て、また伏見へ戻つた。
宇治川畔の旅館に投じたのは、十時近くで、風呂で疲れた身を安めた後、宇治橋へ涼みに出た。
擬寶珠のついた欄干に靠れて、宇治川先陣や、南北朝時代の事を思返して見ると、上流に高い峯
巒や、濁流の響きや、あの黒い雲に、凡て詩として見る歴史の一部分を感ずるのであつた。

翌朝平等院を訪れた。平安朝の建築を代表して、朱は剝げても、一層古雅な鳳凰堂、扇の形は
拵へ過ぎて、古英雄の最期を想はしめる扇の芝、此の側の松に鎧をかけて、源三位頼政が自殺
したのである。河原左大臣の舊跡と傳ふる堂が、その横にある。

和尚さんは、茶を勧めながら、古い物語を僕に聞かせた、今の宇治の町は、凡て平等院の區域
だつたが、南北朝の戦争に焼かれて、只鳳凰堂のみが残つたんださうな。

此附近には、川を隔て、有名な黄蘗山と橋寺とがある。

第五信 笠置山麓より

笠置へ来るために、木津驛で乗換へた序に、僕は和泉式部の墓を訪うた。寺の名さへ確乎と分らず、墓と云つても、本堂の隅に石碑が、無雑作に置かれてあるだけで、明かな確證がないらしい。驛を右へ、五六町の破れ寺である。今井兼平の首洗ひの池は、僕がその横に立つた時、泥のやうな水中へ、あはて、蛙が飛び込んだ。唯見すばらしい標一本に示されてある許り。古英雄の縁りもかうあじらはれては、たまつたもんぢやあるまい。

木津を出た汽車は加茂驛を過ぎた後、木津川の畔に添うて進む。岩崖を劈いて行く處、水緩く山青く、布帆恙なくかけて、實に一幅の山水名畫の感を抱かせた。笠置驛から左へ三町余にして、「從是笠置山登八町」と記した石標がある。屈曲した峻坂を行けば、道に斬込谷、地獄谷、二王堂跡、名切石などがある。名切石は元弘の亂に忠死した人の名を刻んだのだと傳へられてあるけれど、今は惜しむべし明かでない。道もいよゝゝ急となり、石もいよゝゝ多くなつて、上りゝつて、斷崖の上に至ると、此方は絶壁、彼方は嶮山で、水の行衛縦に長く、汀に鶯色になつて、舟が續いて居る。笠置寺で繪葉書にスタンプを捺した。道すがら、天武帝駒繫松、薬師石などがあつて、だんゝ石が多く、岩がだんゝ大きくなつてゆく。虚空藏石には弘法大師の刻まれた佛像が、明に見られる。此處から胎内竇、搖ぎ石、貝吹石に至る間は、風景佳絶、木津川の清流を望んで、水青く砂白く時々帆船の上下するのが見えて、低徊去るに忍びない。絶頂の行宮跡の前に立つた時、追憶の涙に暮れて、四邊の峰巒を、あの後醍醐帝と藤房との悲歌に合せ、正成の「われ獨りあらば……」の言に合せて、打見遣つたのである。山の名の出所たる笠置石は、天武

帝御登山の時、再遊の標にして、御笠を置かれた石である。

有名な記念碑は北面半腹にあつて。高さ幅各二丈余の自然石に「行宮遺跡」と彰仁親王の字で記してある。一字の大きき四尺五寸、皆金彩して、遠望するも明かに讀み得る。今驛へ歸つた所である。汽車の出るまでに、まだ小一時間あるので、ノートの鉛筆を外した。

第六信 吉野山より

奈良も曾遊の地なので、寄りなかつた。王子驛で乗換へて、高田へ着いたのは、夜ももう十時近くだつた。翌朝楊子を啣べながら、庭に立つて、空を仰ぐと、青天に白雲が、繪の砲烟のやうに渦巻いて居る。稀な天候に、私は思はず微笑んだ。

此所から吉野口驛まで三四十分、途に壺坂の觀音堂を山の中腹に認めた。驛から三里の道を、私は馬車を驅つた。黒い箱の荷馬車の様なのに、白い日除けの飾りけのないのが懸つて居る。埃の立つ道をがたんゝといはして走る。下市村から北六田村までは、吉野川の畔に添うて、澄んだ水に、鮎が居ないかと思はれた程である。川口から筏さへ下りて来る。石を噛み岩を巻いて、急瀬碧潭相連つて、其奇景は限りなく私の目を驚かした。

北六田村から、新道に添うて登ること十二三町で、後醍醐帝を祀る吉野宮がある。此處の神水といふに渴を醫して行くこと、又十町余、松檜の茂る小丘の上に村上義光の墓がある。此所から遙に金剛、葛城、龍田、高取の連峯を見渡すことも得、脚下を走る吉野川の清流も亦非常に眺望がよ。

俳人一茶曰く「此の様な末世を櫻だらけ哉」と、春ならば彩雲谷を埋め山を廻つて、爛漫たる光彩は目を奪ひ、心を恍惚たらしめるものがあるだらうに……然し吉野の地を踏んで居るといふ者だけでさへ、忠義の念を湧かせ、犠牲の感を強うせしめる。南朝の歴史は詩の極なるものである。杉の香と櫻の芳とは、あたりの空氣と水を染め、その地を訪ふ者をして、感慨の涙に泣かしめるのである。

一目千本を経て、大橋を渡り黒門を潜れば、仁王門近く静御前の舊跡がある。吉野皇居金輪王寺の跡即ち今の寶城寺は、それ二町、西の尾といふ處にある。藏王堂は山門第一の巨刹で、十八間四面、高さ十一丈、建築宏壯雅美を極めて居る。花のやうな英雄、花のやうな美人、花のやうな忠臣、花のやうな貴公子、花のやうな若武者、此等を追憶しつゝ、護良親王最後の酒宴を催された四本櫻の跡を見て、吉水院に義經辨慶の遺址を尋ね、それから羊腸の坂を上下して、如意輪堂を訪ふた。堂の扉に情を刻んで、死と戦うた正行の髻塚、跡を追うて山路を辿り、「墨染の袖」と詠んだ辨の内侍の至情塚が傍にある。後醍醐帝塔尾御陵は、此處からすぐ石段を上りつめた處にある。建武中興の英主、萬世盡きざる御怨恨と共に、此處に眠らせ玉ふを思へば、萬感交々つて、自ら手ふるひ、胸おごるのを覺える。

英雄の兜に散り、美人の袖に散つた花の香を、思ひながら、竹林院や、横川覺範の首塚を見てから、不朽の眞理を思ひ、日本及び日本人のために、一種の宗教心を起さしめる此の地に、なほも憧憬の念を残しつゝ、ふりかへり歸路に着いた。

山麓の茶屋で、夕飯後草鞋の儘、此の通信を書いて居る。

第七信 高野山より

高野口驛前の葛城館へ着いたのは夜十時。翌朝早く登山するつもりだつたから、すぐ湯に入つて、床へもぐり込んで仕舞つた。けれども連日の疲労で、寝過して、それでもなほ睡眠の不足を啣ちつゝ起きたのは六時に近かつた。

紀の川を舟で渡ると、すぐ慈尊院で、此處には弘法大師御母公の遺跡がある。それから町を十丁餘で、眞田幸村の遺跡もある。尼寺の庭に墓碑があつて、傍の松は頂が延びないとか云つて居た。幸村の逃穴といふのが近くにあつた。九度山の麓に添うて行くと、高野山から切出した材木が、道々山と積んである。此の邊は橋を渡る毎に、橋詰の小屋から、老爺が首を出して、橋渡を請求する。

丹生川は紀の川の支流で、水少なく奇巖怪石連りて、その突兀たる下に潺湲の響きを聞く。一里餘り此の川に添うて行くと、推出村へ達する。徒歩に馴れない人は、此村まで人車を驅り、此處から駕籠で登山するのを常として居るそうだ。急峻三里を堪へに堪へて絶頂の金剛峯寺へ着いた。道すがら、山と山の間に、僕の知人玉村氏の發明に係る運搬器が材木を積んでジーンと音させ、頭の上に響いて居た。

途次、弘法大師の踏回められたと傳へる足跡を存する四寸石、極樂橋、袈裟かけ櫻、いろは四十八曲り坂、花折坂を経て女人堂に到る。古へ女は此堂から内へ入ることを禁せられた所である。

山頂の廣さは詳かでないが、寺院墓地に添うて、人口三千の町が出来てある。古は寺の數九萬九千と傳へ、塊亭の句にも「霧となる香のかほりや九百坊」とある如く、山上寺院櫛比して、鐘の響き、讀經の聲は晝夜たへすして始めの登山者にして、途方に迷ふ者があるそうだ。正塔院で中飯を食つてから、墓地を案内して貰つた。

此山には旅舎なく、皆寺で旅人を遇するのである。小僧さんに給仕して貰ひて、精進料理を食つたことを思ひ出すと、苦笑にたへぬ。

墓所は距離二十五町、何んなに早く見ても一時間はかゝる。兩側に並ぶ墓碑の數は幾十萬とも知れず、中にも僕の目を惹いたのは、敦盛熊谷、上杉謙信、明智光秀、石田三成、市川團十郎、眞田幸村、松尾芭蕉、曾我兄弟、賤ヶ岳七本槍、春日局、武内宿禰などの墓で、殆んど枚舉に遑もない位である。明智光秀の墓は、幾度積んでも、いつの間にか誰れかが碎いて仕舞ふさうである。墓地に混つて、嵯峨帝棺懸け櫻、汗かき地藏、姿見井などがある。姿見井は、之れを覗いて姿の映らないものは三年の後命が絶えるなど、傳へて、有難い連中の話柄に上るのを常とする。玉川に懸る御廟橋の下に、模様のある魚が泳いで居る。之れも弘法大師が、焼魚を助けて養つたからだなど、途方もない材料を持つて居る。

此處から奥の院へ行く途に、英照皇太后及び歴代帝の御陵、燈籠堂がある。燈籠堂は例の長者の萬燈貧者の一燈で有名な堂である。その傍の燈明杉は、毎年三月二十一日になると、自ら燈明が灯るんだそう。

寺院内には、石童丸で名高い苜蓿堂や七堂伽藍がある、六時鐘は秀吉朝鮮征伐の時、持つて來た鐘で「平家」に特色ある瀧口入道が、籠つて居た庵の跡には、梅が植えられ、横笛が鶯になつて、鳴きに來ると僧さんが、懇ろに話して聞かせた。

夕暮は、私は同伴と共に、金剛峯寺の總門なる大門に靠れて、遠く南海の波を眺めて居た。二時ほど下りた時、もう四邊は眞暗くなつて、漸く道添ひの茶屋で提灯を借りて、推出村へ歸つた。折柄七日余りの月が山の端に懸つて、水面にちらちらと銀波を鏤めて居た。山も家も、暗の中に夢の如く横つて、脚下を走る潺湲の響きに、私等は暫く、涼しい夕風に吹かせつゝ、紀の川の橋の上に、高く北斗星を仰いで、故郷を思返して居た。

灯を消して、月光をたよりに草を踏みわけて、宿へ着いたのは、夜の十一時。山道十二里の往復に、草鞋を外す足には、自らの意識の幾分が缺けて居たはゞ草臥れて居た。

第八信 義仲寺より

和歌浦から浦傳ひに、大坂から明石舞子と、なほも計畫を違うして、寢に就いたが、故里の用事のために、高野から戻らねばならなくなつた。

幾分疲勞を休めるために、翌日は正午近く迄、床に居たが、數日來日毎に十里を歩んだ足は、依然として、醫するに術を見出し難くあつた。

午後近く、驛を出て、奈良と京都に二三時間宛を費して、大津迄來て旅舎へ入つた。せめてもに竹生島へでもと思つたけれど、船の都合で、意の如くならず、翌日馬場驛から約二町、義仲寺

を訪れて朝日將軍の墓に詣でた。

嗚呼悲しむべきは古今東西の英雄の名残りである。干戈天下に旁午して、兵馬倥傯、肝腦徒らに地に塗れ、腥風血雨渦巻き亂るゝ時、泰然自若として、壯榮を縦にしたる彼れは、俱利伽羅と鎌倉に、美しい詩のやうな追憶を残しつつ、満腔の怨恨を抱いて粟津ヶ原の露と消えたのである。芭蕉葉そよぐ寺の庭に立つて、私は英雄の石碑の前に三斗の熱涙を濺いだ。此の墓と並んで、芭蕉翁の墓がある。一匹の暮秋の蟋蟀にも人知れぬ涙を惜まなかつた翁は、愴寥なる英雄の亡魂に涙を流したことは、不思議でない。墓に刻まれた「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」といふ句を誦しながら、義仲に濺いだ涙を、亦芭蕉翁に滴したのである。

粟津の晴嵐を受けた芭蕉葉青き此の寺へ、古來幾多の詩人俳人が涙を濺いだことだらう。俳人の寄進に係るといふ燈籠の陰に、ノートの端を千切つて、君に今此の最後の通信を書いて居るのである。

眞吉の家——M·M·生

(一)

眞吉が車で父の家へ駆け込んだのは、まだ暮れた許りの頃で、降り足りない様な梅雨晴れの北の空には、暮れの明星が一つそれでも眺められた。途中から雇つた、眉間に刀傷のある、老年の車夫は、眞吉が故郷の香りに接した最初のものであつた。もう六十に追付け手の届きそうな年頃であつた。凹凸した人通の全くない峠道を、喘ぎく引いた。こうして歸る眞吉には如何にも夫れがじれつたく、亦氣の毒な様にも感せられた。でも此車夫の口から、御國訛りで、範圍の極く狭い故郷の話しや、眞吉の家の昔の事情が聞かれたときには、他人には單調しきつたこうした話しも、眞吉には能く嗅ぎなれた母の腋臭を嗅いだ心持で、しんみりした氣分を抱かせられずには居れなかつた。

「わしや是れで若い時や随分な亂暴者でがんとしたの……………朱鞘の刀さ一本ぶつこんで、俠客ぶつたもんでがす……………」

「おまえ……………何だね村上じや俠客達だつたんだね……………」

「俠客て程の膽玉じやごはせんがの……、賭場荒しでは名を賣つたもんでがす、此傷さも若けい
ときの記念で御はすがの……」

「へえそいつは面白い生活だつたそうね。じや家の祖父なんか熟知てるね」

「へい御屋敷の御隠居様には御厄介さよつく御懸け申したでがんす。御隠居様さー御家老様。且
那樣さーほんに力彌の様な御小性士で御座らつしやたでの……」

こうした、老先の短い者には有勝ちな昔の思出許り中心になつた話しも、真吉には御維新の時代
に小藩で時めいた祖父や、初々しい小性姿の父の面影が濃紅な江戸繪に表はれて來る人物の様に
思はれて、暗い思ひに包まれた胸にも、明るい影が堰入れられた。

懐しい故郷の町の土の香りを嗅いだときは、一面六月の薄靄に包まれて、ポーッとした夕暗の中
に、葉歌が軽く大氣を振はして茶摘女の伊達な頬被の手拭が白く明瞭と見られた。

森閑とした昔作の家の敷石の上に、真吉が希望した通り、極く静かに梶棒が下されたとき、火
の消た様な茶の間から、ボン／＼時計の七時が手に取る様に聞えた。

「今來ました」と真吉が蹴込の上から沈んだ調子で訪つたとき

「まあ坊様御早……」と益の聞き馴れた聲の後にはヒョロ長い父の姿も見られた。車夫が一
しきりガラ／＼と歸去つた後、玄關脇の梅擬の下藪には、が寂しく歌つて、真吉の編上げを解く
益の手には涙が散つた。

(二)

今日明日と云ふでもあるまいがの、ごうも身体に滅切り衰弱目が出た様だて案じられるわの。

それに床擦れも出來たでの……」

「醫者は如何云ふんです」

「須貝さんも満更手放したわけでもあるまいがの……意識がごうも朦朧したでの」

「食物は上るんですか」

「さーむら食での、健全な時分から魚が好きだて、刺身位でのふさ／＼食ふのは」

濕つばい疊の上へ洋服の儘で座つたとき、こうした會話が真吉父子の間に取り換された。

真吉には父の斷念きつた様な態度が、如何にも不快に感ぜられて一言で良いから、胸の晴れる
様な強い言葉を父に返して見たかつた。でも十二疊間の古金襴の袋に入つて、貞宗の据かれた床
の間を背後に、キチンと座つた片氣な父の顔に、此數年來引續いて起つた真吉一家の不幸が刻ん
だ衰弱を讀んだときは何となく哀れつばい情緒に捕はれないわけには行かなかつた。

母は奥の八疊に伏て居た。此頃は著く普通の夜具が重く感ぜられるので、軽い郡内の吊夜具に
してあつた。

真吉が眞青な蚊帳を潜つたときに、母の枕下には益の手で、真吉の買つて來た鶏や、滋養葡萄
酒や、菓子折が小奇麗に並べられて居た。

「御母ちゃん、眞が來たよ」

「おう眞かの御母ちゃんも此んなになつたでの、見ておくれの」

それでも真吉の云ふ事はよく病人に通じた。

未だ全々上りきらない六月の梅雨の晩は中々蒸し暑かつた。母のいた／＼しい、衰弱きつた胸を見たとき、もう一度彼のふつくらと肥えた、真吉の小さな顔を埋めた元の胸が欲しかつた。

「御前も歸來たし、氣も落付くで反つてえ、かもしれんどの」

「え、大丈夫ですよ。御年が御年ですから」

蚊帳の外に立つてる、寢衣姿の父に真吉はこう答えた。母は丁度今年で五十六歳であつた。

其晩二年ぶり、定紋の深められた家の夜具に包まれて母の側に寝た。三晩の汽車の疲労で、身体がひどくだるかつたが、興奮しきつた真吉の神経は中々寝付かれなかつた。久しく使用れなかつた夜具の中から、淡々しい微の香は、沈まりきつた夜に、真吉に孤兒となる運命の可能を耳語く媒介の様に感ぜられた。

恐いものでも見る様な氣分で、行燈の弱い光りで輝された、げつそりした母の顔を真吉はジツト見つめた。

夢でも見てるのか病人の顔には時々冷たい笑が上つて居た、蚊が一疋奈邊から入つたか枯れきつた母の顔に血を吸つて居る、真吉は自分の身に非常な侮辱を受けた様に感じてすぐ力強く拂つた。

(三)

真吉が歸省てからは流石に真吉の父に、心勞の幾分は分ると云ふ重荷を下したときの様な心

意氣が、真吉にも十分窺はれた。

夫れに此一週間手前からは、真吉とは従兄弟異の房子——東京の女學校へ行つてるのが——輕微な衰弱で歸山て居るので「真吉さんの家は無人だから」と云ふ所から保養旁々看護に来て居るので、幾分灰色な真吉の家の空氣も寂れきりにはならなかつた。此姪の家には真吉より三つ年上な姉娘を頭に、未だ肩上げの取れない娘小供がゾロ／＼して居た。真吉の母が子供好きだつたのと、人不足で真吉が寂しがるので、よく皆で遊びに来た。そして何時でも三晩位は御定りに宿つて歸つた。内氣な真吉には、姿形のしなやかな、内氣な房が一番好きだつた。

「伯母さん御話して頂戴……」と外の小供達が真吉の母に迫つて、御維新の時代に、よく御殿で奥様の御相手をした、華麗な御殿生活の模様を興がつて居る間に、真吉と房子はいつもずつと奥の北の十疊で濕っぽい空氣の中で、皮文庫から取出した何枚續きかの濃艶した色の虫蝕んだ江戸繪や、京繪を見て楽しんだ。

「房ちゃん、真とは合性でもあるぞい、何て仲が良い事ぞの」と真吉の母が云ふのにつれて、四つになる時子迄が大人た調子で

「真ちやんと房ちゃん、御夫婦よ」と云ふのを聞いて、内氣な房子が案外平氣で居るのに、反つて真吉がポツト赤めた事もあつた。

「御伯母さんが御悪いので御歸んなさいましたそうで……」と大人びた房子の會話を聞たとき、すなくと發育した房子の姿を見たとき真吉の心には、房子

と自分との間には永久越え難い溝が出来た様に感ぜられた。

七月に入つてからは、雲片れ一つ浮ばない天氣許り續いた。裏の梅林は今年は當り年だつた。すずかに生つてる梅林の中に此頃は益を相手に實をちぎつて居る房子の水色な、大きなリボンがチラチラと新緑の繁みから見られた。

「房ちゃん御手傳しようか」

「否え、ようござんす、まあ此の大きい事差上げませうか」

「じやたつた一つ」

小供のときから酸性が極く好きだつた眞吉は、顔を滋かめ／＼大きな梅の果實を食つた。母は此頃では宜く眠る日が多くて、目が覺めるときはいつもニコ／＼して、所在なく横になつてる眞吉を見まもつた。

「御母ちゃん、足でもたゞきませうか」と眞吉が尋ねても、

「いゝえ良いでの」と鈍んよりした目をしばたく事が多かつた。

母は追々物言ふ事迄が臆空になつて來たらしかつた、聲にも力と云ふものが少しもなかつた。

「どうも此頃滅切元氣が無くなつた様に見えますが」と部厚の金指輪を光らして居る、白い指の醫者に尋ねたが、別に明瞭な返答も聞かれなかつた。

變化——井口白汀

暗の中を手さぐりに行くやうな現在生活にとつて音もたてない靜莫の中で世間から遠る様な間にも彼は過ぎ去つた色々の事を顧て獨りで心の中に往來する妄想や迷想に耽るのが自分丈が享樂し得られる範圍だと思ふてゐる。

傍の火鉢には追ひ／＼白い灰が積つて來た、振り向いた拍子に灰の粉がハラ／＼とどび上つた、彼は幾日も／＼斯様した風に透つてゐるそして何もかも伴つたといふ様に感ぜられた自分がどれほどの事が自分を満足させて呉れるか、どれだけの犠牲が自分の歡心を買ふ爲めに必要であるか、これ迄の所爲の總てが努力であると考へたとき現在自分に残つてゐる殘骸が餘りにつれなくなつた、自分は精力の脱けた細胞のかたまりであると思ふて見た、去年の五月に思ふた事と今日に出態した事が甚だ相違してゐる自分の現在で未來を判斷し得るならば到底もこれ以上一步すゝむ事が出来ないといふ事も度々あつた、僕は已に未來に生活する時期が最早や自分に逸したのだと思ふ事などは常である、自分に與へた犠牲が他人にでも與へた様な氣もするが但し目前に自分の自分に對して爲した敗殘のむくらはある以上はそうとも思はれぬ、そして自分の空な

現實に空な幻影におそはれつゝもあるこうした生活がごまでもつゞくのだらうをそして又何の爲めだらう、彼はそう思ふ度毎に故郷を出た當時の思出が轟々と胸に逼る。自分で實際自己嘲笑を感じているか知ら、生に於ける殆ど消え失せた自分の希望！熱のさめた個体を飽く迄も大切に圍つて置くといふ氣にもなれないやうなると彼は自分に對する絶對の愛を否定したくもある。こんなせまい都の一角に固つた生活がむしろ曠恣な原始の生活を戀した。

去年の五月園の溜池の水が平に湛へて赤い菖蒲の芽が浅い水際にくつきりとのぞき初めた頃として漸く柔な薄草が一葉二葉佐保姫の恵に萌え出したあの色彩の鮮かな頃を思ひ出す、はつきりとした春の日和に一二尾の生へた蛙をいぢめて暮した様が切に胸奥の銀線に共鳴を興へる。背戸の畑で仕事してゐるお清といろゝの手傳をして春の耕に身をかけて群れて行く鳥の姿をながめ又は雲雀の急しい囀りにめぐりあはす自然の優美を歎賞した事そして長閑な春の野邊に只二人して居た繪の様な自分の幻像がいきもきらず襲ふ、その頃よく遊びにきて御家騒動とか俠客の話をかかしては樂がらせて居た隣の作爺やは亡くなつた事などにも氣をとられてあつてではないかこゝうではないかと今一度あれと話でもしたいやうな氣がし又その時分あの爺に似た風の種々の人間を考へては見たがあの人程慰みになつたものはないらしい、腰は曲つてはいたがまだ仲々丈夫で頓と死なんといふものを眼中に置かなかつた。苗取る頃にもよく家の世話をして呉れた人だなどと色々に浮べたてゝ彼は現在の孤獨といふものに對照して見た。

外には冬の嚴しい寒さが荒れて戸の隙からスト、入つて來ては温い回想の連續をたちきるほどに感ぜられた。

盡き果てない彼の迷想は近頃の境遇が彼の過去に對して餘りに色彩のうすいそして餘りに無趣味なむしろ一種の畸形としか見えなかつた嬉しいとか楽しいとか優しいとかいふ事は最早や塵程も彼の享樂の範圍に見出されなかつた、萬事がこうだから何でも彼の對照としては馬鹿に刺戟を與へないそして次第々々に一種の霧の世界としか思はれないそして彼はあてもなく逍遙ふて行くとして幽幻のイメージが彼の行く所に執着している、こんな無意味な自分にあの餘計な像がどこから來るかそしてどこ迄行くのやら一向に解らない、尤も彼は神經衰弱症な事は一般に認められてゐる然も一層これを強くした動機の一つは彼の妹がはかなく黄泉の客となつたため沈鬱になつて自然と友情から隔りつゝある、そしてこれ等の事を悉く外界の罪として依然として自分に抵觸するものを一も二もなく否認する様になつた。

煙草から舞ひ上る薄紫の煙の中から天井の板目を數へたり又は疊目を調べたりする様なつまらぬ事でも今では一種のひきつける様な癡癡を見出される或る時はカチンと煙管をうつその強い響は彼のエラ、く、した神經にしつこく感應するとなほもむしやくしや、で矢鱈になぐる時としては壞れるその度にはいつも癖の様に損をしたといはぬ許りの顔でながめながら窓の外に放り出す。彼の友達も色々と宥めてはみたものゝ一概にまたかど表面丈はともかく内實には相變らず退ける。で誰も彼も困つたとのみいふて居る。

その様な冷酷な中でもひよつとすると兩親の事を思ひ出す會て一人にその事を語つたのでむし

ろ吃驚させられた、彼のユーモアの知己はその微妙な或るもの、中を流れている無音の閃きである。一人にしては廣すぎると思はれる八疊の室に火鉢を相手に灰の粉をおごろかし乍ら鬱陶しい氣でいるそして習慣の様に入逢頭にしめやかな外に出るのであつたその頃が自らも自分には適していると思ふてゐるらしい。

冬の日足の短い今日此頃彼は灰淡色に被はれた自然に暗り行く時分にいつもの通りに出かけた。然も想ふた後は、今日もその通りである。

暮れ詰めた空からは折々霞交りの風が見舞ふ、商店の小僧や労働者がせまいところを遠慮もなく迂つて行く様にほの暗い中に繰り込まれる。暫くして街燈がポツ／＼と點され初めてからは往來の人の顔もぼんやりついて丸いのや角のや種々なものがそれから彼の前を現れた。とそ一度毎に彼は若しやと思ふては止つて心當りはないかとする間に直ぐ消えて行く姿がさすがにつれない。彼はそのまゝ呆つとして道の中程に立つては忙しい世の中に自分丈取り残されたもの、様に感ぜざるを得なかつた。道に敷きつめてある小石も凍つて足駄にきしめる音がさへて聞える並町の角から折れる、強い嵐から外れて急に暖く思はれてつと頭を上げると本通りにまつている吾妻上衣を被た女達や半纏にまどふた職工風情が更にせしい足音に混つていた。いつも通る三階の家の横側にはいろ／＼の廣告が重つている、仕事なしの彼は身をもて餘した様にすりよつて呉服屋下駄屋などの數枚をはぐつて行くと何れもこれも同じ文句の下に人を引きつけやうとしてゐるのみである、彼は何か破天荒な廣告でもがなと思はず知らずそれ等の月並式のものど遠つて懐手

のまゝ的所もなくはなれた。壓へをとられたために嵐の吹く度にバラ／＼とおどかす様にけたましく騒ぐ、通りには相變らず群集がごや／＼とおしているのが上手から灰白色の夜を透してぼんやりと見える。あちこちの店先きにもうす高く圍つている中には大道商人が例の様に人を集めている酒に酔ふた土方らしい二人がおどろな聲で話しながら傍を通過するのに眼をとめたとき。

「おい如何だい此の暮にや」

「なにさおいらが家にはごろ／＼犬の様にいくつも／＼食ひ潰しが居やがつてな」

「そうと己ら見た様な貧乏人に許り如何して餓鬼があゝあるのかな」

「如何いふ譯かな、といふたつて……する譯にもいかねでな」

千鳥足にゆらめいて酒臭ひ呼吸を夜の中に漂しながら群集の中を練つてゐるやうにヨタ／＼と行く、人は一齊に視線を向けた、彼は自分に向けられたのではないかと思はれてもみたが人目につれて見遣れば街燈の下にまろぶ様に急ぐ影二つ。

「さて皆さん……」

不意に中央から聲がおこる皆の人は號令の様に再び元の如く二つの瞳孔が少な机の上に二三の小間物をのせてある風呂敷に向けられた。

彼は人目につくのがいやになつた、そろ／＼と又歩き出す安江町の角には古びた提燈に肉屋の在所が知られる差し向ひの玻璃屋から出る瓦斯の光に布き詰められた金米糖の様な霰が反射してゐる、二三丁先の黒塀の圍つた屋敷の中から枝さし延べた松葉の間から淡い空がかすかに見え

る、暗い木陰には人影もなく風が搖る度に迂り落ちる雪粉も音もたてずに浮いてくる、たゞかすかに大路のごよめきが繊細な官能の氾動に應ずる、彼は暫く立ち止つていた。ふと彼の土方を思ひ出したとして通る暮の悲みがたはいもなく胸を轟せる。夜嵐がしみ／＼と髓まで渡つた身振ひして何か暖る工夫はないかしらと直ぐ例の家を思ひ出してその方に向きを變へた。

細い溝には何時も不潔な泥水が流れているが夜のために閉ざれて囁く娟々の水流れと聞える。いろ／＼な塵埃が投棄せられるこの溝もこれ迄降つた霞交りの雪に掩はれて無垢の清浄が表面を飾つてゐる彼はそんな自然の味をささる餘裕はなかつた、溝の盡きた所に小路がある狭いその町のごごかゝら八時を報じた許りにこの家も／＼戸締りしてある折々あたる風は起す様になが／＼とふるはせる暫くにして場末に出た。

押壓せられた様な風が例の草叢からさは／＼と来る又一しきりジューとけた／＼ましく叫びながら荒れ通つた後には葉のない梢だけが灰色の空に透視せられ眼をさへぎるものは濁つた空氣の中にゆつ／＼している並木のみである。稻の切り株にはこんもりと雪が被はれて一直線に進んでいる道の彼方からは人の來る様子もない、こんなすさんだ景色はとてもこれ迄のおだやかなこの場所のものとも思はれない只蠻地としてはやゝ凄みの不足ないはゞ新開地の氣がした、砂山の家はこゝからそんなに遠くない。

數分の後左に折れてとある門前に止つた門はさしたらしい一向に開かない中を窺て見ると格子の隙からは光がもれている。中ではとき／＼せはし相な足音もする。入らずこのまゝ歸らうと二

三步出てゝは見たものゝ折角これ迄來ながらと思ふとぐつたりして歸る氣にはなれない、思ひ切つて門を二つ三つた／＼と中から應へのひびきがくる。直ぐ手燭のゆらめきが淋れた庭の土を照してあたりがばつととする。彼は誰がきたのやら覗き込みたくもあつた。

「何方？」

といふまゝに門の戸が片方開かれたのでスート万套のまゝ入つた。

「おや貴方今頃如何して」

「餘り淋しいので散歩の序手に足先きが向いたの」

「まあ寒かつたでしやう御入り」

愛嬌よく迎えてくれたのが彼には何よりの愉快である様に感ぜられた。

「御免、誰方も御出でゝすか」

と彼は入口の敷居の上につ立つたまゝ尋ねた、彼女は

「えゝ、さ寒かつたでしやう」

と自ら長火鉢の一方に座り乍ら席をすゝめた。姪の美代子はそのまゝ席を興へると臺所に行く、すぐスワ／＼と足音がする。

「あら他雄さんね」

と障子を開けて入らうとしたときに溢り乍らいふ、姉はすぐ美代子のもとの座を取つた。

灰均をかけた平な火鉢の三徳の上にかけた土瓶の中からはポツ／＼湯氣が出ている床間を後に

している姉などの様子から推すとこんな場末には暮の風も一向吹いて来ない様に思はれた。

彼女は最初近頃の模様をきいた。次第に話頭を轉じては此頃の活計だとか子供の事など語り出す御得意の清元などの話はさつぱり出ない他雄はこの話が最も好きだったのでこれらの世間話は耳に止らないでさ、流し乍ら「さ一杯」と出された煎じたての茶をすつた火の氣にほんのりとほてりながら或時は煙草を吸ふたり笑つたり話したりした然しそれらの事は彼の筋肉上の運動にか過ぎなかつた煙が消えて行く後からは姉の顔が最初に浮び出した、黒い影法師を壁に投げて話の序手に種々と真似するのが一々映る、その真似よりは移りゆく影の方がよほど面白く見える。

「姉さんあの影を御覽」

「君ちやん母さんの影法師を御覽」

美代子の下に左様いふ度毎に子供等はふり向いては見る。

「まあそんな事何でもよいよ静として御出で」

と叱る様にいふ

「だつて可笑しいですものね」

と側から他雄はつけ加へる

「まあそうと妾先達買物に出かけたの、すると大變な雑踏なんでしてね」

さも自慢らし相にも亦田舎物の都見物に出たときの驚きの様にいふ「今晚も如何でした」と問はれたとき彼はむしろ返答に窮したし又そんな事には何等の興味も持たなかつた、で大抵なところで

御茶を濁した。姉はそれからその晩の事共を永々と語り出す實際姉の話よりも語る、といふた方が適當である。彼は御免下さいといふて安座を許してもらう程であつたそれでも姉はそうやつて裕くりと云ふ、あの店先きの反物の品物は如何とか縞柄は如何とか何んな番頭や女中が出ていたとか景氣は如何だとかいふ事から石につまづいて轉ぼうとした事迄も御茶をすつり乍ら話した。

「でね、あの時にこれを買つて来たんですよ」

といひつゝ、筆筒の上にそのまゝ載せてあつた風呂敷包みを持つて来て價はいくらとか何とかと繰り返して聞かされた、そして彼はたゞ鸚鵡返しに答へるのみで次第に温つてきた身体には小唄でもきく様な氣になつてしまふ。すると隣の間から美代子が「母さん一寸」とよばつたので姉は倉皇に退いた。後で彼は傍の新聞をよみはじめた、近頃は頓と新聞などに無沙汰してゐたのであつた。そして現實世界とは異ふといふほどに現存している隠れたる方面の暗示が刻一刻と峻烈に痛切に見える。

外には相變らず粉雪がばらばらと枝を拂つて時々は積つた雪も山茶花の重そうな瓣の様にぼたりと落ちるのもつい椽先きいきこえる臺所には姉が誰かと話してる。

手持無沙汰になつた後はつくつくと燃えている火をながめやがては無造作に火箸をとつて灰を掻きならしたり或は暫く手を休めては姉の話に耳を傾けてもみた。彼はさつき入つてから姉の話に苦められて碌々外を見る隙もなかつたが今の時を利用して見廻した。

三尺に仕切つた小さな床の間には活けた許りの水仙が生々しくなつてゐる、其傍には一寸の長

持が置いてある。この長持だつたけ小供の時分に父が無理に買はせられたのだつたと臆ろな記憶の中から思ひ浮べる——此様いふと彼の思想には一種新な發見でもした様だがそれらのものは過去から現在迄同じ場所に在り同じ感慨が浮ぶのみであるのだ——その上には中位な鏡臺がある逃げる様にそうとのぞいて見た醜も美も奇も變もすべて自我の中に没入して自分の顔は悪いとは否難されなくなつた、すべてをけなす彼にもこんな事を思ふ事があると彼の友人達に知らせ遣りたい位である。こんな事をしてゐた折柄向ひの障子が開いたのが映つて急いで退けようとしたとたん極り悪る相に自分から、

「何でもないさ……いつ迄も長くゐたんですか」

と自分でこの事柄を強いて口に出すまいと語を外した。

「變でしたよ」

と姉はげん顔付きで狼狽した彼の或るものを發かうとする。

「變ですどころか僕の方こそ辛目に逢はされたよ」

「あのね紺谷町のが來たんですよ」

と言葉をさしはさんで

「御承知でしやう」

と待ち設ける様に問ひかけた。

「此間姉さんのところで伺ひましたつけ」

「左様でしたね、その父さんを家の父さんがよく知り合ひなんですよ」

こんな言が二つ三つ言換されている、姉はまた茶を入れ乍ら「氣をつけなさいよ」といきなりこんな事を言ひ出したが彼にはまるで水でも浴せかけられた思ひがした。

「何時にですか……歸りにですか」

「え、歸りにさね」

と飽き足らぬ様な曖昧な返事に終つた。

彼も何だか極り悪る相に姉を、マジ、と見てゐた目鼻口などが次第に壞れて優しいと思ふ姉は一種のダンスを顔にたゞよはせてゐる、こんな盲膜の幻像が何時迄つゞかと思ふてウツトリしてゐる、と九時の知らせがなりひいて不意に振動した瞳には今迄の像も消え失せて更けて行く夜の室には慕しい姉の姿が相變らず火鉢の彼方に在る。もしやと思ふてまた目をこすつて見たが今度は矢張り元のまゝであつた。

「姉さん」と彼はいふた

「何に？」

「何てさ」

「何ですか」

「まあいゝですよ」

「さつぱり譯がわからないの」

と断はられる様にいはれて彼はいふ手蔓を失ふ様な気がした。

「まあ此様です、そのね、貴方の顔が變に見えたんです」

「そうでしやう」

「まあそう云はずとこうなんです」

「そうですか」と知らぬ振り

「さ御覽なさい二人で静と見詰るんです」

と他雄は強いて二人でみつめる。可笑しさの餘り吹き出した、笑聲の失せた後には夜の淋しさがしみ込んでくる、場末の夜にはときどき街路の蕎麥屋の噺れ行く聲と締つた鈴のひびきの外には何等の旋律もない。

「姉さん今晚は晦日なんですわね」

と彼は又しても淋しい思が再燃して凋落の悲憂が印せざるを得なかつた。で突然こんな事をいひ出した。

「そうなんです」

といはれて見ると矢張り彼も一同人並にタイムに運ばれて人生の幾分かを徒費した現在がいたましかつた。

彼は十時になると姉の家を辭した。彼は最先き來た道とは別の道に出た。犬の遠吠へも聞へて來る、時々屋根から落ちる霰のサラサラとした音もくる、傍の家からの煙突には何かしらぬが細

い煙がフワフワと浮き出てゐる、人通のない所だと彼は今更らに淋しい様に思ひ込んで行く。如何にせまくても自分丈けには十分だと懐手によたよたやつて行く不意に黒いものが眼の前にぶら下つて叱つといふたかと思ふと今迄よりは一層冷に感ぜられる、と止つて薄明りを透して見ると途中の小間物店にはまだ客が二三人何か喋つてゐる。直感的に知つてゐる彼は足の向き方も自然と判明つて二つばかり角を過ぎた。そこはもう本通りであつた、足駄の跡もいよ／＼延びると共に道の平さに彼が再び懐手のまゝ歩き乍らさきからの事が繰り返されて自分にとつてはむしろ大膽な遣り口だと思ふたが但し又何となく恥しいと思はぬでもなかつた、そしてあそこを出ると自分は元の冷い木阿彌になつたのだと思ふともう少し長く居ればよかつたにと獨言の様に考へて歩くとき不意に電柱に突き當り相にひやりとすると陰から

「旦那一東御持ちなすつては」

と花賣りの爺やにいはれて彼は人を馬鹿にしやがつてといはぬ許りに通りすぎる爺やは恨し相に見送つてゐる間に已に彼は雑沓の中に没した。

家を出てから彼は五時間もたつ、彼はこうしてあちらこちら歩き廻つたので著しく空腹を覺えた、何か飲食店は見だが生憎く都合のよさそうな家も見えなかつたがやつこの事で瓢亭といふうごん屋によつた、室には若干の人が居た。

「早くだぞ」と彼は再三注意してやるとトントンと梯子を下りて例の大きな聲で〇〇〇と呼はつた。

松平家忠、松平康忠、松平景忠、松平康長、松平康成、菅沼定盈、設樂貞通、西郷家貞、奥平貞能等が相備として控えて居る。次に小笠原與八郎長忠、大須賀五郎左衛門康高、松井左近忠次等が陣取つて居る。三陣は石川伯耆守數正、松平真乘、松平信一、松平忠頼、松平忠澄、内藤家長、平岩親吉、酒井重忠、同忠利、鈴木重時、同重愛、島田平藏等なり。中軍は即ち家康の本陣で、大久保忠世、本多廣孝、本多忠勝、榊原康政等を従へて控へて居る。信長より副へられたる稻葉伊豫守通朝などは遙か後陣に控へさせて、専ら家康一手の勢を以て越前勢を破り、大功を立てんとする心掛なり。

越前勢は一萬餘人、朝倉九郎次郎景紀、黒坂備中守、平泉寺、豊原寺の僧兵、氣比の社人等三千餘人を先手として大路村三田村へ陣を移し、家康と姉川を隔て、相對す。徳川の先陣、酒井左衛門尉すきまもなく下知して越前の先手に弓鐵砲を打かけ打かけせめつれば朝倉案に相違して俄に色めき立ちたれば酒井小笠原の兵共勝にのりて我も我もと進む、中にも小笠原の手の者、伊達與兵定鎮、吉原又兵衛、林平六、中山是非之助、伏木久内真先におどり出て、鎗を合す。門奈左近右衛門俊政は猿の皮の投頭巾を頭形の兜にかけて著し、地水火風空の前立物付け、わざと指物を指さず。渡邊金太夫は朱の雨笠に金の短冊十八枚付けたる大捺物を指し、堤の上にて奮戦した。酒井、水野、小笠原等、時分はよきぞ、進め進めと下知し、先陣二陣總掛になつて押寄する。

越前の先手、白山平泉寺の僧兵、元來剛勇の譽高く、氣比の社人亦頗る強し。朝倉の陣色めき立たるを見て、平泉寺の法師、いざ追拂はんと云ふまゝに、勝に乗たる酒井の軍中に突撃して之を破り、水野を走らせ、小笠原を追ひ、大須賀を討つ。

朝倉之を見て、すはや軍は勝たるぞ、つゞけつゞとて競ひかかりて戦へば徳川の先陣右往左往に潰亂して、本陣近くまで平泉寺の僧兵押寄せ、戦は既に朝倉の勝利と思はれた。

徳川左京大夫家康、時に年二十九歳、味方の先手は既に利を失つた織田はと見れば、淺井に討破られて之も本陣が危い。家康齒嚙をして、本多豊前守、松平左近將監を召し、東西を見るに味方既に利を失ふと見えたり、この上は我旗本をくつしか、れと身をもんで下知すれば聞もあへず本多平八郎忠勝、黒絲威の鎧に、鹿角打つたる兜、唐の頭つけたるを被り。黒き馬の太く逞しきに黒鞍置いてまたがり、眞一文字に越前の後陣に打入り、榊原小平太康政、本多廣孝等横槍を入れ、安部四郎兵衛定次、槍脇を射る。旗本の諸士こゝを先途と戦へば、越前勢裏崩れして惣敗軍となり蜘蛛の子をすらすすが如く散亂す。前波新八郎、同新九郎、黒坂備中、魚住龍門寺、小林瑞周軒等、ことごとく戦死した。

この時北國無双の勇士、眞柄十郎左衛門直隆、五尺三寸の大太刀をふるつて奮戦した勇ましい物語があるけれど、今は略する。

平泉寺は養老元年に泰澄法師の開いた寺で聖武天皇は大野郡一圓を喜捨せられ、其後平清盛、同重盛、木曾義仲、源頼朝、足利尊氏等の尊崇によつて越前の北半を領有し、九萬石永九萬貫、僧坊六千の多きに達した。その軍記物に見えて我々に面白い史話を提供してくれるのは、平家物

語、源平盛衰記に見えて居る長吏齋明の返忠、義經記、參考源平盛衰記に見えたる義經北國落の時に平泉寺に宿つて寺僧に取り圍まれた話、太平記に見えたる義貞打死の條、及びこの姉川合戦の奮闘とである。しかし姉川の功はあまり知られて居ないから大体を御紹介して置きます。

二 如々僧正

僧正諱は義敬、號は如々、俗姓藤原、文化丁丑端午の日、下野河内郡宇都宮に生る。父は佐野甚左衛門眞虎、鎮守府將軍藤原秀郷の裔なり、母は岡井氏といふ。

天保乙未、日光山に登り、九年戊戌八月七日修覺院前大僧正慈觀に就て受戒す。辛巳、東臺邦範僧正に就て經律を研究し、法華を討論す。弘化二年乙巳二月東叡山に入りて御内常應院と號し、嘉永三年庚戌禪定院に主たり。

嘉永六年癸丑十月法花堅義し、阿闍梨となり、十一月法印權大僧都となり本蘭色衣を許されたり。

嘉永七年八月に至り、義教大僧正の法資となり、九月北國白山別當に任せられ、越前平泉寺玄成院(賢聖院)に住持たり。

玄成院、このとき禍難多し。

一白山社頭雷火に罹りて燒じし、二凶民黨を企て、法を犯し、三拜殿零落し、四借貨多くして倉廩空しく、五福井里坊燒失し、六院主死し、七愼徳公薨す。義敬よくこの頽勢を挽回し、修理

甚だ力む。

安政二年乙卯前院主を葬り、長日護摩を起し、里坊を再建し、四年丁巳參府して御朱印を受け、五年戊午中宮拜殿を再建し、六年己未白山天嶺本社を再建す。

文久元年、備荒倉を平泉寺一之瀬の二箇處に建て、杉を白山に植えしめ、半を社用に供し、半を村民の植うる者に與ふ。村民欣然として之に従ふ。又よく貧を賑し老を恤み、田畝を開いて後人を益する事頗る多し。

元治甲子山室を再建し、慶應二年丙寅開山千百回忌を營み、六月別山假宮を立て、十月、越前の富豪を糾合して永代禪定講を結びぬ。

徳川幕府その功を賞して衣服を賜ふ事三度に及ぶ。

慶應三年五月願許されて職を辭し、九月上洛す。このとき玄成院、古例によりて妙法院宮院室となる。

十月朔日有栖川職仁親王歌道の門弟とならせ給ふ。二日正三位平松時言卿の猶子となり十三日權僧正に任ず。十九日參内し天盃を頂戴し、二十四日紫衣を許さる。十一月平泉寺へかへり、無漏庵に隱る、故を以て無漏庵僧正と號す。

紫雲日記はこの榮譽ある上京の歌日記なり、その中にいはく、

慶應二のとし心ありて都へよみて遣しける

白山の雪の下なるうもれ木もいつしか春にあふこともがな

同じき三とせといふ卯月なかば平貞夫かもとへよみて遣はしける
山住は青葉綴の衣きて秋のにしきを待ちそわひぬる

菊月二十日といふに越の國を立出て都にのぼりけるにわたしたの寛隆
送りてまかりければ道にてよみて遣しける

別行いまほともなく歸山かりの旅路の日數縮めて

神無月朔日有栖川の宮へまかりければ幟仁親王寄道祝と書玉ひて
うたよめとありければ

言の葉の玉をつらねて敷島の道の榮は代々にかはらし

おなじき二日といふに平松殿へまかりければ父子の卿打揃て
見えければよみて奉りける

老松もまた若葉もうちはへて同じみどりに千代や榮む

時厚卿御かへし

我宿も千代やさかへむ白山の名におふ松も根さし止めて

はじめて内にまふのほり

我身にも天の羽衣まれに着て雲井にのほるけふの嬉しさ

時言卿ことほきてよませられける

大君のみことかしかみ位山さかしき峯もゆたにのほらむ

時厚卿

たくひなき大内山にまふて來てあけの衣にうつる日かけは

幟仁親王詠せ玉ひける

天津日の光しそふて白山の峯にたなひくむらさきの雲

紫雲日記の名はけだし最後の親王の御歌にとるなり。

戊辰三月福井松尾寺にて一夏經を講ず、參聽者甚多し。同寺にて詠する所の草稿松尾詠草一篇
存す。二三を抜いで左に掲げん。

一聲は近くきこえて村雲を隔つる越智の山ほととぎす

落葉かき枯枝折添さしくへて木のめにるさへ詫しかりけり

木隠の宿のひさしのあれにしを洩りくる月の影を冷しき

思ひきや花に馴たる都人霞か關をけふ越んどは

何事も乏しき身と成果て、法の布施さへ乏しかりけり

ともすれば綻なましもちすりの忍の衣心して着め

明治三年越智山大谷寺に移る。四年三月疾病にかゝり、八月越前南條郡畑村妙永寺にかくる。

五年壬申平泉寺玄成院にかへり、明治六年一月二十三日院代部屋にて西面端座しす示寂す。

爲人淳正寡欲、持律嚴肅たり、交る所の士皆風流にして潔白、郷黨その徳を欽仰す。

大谷長氏(舊大谷寺住職今越知神社々司)の書簡、以て僧正の人格を見るべきを以て左に掲ぐ。

拜復殘暑嚴敷候へ共益御堅勝奉賀候陳者如々僧正御遺物有無御問合之處生方にも凡二ヶ年餘も御住居相成候へ共至而謙遜なる御方にて小生杯へは該の品杯更に無之漸く短冊懸ヶ一枚大毛筆一本置土産として武生在平吹と申候寺へ御移轉相成候次第同寺より御病氣にて御地へ歸山相成趣に承知仕居斗に候云々

姉——妹——横湯生

倉地醫學博士未亡人

姉 娘

妹 娘

女 中

某病院副院長醫學士

某銀行支配人

時

現 代

所

金 澤

英 子 子
不 二 子
ひ 中 忠 三
田 崎 良 三 郎

倉地氏の應接室

(病理學者倉地眞吾氏の書齋たりしものを其死後應接室に代用せり、部屋全体に絨氈を敷き詰りたり、書籍棚の中

には夥しき洋書硝子戸越しに見ゆ、壁には數多の解剖圖掛かり、故博士の肖像を描きたる油繪の大額室の上手の方に掛けらる、中央の卓の上には、新聞、草花の鉢、巻煙草入れと灰皿、廻りに椅子四脚、上手と下手の方に入口ありて各扉を有す。

縫子 (年は四十に近し、但し三十五六才の扮装、どこもなく品の具はれる様子、机に向ひて手紙を書き終り、呼び鈴を鳴らし、封筒に納めて宛名を書く)

ひで (十八九才の女中、下手の扉を開けて入り来る)

縫子 (ひでの入り来るを見て、直に) ひでや、御前御苦勞だがね、此の手紙を急いで届けてお呉れ、田崎様へですすよ。

ひで (手紙を受取) あの、銀行の叔父様へですすね、畏りました。

縫子 急いでだよ。

ひで はい(と急ぎ去らんとす)

縫子 あ、ちよいと、あの英子にね——お前今行く前にですすよ——こゝへ来て下さいませとそう云ふてお呉れ。

ひで はい。(と扉を開けて去る)

縫子 (机邊を放れて中央に來り四邊を見まわし、また、上手の椅子に掛けて、右の指にて軽くピアノを彈する如くに卓を拍つ)

英子 (下手の扉をあけて入り来る、年齢二十才、現時流行の衣裳、束髪、美しき顔) お母様、何か御用(と云ひつゝ、卓の側に來る)

縫子 英子さん、まあお掛けなさい。

英子 はあ(と云ひながら手近にある椅子の位置を直しながら腰を掛け灰皿に手をかけつゝ、母の顔を見る)

縫子 ねえ、英子さん、田崎の叔父さんから、何か御話がありませんでしたか(と英子の顔を覗き込む)

英子 え、ありません。

縫子 (微笑みながら) どうでした。

英子 あら母様(と視線を外らす)

縫子 (なほ覗き込むやうに) 英子さん、あの話には決して不承知なんかしないでせうね。

英子 (早口) だけご、私、まだ早いと思ひますわ、勉強しなくてはならない事はまだ、山程あるんですもの。

縫子 まだ勉強!

英子 え、音楽だの、生花だの、それに佛蘭西も。

縫子 そんなに勉強したつて……英子さん、母様を御覽なさいな家庭をもてば、女の學問や教育なんぞは、それ程役に立つものじやありませんよ。

英子 あら、そんな事を仰有つたつて、今は時代が違ふのよ、母様の時代とは天地の差なんですよ。

縫子 何と仰有つたつて、やつぱり女は留守番より外には仕方がないですよ。

英子 留守番だつて! まあ! そんな事を仰有るから留守番になつてしまうのよ、女の留守番時代はもう過去になつて終つたのよ。

継子 たは、そんな事を思つてゐる内が花なんでせう。まあそれはそれとして、ねえ、あの叔父様から話があつたでせう——、今度忠三さんを家の養子にする事について——忠三さんなら英子さんも、大概異存はないでせう、立派な醫學士と云ふ肩書もある事だし、貴方とも不二子さんとも氣が合つて、大の仲善しだからね、今度田崎の叔父さんには、よほど御禮を云はなければなりませんよ。

英子 まあ、母様のやうに頭から押し付けられたつて仕方がないじゃありませんか、私まだ「承知した」つて叔父さんに云ひやしませんのに、よく考へてから御返事申しますわ。

継子 そんなに考へなくとも此の御返事なら出来そうなものですがね。

英子 だつて母様、二度と取返しがつかない事ですもの。

継子 (少しく間を置いて)それは左様に違はありませぬけれど(間)だがね、英子さん、どう考へてもこの話は早く取りきめた方がよいかと思はれましてね、何分良人で死くなつてからは、女ばかりの事ですから、それに、忠三さんなら、お父様の跡取としても立派な方ではあるし、貴方も不斷から仲善しですからね、さあ、何もかくす事はいりませぬ、いゝでせう。

英子 (口を尖らして)母様、お父様の跡取と私の夫とは違ふものかと存じて居りますが——私が相續人であるからは、財産丈は御受け申さねばなりませんまいが、夫の選擇は自由ではあるまいかと思はれますが……。

継子 随分理窟ばい事を云ふのね、だから叔父さんも貴方は御轉婆で嫌ひだつて仰有つてよ。

英子 私だつて叔父さんを嫌ひなんですもの、だから叔父さんにはどうとも御返事を申さなかつたのよ。

継子 だつて叔父様は、貴方が大概は承知したつて仰有つたがね。

英子 いえ、まだ承知なんて云ひやませぬわ。

継子 では一体貴方はどうする積りなの。此の事は不承知なの？

英子 まだ定まつてゐないのよ、私、まだ忠三さんの了簡が分らないのよ。

継子 あんなに中が善い癖に、どうして分らないつて？

英子 それはね、母様、忠三さんは私を妻にする氣なのでせうか、それとも、お父様の名望のもとに倉地家と云ふものを續ぎたいのでせうか、どちらなんでせう？

継子 まあ、此の子は！それは兩方なんでせう、貴方は先刻からそんな事はつかり仰有るのね。

英子 だつて私にはそれが分らないんですもの。

継子 分らなくたつて善いじゃありませんか、必竟は同じ事なんですもの、然うでせう。

英子 いゝえ、母様、それは違ひます、根底から——お腹の底から違つてゐると思ひます。

継子 そりや、理窟をつければ何にでもつくものですよ、貴方は此家の跡取でせう、だから忠三さんが倉地の苗字を名する時には當然、貴方の夫となるのです、何も違ふ事はないじゃありませんか。

英子 さうじやありませんか、私、乞食の子だつて構ひやしません、身分だとか、地位だとか、學問

だとか、そんな事は少しも氣にかけません、貧乏人の娘でも本當に妻にしたいと云ふ忠三さんの御了簡なら、たさひ、あの人、學士でなくとも副院長でなくとも、私、今にも承知しますけれど、お父様の娘だから結婚したいと仰有るなら、お斷り致します、人形を扱ふやうな事はして戴き度いとは思ひませんよ。

継子 女といふものは、そんな理窟を云ふものじやありませんてば！忠三さんにすれば家名を嗣ぐのもお望みでせうし、又貴方と一緒にする事も望んでお出でになるのです、何方にした所で結局は同じ事を、くじつばく云つて見てもつまらないじやありませんか。

英子 母様の御意見と私のとは、太古と現代の違ひ、何と云つたつて母様には分らないんだから仕方がないわ。

継子 それは忠三さんだつて倉地家と云ふものには大層尊敬を拂つてお出でなさいます、だから、なほ更、貴女を奥様にしたいと思ひ込んでおしまひなせう、人間の魂と、身体に通ふ血の流れとは、つまりは一つものなせう、あれの、これの、と分けて云ふのは實際の理をはずれてゐる事だと母様には思はれますがね。

英子 そんな舊臭い理窟は駄目よ、私はね、私でなければ不可ないといふ方の妻となり度いのですもの。

此の時扉を叩く音す。

継子 あら英子さん、ちよつとお待ちよ。

英子 何方かいらしたの。

継子 田崎さんでせう。(と立ち上る)

英子 叔父さん？(と不機嫌な顔す)

継子 (扉の傍に行きノックに手をかくる時)

英子 母様、私の意思は決して變らないのよ。(と云ひながら上手の扉を開きて去る)

良三郎 (某銀行支配人、年齢四十五六、美しき髻、背廣の洋服)

英子さんの聲がしたやうだが。(と云ひつゝ、奥の方の椅子に坐す)

継子 只今あちらへ行つてしまひました。(と答へ、呼び鈴を鳴らしながら) 先刻、手紙を差し上げましたが届きましたでせうか。

良三郎 丁度私が銀行から歸つたばかりに御手紙を拜見したので、早速着物を着換へずにやつて來たのです、いやどうも、銀行の方が忙がしいので閉口しますな。

継子 いつも御世話にばかりなりまして實に御禮の申しやうも御座いませぬのですけれ、ご何分良人が死んだ以後は、誰れと云ふ心易い方もないので、遂に、あなたの御力を借れるやうな譯、然し、そう度々後家から手紙を差し上げましては、と思ひまして……………

良三郎 は、なに、親友の眞吾君の奥様から幾度手紙が來ようと誰れが何と云ふものですか、まして私は御當家の後見人ぢやありませんか、誰れだつて非難するものはありません。

縫子 ですけど。(と微笑む)

ひで お粗末な御茶ですがどうぞ召し上り下さい。(と紫檀の盆に乗せたる、青九谷の茶碗を良三郎の前に置き、静かに去る)

良三郎 まあ、そんな事はどうでもよいとして、あの話はどうなりましたか英子さんは、こんな事を云つて居りましたか。

縫子 さあ、その事について今日も来て戴いたのでですけど、英子はほんとうに理窟ぼくつて困りますよ、私を眞實愛して呉れる人でなければいやだと何とか申しまして。

良三郎 は、いや、英子さんは、なか／＼隅にはおけません、同じ姉妹とは云ひながら不二子さんは全く性質が異つてお出でになるからね。

縫子 え、不二子はまだ年がゆきませんし、それにどちらかと云ふと少しおとなしい性質ですけど。良三郎 そう、不二子さんは全くおとなしい、然しもう子供ではありませんよ、近頃は随分忠三君

とは中が善いようですからね、は、は、は。
縫子 そりや姉妹とも忠三さんとは中が善う御座いますが。

良三郎 だが、どうやら不二子の方が反つて忠三君を深く思つて居られやしないかと思はれます。

縫子 まだ、あなた、あれはほんの子供ですよ、それに學校へ通はしておくせいか無邪氣なことから云つてゐますのに、戀なんと云ふことは………。

良三郎 いや、そりや誤りです、不二子さんだつて、もう十八にもなつて此の四月には學校も終る事だから、其の位の事は十分承知して居られるに相違はない、然しさすがは親の前だ、ね、少しは遠慮もいるさ、そりや。

縫子 さうでせうか、不二子が？

良三郎 私はたしかに忠三君を慕つて居られるのだと思ふがね、然しそれがあなたの腑に落ちないなら、いつか忠三君と不二子さんが話をしてゐる様子を御覽なさい、ごんなに温順しい娘さんだつて此の道だけは別ものだからね。

縫子 だけど、不二子は(と云ひかけた時)

扉の外に足音す。

良三郎 誰れか来たんじやないですか。

縫子 ひででせう(と立ち上り、扉を開き、ひでを見て)ひで、何だい。

ひで (扉の外に小腰をかがめ)あの奥様、只今、山中様が御越しになりました。

縫子 忠三さんがいらしたの(と云ひつゝ良三郎を顧る)

良三郎 忠三君が來たら、こゝへ通してもらひませう。

縫子 では、こゝへ御通し申しなさい。

ひで はい。(と外面より扉を閉つ)

眞三郎 奥様、丁度よい、不二子さんの心をためすには。若し深く思つておられると知れたら、忠三君は彼娘に譲りませうぞ。

縫子 さうね、じや、早くこちらへいらつしやいな(と上手の扉を開けて共に隣室に姿をかぐす)

忠三 (某病院副院長醫學士、年齢二十七才、色白く丸顔、眼細く眉鮮明、兩人の去りしあとへ、下手の扉を開きて入り来る、四邊を見まわして) や、誰れも居ないな。(と云ひつゝ、卓の傍なる椅子に掛けしが、思ひ直して別室を尋ねる心にて上手の扉を開き、來かゝる不二子と面を合はす)

不二子 (温順なる性質、年齢十八才、色白く姉に較べてはや、丸顔なり)

忠三 (一足さがりて) 不二子さん、田崎の叔父さんは。

不二子 叔父さんは今直きに御出でになるでせう。

忠三 (うなづきて) あ、そうですか。

不二子 あの、忠三さんがいらしたから、お相手なさいつて仰有いましたの。

忠三 さうですか(と不二子と並び歩き卓の傍に立つ)

不二子 母の掛けたる椅子の位置を直して座し、伏して失望の念に打たれたる如くす)

忠三 (兩手を卓上にむきて身を支へ、不二子の顔を見詰め) 姉さんは。

不二子 姉さんは頭痛がするつて机に寄り掛つてゐらつしやるのよ。

忠三 母さんは。

不二子 お母さんですか、茶の間でせう、おち様がいらつしやるから。

忠三 (うなづく)

不二子 姉さんと呼んで來ませうか。

忠三 英子さんを。間をおいて) いや、それには及びません、その内にお出でるでせう、まあく二人で話でもしてゐませうよ。(と云ひつゝ、巻煙草に火をつけ、側の椅子に座す)

不二子 さうねえ! あなたと姉さんとは何時までもお話が出来るわねえ。

忠三 不二子さんとも出来るじやありませんか。

不二子 だつて私はそういつまでも此の家にある譯には行きませんもの。

忠三 あ、そうく他家へお嫁に御出でになるからでせう。

不二子 お嫁に! まあ、私、お嫁になんか行きやしませんわ。

忠三 それは、そんな譯には行かない、遅かれ早かれ、奥様になる時期が来るものです。

不二子 私、あなたが家へいらしたら………家にはゐない積りです。

忠三 私が來たら家にゐないつて。あんなに仲善くしてゐながら。それは一体何故ですか。

不二子 何故つて! その譯があなたには分らないのですか。例へば茲に一本の山百合と一輪の小百合とがあるんですよ、所が、其家のお坊つちやんが——其の御坊つちやんを小百合が大變好きなんですよ——朝な夕なに山百合を愛で、接吻なさるとしたら小百合はどんな心持がしませうか、ねえ、忠三さん(と涙ぐむ)

忠三 (目を睜りて) 不二子さん、あなたは!

不二子 (伏して涙を拭ふ)

忠三 え、貴女は私を……思つてゐて？ 本當に思つてゐて？

不二子 (聴かじやうになづく)

忠三 不二子さん、眞に貴女は私を(と叫ぶ)

不二子 (つゝと離れて上手の椅子に兩腕を投げ、聲をたて、泣く)

忠三 (不二子の後方に立ちて) 不二子さん、そんなに貴女が思ふ程なら何故もつと早く打明けて呉れなかつたのですか、も少し早かつたら、何うとも仕方があつたのでせうが。

不二子 だつてあなたは姉さんと大變仲が善いんですもの。

忠三 そりや英子さんとはばかりぢやない、不二子さんとも同じ位仲が善かつたでせう。

不二子 同じ位つて丁度同じやうに思召していらしたの？

忠三 え、同じやうに、いや、反つて、貴女の方を深く思つて居たかも知れません。

不二子 (燃ゆるが如き眼に暫し男の顔を見つめて) 嘘！嘘ですわ忠三さん、若しあなたがそれ程の御了簡なら何故姉さんとお約束を遊ばしたの？

忠三 それはね、あなたのお父さんの跡をつぎたいからです、お父さまの名望と、地位を肩に掛け度いから、そして此の書齋の主となり度いから、そして又お父様の遣り残した事業を大成したいからなのです、然し不二子さんの姉さんを妻としたら、貴女は永久の妹でせう、いつまでも……いつまでも……睦ましく暮せるでせう。

不二子 永久の妹！その永久と云ふ事がどんなに私を苦めるか知れませんが、私は永久の妹よりは永久の他人の方が、いくら望ましいか知れないと存じます、ね忠三さん、私は何故姉に生れなかつたのでせう(と云ひつゝ、忠三の腕にすがり、聲を立て、泣く)

此の時隣室にありし縫子及び良三郎現はれ来る。

縫子 (茫然として敢て言を發せずして不二子の姿を熟視し自ら覺る所ありしが如き体をなす)

良三郎 (縫子に従ひて入り來り) 奥様、子供はいつまでも小供じや居りませんよ。

英子 上手の扉を半あけて此の様子をながめ) あら不二子さんは、お轉婆ね！

幕

夕 煙——大谷 繞石

八十四

夕煙大津は暮れて比良の雪さやかに映る湖の漣
炊ぐにや蓬船の蓬煙して繋ぐ柳の雨に垂れたり
門前の銀杏大樹や寺ならん雪の旅路に暮の鐘きく
いつなりしいづこなりしかその人の黒き瞳の眼のみ記憶す
煙る炭灰に埋めてふと思ふ燃ゆる思の埋め終ふべき

暗 黒——井田 虎男

雪ふかき谷の間に聞きなれぬ鳥の聲して夕暮に入る
めざましに又ねぢかけて唄いはせ本にあきたる自らを慰す

われらなほ時計の針か又しても會うて別れてかくて経る身の
われらふたり別れ住む身の遺瀨なこの寂しさを何にたぐへむ
本とちて木馬の上に春の空見入ればひとの思ひいでぬる
われも亦あやかしの子の美しき瞳のかけにありと思へど
行燈のうすき光りにすかし見し眠る小鳥のいぢらしさかな
芽をふきし柳の下に佇みて夕月見れば物思ひいづ

夜のなやみ——山本 白聲

五六日旅より歸り電燈をひねりぬ部屋の如何に淋しき
部屋のもの皆黙しありそと觸れど薔薇は冷たし冬の夜かな
あるかなきか市街靜に歸り來る遅き夜中の我が姿かな
いつもの坂この提灯の影行けば何にやらん眼になつかしきかな
笛打の一寸止みたる一人居の部屋にちらかす茶碗と灯影

八十五

算盤と提灯と只關せざるものゝ如くに部屋にあり朝
 脚氣やみ足をのばせばうす明く傍に灯瞬きをする
 ガラス窓すべて濕へり圖書館にせまれる屋根の雪ずりの色
 冬の部屋歸り來ればヨドホルム机の傍の夜のなやみよ
 部屋掃きて窓開けしまゝに冬の山いと瘦せてあり炭をつぐ時
 朝あけの障子の裏に電燈のうすく光れる快き色
 心よく雪に晴れたる窓際の赤きインキの長くひく影

赤 き 帯 — 佐藤曙汀

牢獄のはりごに寄ればしみくくと月の青さを味ひてけれ
 わきみする刹那の隙にいちはやく鏡に寫す赤き帯かな
 新聞の廣告欄も讀み終へてまたかへし見ぬ人待つ間
 軽きなやみ濱海道の花ざかり右とひだりの別れ道かな

夕月は何とて泣くぞ朧夜の花のすがたを忘れじと泣く
 花咲けば大工の妻もうす化粧思ひ出多き春となりつゝ

淋 し き 心 — 龍溪玄深

あわれにそむきたりしと思はねど淋しき心抱きてねむる
 月の夜は佐渡の濱邊に船よせて雄々しき君の歌きかんな
 我等には歌ふべき歌なし海にしてうら若き胸の血潮鳴る時
 その家の鐵の門こそつれなかり觸るれば寒し倚れば冷し

床の上白汀

ほんのりとした東空の
うす暗を縫うて来る鈴の音
仄かにまごろむ束の間の
僕の今朝の夢はほんのりと

薄い敷布に添寝して
もれてくる時計のセコンドを
聞くともなしにとろくと
不安の襲うた今朝の夢

黒い天井に這ふ光が
つれない意識の上に
おぼろに匂うたその時に

細い夢路はつき果てた

鋭い頭痛がぐるぐる様に。

燻つた豆洋燈の光が

昨夜くりひろげた「毒」のよみさしに

淡い刹那のゆらめきを投げてゐる

寒い戀

べいはいぐえん

情ない嵐は木枯の間から猛獸の叫聲かと。

高く低く呻つてゐる。血潮の渦きを押へて

浮いてゐる月影を見たとき

思はず出た一語

静かな靈感を興へて
眠つてゐる様に賤家を浮せて

ヴェールを被つた森に
梟のとぶとばかりに
音もたてず流れてゐる光が
なほも深くしみこむ

叢雲に追はれながら移り行く後から
黒い影がぼかした如く地に這うた

待ちわびた山茶花の一瓣に

浴びせかけたライトの雫。

あたりは淋として

夜の薫りは寒く匂うた

玉 琴

高樓の夢味氣なし

紅蓮の焰に歎つなり

羅敷の衣夕には

色悉く褪せ果てつ

墨堤花はさかるとも

涙を濺ぐ幾度か

珠簾かけまく月の夜も

只縹緲の空に恐づ

荒城物はいはねごも

老松事は語らねご

月と花とに粧ひつゝ

管絃高く乾坤の

微妙の樂にいやと酔ひ

我世いみじと榮えたる

諸人今は陰府なりと

聲なき暗示ぞあはれなる

寢覺もくらしき富士の川

貴人劍提へご

蘆の亂れぞおごろなる。
芙蓉の峯の雲あれて

夕残をとめぬ露の上、
思ひは重き黒金の
衣に宿す哀の極
心を刺すや弓の跡

薄暮黃鐘調——日色瑪尼

——(春雨外五編)——

春 雨

戀の銀矢か夢の矢か
提琴の弓の白い毛か
ほんのり霞む野の末に
涙に濡れた月の夜を
瓏銀重く音もなく
しっとり降る春の雨!

廓へかゝる草土堤の
青い柳の蔭に立つ
蛇の目翳した美しい
若い舞妓の足指に

しほしほと降る春の雨！

奥の院で假寐の
蛾緑淡い稚子の頬を
夢の名残かなつかしく
迷ふてのぼる香爐の
煙をめぐる春の雨！

薄荷酒よりも甘い濡れ
ぬらせ濡せ春の雨
御殿女中の塗駕籠を
牡丹模様つばなもようの振袖を
黄金の緞子の引き幕を
しっぽり濡せ春の雨！

桃の宵に泣く娘

若い娘せむぎが泣くぞへな
あはれ娘あはれが泣くぞへな
稚い緋桃わかしひにとりついて
小枝こえだにすがり泣くぞへな

何が悲しい何が物憂い
死んだ父御ていごに逢ひたいか
別れた若衆わかしゅが戀しいか
暮れ逝く春が名残おしいか

あはれ娘あはれが泣くぞへな
樹蔭こかげに月の面おもてをよけて
若い娘せむぎが何故に泣く

泪の露

待宵まちよひの花びらはなびらに置く露つゆの玉

あはれそは逝きし春の泪よ！

片枝は蕾、片枝は
ひらきそめたる花ごろも

阿夏清十郎が無實の罪を
洗ひきよめし泪の露よ

あれ花が散る、葉が日被ふ
それ、その露を散らすな消すな

待宵の花びらに置く露の玉
あはれそは逝きし春の泪よ！

薄明の星の花(四行詩七編)

I

「書いた、愛した、生きた」
STANDHALの一生を懐しけれ
藝術の夢、戀の幻、
薄明の星の花。

II

KHAYYAMの碑に紅き薔薇はほほれ
MUSSETが墳墓に柳は芽をふけり
實に詩人は尊きかな
われ死なば京都五條橋下に沈めよ。

III

薄暗き陰鬱の窓に
今日もまた吾は青ざめし夢を吹き
運命の翁の灰色の絃に噓べり

時雨るゝ宵の病床の悲しさよ。

九十八

IV

無果樹の葉はすたれて溝に落ち
空は遂に晴るゝことなくして秋は逝けり
わが女よ！濡れ重りしそなたが振袖に
哀れ深き歌をかゝせずや。

V

紅き雲は秋の夕ぐれの空に流れ
柿の樹の蒼き影は頽れたる土塀に映れり
あはれ年若き放逸の子の無頼なる憧憬よ。

VI

「美」の前に羞澁み恐怖する末世の凡俗よ！
尊き藝術の殿堂に足ををいるゝこと勿れ。
汝等はこの野鄙なる賤民の子にして
紫摩黄金の祭壇は踏まむに畏れ多ければ。

VII

RINBUD の細腕の紅に染みし夕べぞ
権八の小紫に罪業を語りし夕べぞ
唄へかし
汝、美しき詩人よ。

新体試作二編

I. 冬の夕ぐれ

冬の夕暮

九十九

戸に凭れば
胸の内は冷き
渦はくるひ
黒き鳥は
暗陰の影を
心に投げたり
心嘆き行く
嗟嘆の笛

II 春の朝

夢みる
春の朝は
霧に浮いた
淡黄の草土堤
乳緑の樹立
桃の薫りに

戀の影

深夜

青ざめし幽霊は
怨恨の苦き風に乗走りぬ
緑錆の狐火のうす笑ひ
黒き夜は盤石の鬱憂に沈めり
昏瞑の星の狂死
血！戀の生首。

(完)

『趣味と修養』を讀みて

法科大學生 杉 田 久

百二

梅が咲きました。春の光が近づいて來ます。先生には別に御變りも御座いませんが。

此の間は御著「趣味と修養」を買いました。わがけで一晩面白く過すことが出來ました。で失禮だとは思ひましたけれど、讀後の感じいふやうなものを書いて見ました。

嘗ては、各地の演壇に花を咲かせた講演ではあらうけれど、さて愈々一つに纏めて、活字に組んで、世の人々に存在の價値を問ふのだときまつたときは、何となく愛娘を獨り長途の旅に立たせる心持ちがせられたこと、推察する。自分はそこを思ふて、この筆を採つたのだ。

由來講演そのものを、一字一句の遺漏もなく、速記的に寫した原稿そのまゝの著書は、平明に失して、何所となくだらしなく、間隙多きものと心得る。然らばそれ程も間隙ある原稿が、何故に聽者の心に飽き足りなく思はしめぬであらう。言ふまでもなく、高低定めなき音調と、變化極まりなき身振りなどを以て、遺憾なくその空虚を補填し、引き締めて、渾然たる形態を備へしめるからである。と身分はどうから信じて居る。それ故に、講演集を著書として公衆の前に提供せんと欲するものは、よろしく出來る限りの訂正と、増補と、削除とに意を盡し、緊縮せる筆致と、迂餘曲折に富める文派とを以て、より遙かに鋭利な自己の主張の切先を、遠慮なく讀者の頭に突き貫す方が、策の得たるものではなからうか。結局、吾人が講演の席に就いた時の氣分と、周圍と、

閑寂な書齋に讀書の人となつた時の氣分との異同を心得て貰ひたいといふのである。元よりこの事たる、書肆の求めいなみ難くと前置きする人達や、或は原稿の散逸を惜しむが爲めに、といふ如き人々に要求するつもりではない。と斯ふ言ふ考へを自分は常に胸中に抱いてゐる。だから先生のこの著を懐にした時も、勢ひ上述の如き一種の獨斷的見解とも名づくる色眼鏡を忘れて居る譯には行かなかつた。然らば先生が過去幾年かの、學究と、思索と、經驗とを基礎に、多大の自信と抱負とを以て、世の教育家並びに一般家庭に推奨せられたこの著書は、果して自分の眼には、何う映じたであらう。

此著に表はれた先生は、誠に好箇のストリー、テラーである。菊版四百頁足らずの大冊も、一夜の讀みものとしては何の倦怠も感ぜなかつた位に、興味を以て讀了した。それもその筈、東西古今の名著を縦横に引證して、然も先生の圓滿なる人格に濾過せられた文學趣味が、全紙到る處に横溢してゐるのだから。而してその趣味たるや、かの内に養ふ所深からずして、外に發する所、分外に強烈ならんと欲する輕薄者流の所謂新趣味ではない。極めて上品に、極めて高雅なる趣味とも名づくべきものであらう。

自分はこの著を讀みながら、嘗て先生のお勧めにより、通讀したことがある、芳賀博士の「月雪花」を思ひ合はさるを得なかつた。彼れは日本の史實を基礎として、極めて輕妙な筆つきに、逸話を記し、傳記を綴つてゐる。これは古今の文學上の名著を土臺に、甚だ上品な口調を以て、世態を説き、人情を叙してゐる。何れも人の智識に訴へるといふ、共通の点を具有してゐるでは

ないか。自分は先生の所謂「面白くて爲めになる話」といふ理想を表現し得たるものといふことに、裏書きするを憚らぬ。

彼れは、一言教訓的口吻を漏さなかつたに反して、これは飽くまでも、修養の一點に結び附けざれば止まなかつた。そこがこの二人の著書の差等の存する所であり、亦甚だ自分の感興を湧かした所である。殊にその附録の「大栗小栗」は、三年間親しく先生に接して居つた自分には、一字一句先生の風采を眼前に躍如たらしむるものがあつたのである。

彼れは又、初めより著述といふことを頭に收めて筆を採つたものである。これは又通俗なる聽者を相手の話の原稿そのまゝで、随つて冗漫なるを免かれ難かつた。この一事を切に先生の爲に惜しむのである。例へば二四三頁の「次に修養上に關……」以下數行の如き、二五一頁の「講話が多岐多葉に……」以下、其他これに類似の二三ヶ所の如きは、寧ろあらずもがなの感をさせないでもない。

然しこれ等の事たる、誠に些末の事柄に過ぎぬ、先生の取られた矢は「趣味」と「修養」の二筋である。狙はれた的は「世の教育家」と「一般家庭」とである。而してこの二つのものか果して前述の如くとせば、先生のこの著は確かに成功の境地に、その第一步を踏み入れたものと言はなければならぬ。嘗て英のスペンサーは「出でて輿論を代表するよりも、退いて輿論を改造するに若かず」とし、遂ひに議員の候補者たることを辭したと聞いて居る。自分はこの意味に於て、益、先生の御健勝を禱り、而して或は演壇に、或は筆端に、遺憾なく、その積年の蘊蓄を披瀝せられ、以て

國家の健全なる分子の改造に努力せられんことを希ふて、此の稿を終りたいのである。思ふに、斧をもて切るべきの木と、袖もて拂ふべきの露とは、其間自ら差別があらう。自分が何の顧慮もなく書きつけた此の稿は、或は露を拂ふに斧を用ひし憾みなしとは言ひ難い。だから他日先生に御面接の機もあらば、目のあたり、お詫びもし、御叱責も受け、而して更に御指導を仰ぐ覺悟である。

書き終へて座右の書架に目を注ぐと、大谷先生の「案山子日記」、山本先生の「女優日記」、そして八波先生の「趣味と修養」、題からして已に各先生の符牒のやうに、相應しく思はれる。若しもこの並べられたる書冊を鍵盤として、一つ一つ、指の先きに押へて見るならば、春の靄搖曳たる暮方の空氣に、流れ出づる樂の音は、決してドレミハソラシドのそれではなくて、必ずや、三先生の各の異なる思想の響であらねばならぬ。(三月十五日)

舢倉島見聞録——伊原敬之助

百六

舢倉島の行政地籍は、現に石川縣鳳至郡輪島町第三區に屬する海士町にあり、暑夏の候數ヶ月に互り海人の漁獵に従事するもの假住する外他季は全く無人島なりとす、従つて縣下の多數は島の位置は愚か島名さへ未知なる狀況にして、昔話に聞く鬼界ヶ島の觀あり、加ふるに平均高度海拔丈餘の一小島而も沿岸奇岩怪石峭立し四季に通じ、風波強きも常なるのみならず、定期船さてもなきを以て普通人にして渡島の希望を果す事容易にあらず、聞く岡村博士去八月渡島の希望を以て輪島に滞在數日に互り、而も終に其意を果されざりしと、是れ同島へ渡海希望者の出逢ふ可き普通の事たるべく、僅かに漁船を以て波荒く岩礁多き絶海の孤島に向ふ事故果敢なき天恵を待たざる可からざるの止むなきによる、余幸に機を得て去九月上旬(余は六日汽船千賀丸一七百五十噸)に乗じ午後十時七尾港出航翌七日午前七時頃投錨、八時過上陸、同日午後三時投錨同夜十二時頃七尾港歸着、同島を踏むを得たるを以て其見聞し得たる事實に基き左に同島を紹介せん、固より島上滞在時數僅々四、五時間に過ぎざるを以て深遠なる學術的根底に倚り同島を論ぜんとするにあらず、唯他日渡島希望者の榮さもならば本稿の目的已に足れりとす。

因に同島を紹介するには此所に漁撈業とする海人を閑却すべからず、左記、評述する所は又其海士史に貢ふ所非常に大なるものありて、寧ろ或部の如きは殆んど其抄録とも稱すべく、所思を述べる僅々數節に止まるものあり、是れ題して見聞録とせる所以なり。

(一)島の位置、大さ及地質

舢倉島は約東經百三十六度五十五分、北緯三十七度五十分能登國輪島町の北方海上十八里にあり

て、加賀の美川へは六十六里、金石港へは六十里、能登の珠洲崎へは二十五里、越中伏木へは五十里、越後の直江津へは六十里、佐渡へは二十五里の日本海中にある絶海の一孤島にして、輪島町を北に距る七里の中間に七ツ島(大島、鷹股島、龍ヶ島、赤島、荒神島、甌島、御厨屋島)ありて、島と輪島町との通航に際し、風波に遭ふ時の避難所たり、勿論無人島なれども海人の一部は漁獲期に至れば、此所にも渡航して漁撈に従ふと云ふ。

全島殆んど所謂舢倉島安山岩とも稱すべき異様の感ある新火山岩より成り僅かに島の兩端則ち、惠比須堂、床岩(以上東北端の小角)大付、小付の岩塊(西南端)に輝岩を見るのみ、安山岩は露頭に於ては窩狀多孔質にして黒色を呈し、外觀全く玄武岩的なれども鏡下に之を検するに石基は微晶質にして輝石の班晶は強き複色性を有し紫蘇輝石なること一見して明かなり、即ち本岩は輝石安山岩と命名するを至當とす、輝岩は平均走向約南北にして、島の東北端にあるは平均二十五度の傾斜を以て東に傾き、西南端に於ては平均二十八度西に傾斜す、思ふに安山岩は此輝岩層の一の大裂隙に添ひ上昇し來りし一の裂隙噴出の遺物ならん、輪島との中間に散在する七ツ島も亦安山岩にして舢倉島と能登半島との間に其連路あるを暗示せるものに外ならずと信するも不幸未だ其關係を明にする資料を有せざるを恨む、島は沿岸多くは窩狀安山岩峭立し比較的低下なる地も亦一面に岩碎片にて蓋はると雖も(特に圖板参照)内部は埴土を以て蔽はれ、數株の老松枝を地に這へるの外、雜草の繁茂するあるのみ、東北に靈池あり深さ幾何なるを知るものなし、土俗呼んで龍神池と稱す、其水冽夏尙絶ゆるとなしと云ふ、島は海拔丈餘の平均高度を有し概して東南方面

に低く西北に高し島形約東北、西南に長く、周圍又一里に過ぎざれども、海草魚介の類に富み海人の依りて以て漁場と恃む所なり。

(二) 生物

左に列挙せしものは渡鳥者の必ず認め得るものにして、總て理學士市村塘氏の鑑定になれるを乞ふて爰に掲ぐるものなり。

動物

海驢(同島寺院の寶物として蛇骨と稱し保存されしを見る今も尙ほ往々見ると云ふ) 鼠、猫(野生的) (以上哺乳類)

かもめ、う、うみがも、はながも、うみすいめ、いわつばめ、せきれい、つぐみ、しぎ、はやぶさ(以上鳥類)へび、とかげ(爬虫類)

とんぼ、はち、はへ、蚊、ぶやう、てふ、おろゝ、みんな、きりぎりす、うまをひむし、

ばつた(以上昆虫類)むかで、げじげじ(多足類)くも、蜘蛛類(みづづ) (蠕虫類)

植物

じゆづも、みる、あをさ(以上綠色藻類)、わかめ、もづく、つるも、ほんだわら、あかもく、

かぢめ(以上褐藻類)つのまた、えご、いぎす、てんぐさ、けふのひものり、うみぞうめん(以上紅藻類)、をにやぶそてつ(羊齒類)、黒松(松柏科)、くさよし、めだけ、すつき、はまんにん

く、あいやし、うしのけぐさ、かもがや、さんゐのころ(以上禾本科)、ししうご(繖形科)、い

たごり、ぎしぎし(蓼科)、はまあかぎ(藜科)くすはまえんごう(荳科)まささ(衛矛科)おほば

こ(車前科)、やぶまを(蕁麻科)、ののこづち(莧科)、くさすぎかづら(百合科)かわらなでしこ、

(石竹科)すなびきさう(紫草科)、せんになんさう(毛茛科)、やぶかうじゆ(紫金牛科)、まんねん

ごけ(景天科)、はまがう(馬鞭毛科)、よもぎ、はるののげし、つわぶき、あきのきりんさう(以上

上菊科)

(三) 沿革

此島素と海士町の所屬たりしが、後故ありて一時能登國鳳至郡南志見村字名舟の地籍に變じ、海士町は唯其使用權を有するに止まりしを以て、兩者間に常に爭論を惹起するとありしに、明治三十四年四月再び海士町の所領に歸し、輪島町の地籍に編入せられたれば今は全く其煩を絶つに至れりとぞ、翻つて舳倉島に於ける海士の沿革に就きて見るに、舊記の採るべきものなく、詳細を知るに由なきも、今海士史に基き土俗の傳ふる所とあるを抄録せんに、永祿年間筑前國宗像郡鐘ノ崎の海人又兵衛なる者、漁船三艘に男女十二人を率ひ能登國羽昨郡に漂着し、赤崎千ノ浦邊の北端(今尙海人屋敷と稱し其遺蹟を存す)に移住し、天正年中藩祖前田利家巡視に際し慰斗鮑を献じて、謁を賜ひ、舳倉島及七ツ島にて鮑を捕ることを許され、また毎年米鹽を給し乾鮑及慰斗鮑を、納めしめ時價を以て買ひ上げ諸運上及米鹽代に換算し不足あれば納金を命じ剩餘あれば還附する等特別の保護法を興へたり、寛永年間に至り男女百五十人となりしと雖も猶一棟の假屋に雜居せしかば慰斗監督役人の巡視するに際し大に見る處ありて轉地を請願したりしに國主前田利

常輪島鳳至町の地内壹千歩を割きて之を賜ひ居住を定めしむ今の海士町是なり。

按ずるに往古より沖の島(今の舩倉島)に鮑を捕りし海人のありしことは万葉集十八越中守大伴宿禰家持の爲賜京家頭眞珠歌一首並に短歌に

珠洲乃安麻能於伎都美可未爾伊和多利豆可都伎等流登伴布安波妣多麻云々

於伎都之麻伴由伎和多利豆具知布安波妣多麻母我都々美豆夜良車

又今昔物語卷三十一第二十一に

今は昔能登の奥に寢屋と云ふ島あり其島には河原の石の有る様に鮑の多く有ければ、其國に光の島と云ふ浦あり其浦に住む海人共は、其鬼の寢屋に渡てぞ鮑を取て國の司に辨ける(中略)藤原の通宗の朝臣と云ふ能登の守の任畢の年、其光の浦の海人共の鬼の寢屋に渡て返て國の司に鮑辨けるを強て責ければ海人共佗て越後國に返て渡にければ其光の浦に一人の人無くて云々。是れにより之を按ずるに寢屋なる島に就いては記録の徵すべきものなきを以て知るに由なしと雖、思ふに沖の島則舩倉島の事ならん、又萬葉集及今昔物語に見ゆる海士と現在の海士との系統につきては、一は越後國に歸ると言ひ一は筑前より漂流し來れりと言ふに見て、或は同一ならざる如くなれども、舩倉島に捕鮑を業とせしこと相等しきを以て、茲に參考として之を載す。

(四)海人の風俗習慣

海人は質朴なる木綿の筒袖を着し、女子は帶の端を前に挟む、日和には主として手製の草履を用ゆるも雨天には多く跣にて又傘を用ひざるものあり、夏季は大體裸體なり、殊に奇異なるは女子

の風貌にして其業につかんとするや先づ髪を觀音鬘(是は潜水する時に限り結ぶものにして、觀音の姿に扮するの時は惡覽を近づきその迷信あるによる)に

改め、鐵の如き肌を現はし「サイジ」(禰子の禿)を用ひ貝金(鐵にて製し長さ一尺四寸、くの字形をなす鮑を捕るものにして代々の藩主又之を給與せられたり云ふ、大の字の刻印ありしを以て銘鈕)を腰に、其狀恰も鬼神を欺くものに似たり、近頃は護謨縁の潜水眼鏡を用ゆ、其水上に浮び出るや、長き息をつき、其際自ら一種の音を發す其音又頗る悲調を帯び、之を耳にする者をして寒息悲痛の情を催さしむ、全て粗食に甘んじ魚類の肉食をなさず、暴飲暴食は彼等の常風にして、又好みて間食をなし、駄菓

子と果實とは最も其嗜好に適し、食事には今尙著を用ひざるもの多しと聞く。家は舩倉島と海士町との兩所に構へ、其海士町に在るを本住とし舩倉島に在るを假住とす、昔は皆堀立小屋のみなりしと云ふも今は多く板葺の平屋となし一家數戸の同居をなすもの多し、假屋には疊なく各皆家板張にして敷くに藁蔭を以てす、假住居即ち島の區劃と戸口とを見るに、島は

西村、出村、小岩、本村、北村の五區となり、其軒數は最近の調に依れば西村三十六、出村二十二、小岩十六、本村二十八、北村三十一、合計百三十三軒となる、然るに其戸數は百六十八戸と稱せられるを以て都合三十五戸は前記百三十三軒の家に同居せる理なり、人口は一千五十九人にして内男四百六十四人、女五百九十五人なりと云ふ、毎年八十八夜に至れば島渡りと稱し、全民舉つて舩倉島に移住し二百十日を過ぐれば本住に歸る、此間は即ち假住生活(此間本住地は輪島警察より保管すと云ふ)の時季なれば例令本住地に來ることありとも其家に入ることなく必ず舟上に起臥する慣例なりと云ふ、されば其家に在るは甚だ稀にして、一年の多くは水上生活をなす

の理なり其家財を纏め家族を擧げて島嶼に漁り、浦々に鬻ぐ等漂々として居の定まらざるは、恰も牧民の水草を逐ふに等し、故に貧困なるものは年中舟を以て家とし水上に一生を畢るものありと云ふ。

風儀至つて粗野朴訥にして禮法に嫻はず、言語動作に於て主從尊卑の別殆んど認め難く、風雨の日には男女一所に集合して笑語雜談に時を移すか又は賭事をなすを以て唯一の娛樂となすの有様にして、風儀至つて下れるものあり、女子は甚だ勤勉にして、四季共に隨所採藻捕介に従事すれども、男子は唯女子を助けて、舟を操縦するか又は僅かに魚類を漁ることあるのみ、されば自ら女尊男卑の風あり、其美とすべきは比較的團結心に富み又能く慣例を守るにありて今尙酋長制度の俛を存し、區長の命令能く行はれ爭論其他一切の公事は其獨裁する所なりと云ふ。

冠婚葬祭共に概して簡單に行はれ、女子の嫁くには其貧富を問はずカチカラ桶 海上に浮べ長さ繩を以て腰に繋ぎ鮪螺螺を容る、鹽様と貝金とを持參するのみ。

教育程度は一般に甚だ低く現今尋常小學校の設けありて、夏季は舳倉島に冬季は海士町に授業を開きつゝあれども、兒童の多くは其父兄と共に諸方に轉々して居所を定めざるが爲に、出席歩合甚だ少く完全なる訓育を施すに由なく、今日迄に高等小學校を卒業せしもの僅かに二人あるに過ぎずと云ふ、又比較的低能者の多きを痛嘆せる人ありしが是れ海人は他と生活状態を異にする爲、他の町村人と結婚をなす能はざる事情にからまれて、盛んに血族結婚をなすに因るものならん、之に反し男女共に身體非常に強健にして筋肉逞しく病者至つて少き爲め、衛生思想極めて幼稚な

り、彼等は神佛を敬信すること甚だ篤く、殊に迷信非常に深きが如く、祈禱と筮とは最も盛んに行はれ、災禍は擧げて之を神佛の冥罰に歸せしむるの風あり、宜なるかな周圍一里に過ぎぬ孤一小島にして尙祠數予の見たるものみにも十數箇を算す、神體多くは奇形の天然石にして就中龍宮様は海人の最も畏敬するものゝ如し、偶々病苦を感じる時は賣藥又鍼灸、祈禱等に依頼して醫療を享くる者尠し、清潔亦缺くる所なきにあらざれども、其住宅にあるは極めて短時日にして多くは水上生活なるを以て、傳染病に犯さるゝもの稀なりと云ふ、女子には眼病者、聾者多く、中年を過ぐるものにして聽覺の完全なるもの蓋し稀なりと聞く、近來は海中に潜るに當り綿を以て耳腔を塞ぎ或は油を塗りて潮水の浸入を防ぐものあり。

生計上單純を極め其度低く、需むるところ唯飲食あるのみ、凡そ海士町の収益は毎年平均三萬圓を降らざるの事により、之を戸數(假りに百四十と見て)に割當れば毎戸貳百拾四圓餘となる、故に彼等の生活程度にては日常の用を節せば其生計を支へて優に餘潤を生ずべきに、海人等は一般に貯蓄心に乏しく隨つて得れば従つて散するの風あるを以て、細民の數甚だ多く、茲に於て親方、子方の珍らしき階級を生ずるに至りしなり、親方とは相應の資産を有し、細民の一部に金錢を貸與するに足る資力を有するも、謂にして、其數僅々五六戸に過ぎず、其他は皆子方と稱するものにして、各親方に隸屬し金錢糧食の貸附を仰ぎ以て生計の不足を補ふ細民なり、子方は其獲たる海藻及魚介を擧げて其親方に委すれば、親方は相場を立て、之を引取り、其貸金等と差引くを以て例とす、斯くして其親方と子方との間に於ける貸借關係は常に循環して殆んど絶ゆる時なし、

又冬季に入れば灘廻りと稱し内浦(七尾灣に面せる所)等の沿岸を回航して其貯藏せる鹽魚、海草を以て米穀等に易へ其生計に資するもの多しと云ふ。

産業としては唯五、六の親方なるもの所謂商業を營むものあるのみにして、海人は悉く漁撈採藻を業とするに過ぎず、其産する所の主要なるものを擧ぐれば左の如し。

磯草、若和布、石花菜、海苔、鮑、蝶螺、もだつ、鱧、飛魚、鳥賊、鯖、就中磯草、鮑を以て尤肝要なるものとす、特に磯草は最大最重の産物にして其豊凶は海人の生計に至大の關係を有し年々大阪及信州地方に輸出して寒天業者の需に供すどぞ、熨斗鮑は古來盛に製造せし者なれども廢藩後獎勵の法を斷ちたれば今は殆んど其跡を絶たんとするに至れるを見る。

(終)

四高俳句會句鈔

工場爐あるも石像に寒し霰にも	繞石	鶏やめて兎飼へり垣の路の臺	繞石
錘刀打つて延ばす綱鯨遠卷に	同	路の臺も書添ふ古墳見取圖や	同
死鯨濱遠しつゞく沖曇り	同	蜂去來温室の蘭見てあれば	同
引きし福に因む句皆に乞もして	同	福引の數三百や雲雀讀み	同
俄か作る空籤福引の人殖ゑて	同	釜蓋を臍に巻頭の福引かむ	同
福引も帳綴り店の無禮講	同	橋番の唄浮寐鳥木場さびて	同
塾生を諷す福引の文句あり	同	路の臺の燒香に酒旗の窓を打つ	同
福引のかの籤師にと祈りしに	同	句法事に露の臺君偲はする	同
擱座船見も珍ら風浮寐鳥	同	鱒網に鯛網を逸す露ふる今朝を	愛松
今年早き水鳥城の三の池	同	朝靄を沖へ艤す鯨吼えもして	同
船から流す米とぎ汁や浮寐鳥	同	目勘定に手加減に秤る鯨かな	同
浮き屑に知る上げ潮や浮寐鳥	同	電柱人を話せる霰燃ゆる灯に	白聲
寒泳ぎ見の橋上の人浮寐鳥	同	酒桶の輸入れの庭場霰する	同
抄らぬ墓地移轉路の臺だけし	同		

南軍想定 黒帽軍

地點ニ迄延長セル線トス

(一)我ヨリ稍劣勢ナル敵ハ粟ヶ崎西方高地陣地ヲ占領ス。此ノ敵ハ三角點ヨリ海濱ニ走ル菱線ノ稍前方ニ散兵壕、機關銃座等ヲ構築シ又其ノ砲兵陣地ハ最高地點ノ後方附近ニアルモノ、如シ

(三)第二大隊及ヒ機關銃隊は總豫備隊トナリ第一線ノ右翼後ニシテ大野——粟ヶ崎道上附近ニ位置ス

(三)各部隊ハ午前十一時三十分迄ニ展開ヲ了リ攻撃前進ノ命令ヲ待チツ、アリ

演習ニ關スル教示

(二)南軍支隊(歩兵聯隊本部、第一、第二大隊、學生大隊野砲兵一中隊)ハ此ノ敵ヲ攻撃スルニ決シ左ノ如ク戰鬪展開ヲナス

(一)野砲兵ハ大野川右岸部落ノ北端附近ニ

空包ハ全部使用スヘシ。

陣地ヲ占領ス

此處に地形を一言するのは親切なる記者のすべ

(二)第一大隊及ヒ學生大隊ヲ第一線トシ、第一大隊ハ標高17メートルノ高地ノ南方約三百米突ニ、學生大隊ハ同高地ノ西南側面附近ニ展開ス

兩大隊ノ戰鬪地域ノ境界線ハ17メートル高味方ノ砲兵陣地があり、標高左方五百メートル地ノ南側ヨリ粟ヶ崎西方高地30メートルノ

一線があるのだ。標高の右方五六百の高地には許りの處が渚になつてゐる、要するに戰場とも

云ふべきのは渚を距る右方六七百の平原の間に増加せしむ。時や北風甚だしく白雪淡く地に敷あるが故に然も況んや敵の前面は一体の砂地できて北海の怒濤は狂ふ、死力を盡して防戦せん眼を遮る一物とても無いのであるから此地點をとする敵の銃聲と之に當らんとする。南軍の鬨聲占領せんとする南軍の戰畧こそ仲々に見物であるとは時に寒天を搖かして快絶とも又壯絶なり。らう。大隊長の勇を以て貫く能はずんば中隊長 大隊長はと見れば後方百米突の丘地にありて兩の智を以てすべく然も中隊長の智を以てして未 眼鏡を手にしてしきりに戰機の熟するを伺ふ。だ貫く能はずんば全軍を賭しても貫くべしとは 十一時五十分兩軍の距離四百五十の近きに至る南軍が胸に閃く決意であつた。今迄晴れぬいた や大隊長は時機至れるものとして突撃を命ず兩空は戰機漸く至らんとする頃より北風を交へて 軍の將に白兵戦に入らんとする時南軍は稍衰へチラホラ雪さへも降らすに至つたではないか。 たるよと見る間に北軍の急激なる逆襲ありて此十一時三十分高らかな山崎大隊長の命の下に戰 處に戦は止む。

高橋統監の講評

鬨隊形に移る 小谷中隊の内杉山小隊を省く他の 二個中隊は右方丘陵に松本中隊は之と二百の距

援隊

離を保ちて左方海岸に近く展開す、此間僅かに 援隊が兩軍共に側面縦体で歩いてゐた様に見受一分敵を距る千メートルの位置に至りて停止す けるが道路でない限りはなるべく廣い位置をと十一時四十五分距離六百の近きに至るや小谷中 隊長は杉山小隊をして己が中隊の左方に伍間に 時損害が甚だしい許りでなく散開の場合には非

常なる時間を要するのである。
射撃の方向

之は銃口が敵の前体に向ふてなければならぬ
言葉は換へて云へば一部に重くて一部分には薄
い様では何にもならない。それには先づ自分の
位置の如何なる處にあるかを見て後に其の前方
を真直に定めると云ふ事が必要である。

照尺につきて

之はよくはわからないが馬上より見た處では遊
標を上げない人がある様だつた。

最後の突撃は非常に勇氣があつて實戦に近かつ
たのは喜ばしい、防戦の方も適當なる時機を
見て逆襲をしたのはよかつた、殊に元氣のあつ
たのは甚だ喜ばしい事だと思ふ。要するに學生
の腕前としては適當に出來たものだと思ふ。

校長の訓示

今度の演習は先年のに比較して見ると甚だよか

つた様に思はれる。で今後はこれ以上の成績を
得られん事を望む。(曙汀生)

第四高等學校講演部

第四擬國會記事

大正元年十一月十六日午後一時開議

議事日程第五號

第一 輸入米關稅撤廢ニ關スル建議案 (委員長
志摩榮吉君)

第二 運河開鑿ニ關スル建議案 (甘蔗義邦君外
二十七名提出)

第三 右議案ノ審査ヲ附托スベキ委員ノ選舉

第四 養老法案(委員長井村平次郎君)第一讀會

第五 試驗制度廢止ニ關スル建議案 (委員長深

クコト我國目下ノ急務ト認ムルニ依リ、政府ハ速ニ實地ヲ調査
シ、之ガ開鑿ニ從事セラレムコトヲ望ム。

○養老法 (井村平次郎君提出)

第一條、帝國臣民ニシテ滿七十歳ニ達シ年額金四十圓以下ノ收
入ニシテ且ツ保護者無キ者ニハ狀況ニ依リ一日ニ付養老金十
錢以下ヲ給ス。

第二條、左ノ諸項ニ該當スル者ニ對シテハ本法ヲ適用セズ。

第一項、十年來繼續シテ帝國ニ居住セザル者。

第二項、正當ノ理由ナクシテ職業ニ從事セザル男子。

第三項、一年以上刑ノ執行ヲ受ケタル後未ダ五年ヲ經過セザ
ル者。

附 則

本法ハ大正二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス。

○試驗制度廢止ニ關スル建議

(深井龍太郎君提出)

現時中等及ビ中等以上ノ學校ニ施行セラル、試驗制度ハ學生ノ
學力ヲ調査スル手段トシテ甚ダ完全ナラズ且ツ學生ニ過度ノ勉
強ヲ強ヒテ其健康ヲ害スルコト少カラズト認ムルニ依リ政府ハ
速ニ之ヲ廢シテ他ニ適當ノ方法ヲ講セラレムコトヲ望ム。

井龍太郎君)

第六 師範學校廢止ニ關スル建議案 (委員長中

平政雄君)

第七 現行刑法中改正ニ關スル建議案 (委員長

海老名敬信君)

第八 海軍擴張案(政府提出)第一讀會

○輸入米關稅撤廢ニ關スル建議

(志摩榮吉君外二十名提出)

人口増加ノ結果、内地産米ノミニテハ國民ノ需用ヲ滿スコト能
ハズ。其不足ヲ外國米ノ補給ニ仰ガザル可カラザルハ、我國現
時ノ狀態ナリ。故ニ外國米輸入ニ際シテ之ニ課稅スル時ハ、
般米價ノ暴騰ヲ來シ、延イテ國民ノ生活難ヲ惹起スルコト必然
ノ數ト認ムルニ依リ、政府ハ速ニ輸入米關稅ヲ撤廢シテ、國利
民福ノ増進ヲ計ラムコトヲ望ム。

○運河開鑿ニ關スル建議

(甘蔗義邦君外二十七名提出)

軍事上並ビニ商業上、琵琶湖及ビ其附近ノ河川ヲ利用シ、日本
海ト太平洋トヲ連絡スル運河ヲ開鑿シテ、東洋交通ノ要路ヲ開

右建議ス。

○師範學校廢止ニ關スル建議

(中平政雄君提出)

中學校及ビ高等女學校卒業生ニ適當ノ補充教育ヲ施シテ師範學校卒業生以上ノ良教師ヲ得ルコト敢テ難シトセズト認ムルニ依リ人物經濟及ビ地方費ノ節減ヲ計ル爲メ府縣立師範學校ノ全廢セラレムコトヲ望ム。

○現行刑法中改正ニ關スル建議

(海老名敬親君提出)

刑法上ノ目的主義及ビ社會防衛主義ノ進歩シタル見地ヨリシテ死刑存置ノ必要ヲ認メザルニ依リ政府ハ現行刑法ヲ改正シ、無期徒刑ヲ以テ死刑ニ代ヘラレムコトヲ望ム。

○海軍擴張 (政府提出)

方今宇内ノ形勢ニ鑑ミ、帝國ノ自衛上左ノ計劃ニ基キテ海軍擴張ヲ行フ。

- 一、戰艦 七隻 二十一萬噸 一億九千萬圓
- 一、巡洋戰艦 四隻 十萬噸 九千萬圓

一、潜水艇 二十隻 八千噸 一千萬圓

計 三十一隻 三十一萬八千噸 二億九千萬圓

內閣ノ組織

- 內閣總理大臣 石川法學士
- 兼司法大臣
- 內務大臣 駒井文學士
- 外務大臣 岡本文學士
- 大藏大臣 市川法學士
- 陸軍大臣 高橋少佐
- 海軍大臣 永井四郎
- 文部大臣 中山文學士
- 逓信大臣 八波文學士
- 農商務大臣 早上愛二

政府委員

- 內閣書記官長 脇本銓郎
- 川島清 諸井慶五郎 水野昌雄
- 北條敬太郎 高森卯太郎 吉國法學士
- 議會ノ組織
- 議長 溝淵校長 副議長 新山與次
- 書記官長 鳴澤寡愆 書記官 吉岡關太

書記官 井田虎男 書記官 佐藤友一
全院委員長 杉山文祐

保守黨議員 六十九名 (姓名不順)

- 院內總理 佐伯法學士
- 副總理 近藤時吉
- 淡路健治 谷山惠林 松田義郎
- 眞野九一郎 野路慶三 志摩榮吉
- 小池充彦 堀宗弘 廣瀨圓一郎
- 北村厚 梶長作 阪野千里
- 住吉四郎 海老名敬親 青原慶哉
- 白井季吉 丸瀨正恭 本吉與吉
- 福島藤次郎 田淵敬治 野上敏一
- 高橋良作 加藤一朗 竹田儀一
- 山岸龍 佐藤次郎 獅山知孝
- 大林正夫 戶田正心 酒井右馬二郎
- 中村政吉 越喜三郎 栗原三卯
- 寺島了超 飯島義寬 高田昇
- 奥泉長太郎 田村俊二 神田垂穗

急進黨議員 七十七名 (姓名不順)

- 院內總理 平泉法學士
- 副總理 石端良平
- 川上實男 瀧原豐 能村幸次郎
- 伊藤丹治 新井淑 山根茂樹
- 磯貝喜一郎 高田直之助 渡邊勝太郎
- 中山督 今井剛 犬谷督勵
- 井口長三 黑瀨善治 中平政雄
- 福尾彌太郎 山根禮 柚木芳

- | | | | | |
|-------|------------|--------|------|-------|
| 朝倉斯道 | 森長四郎 | 大坪武夫 | 院內總理 | 久田法學士 |
| 武部弘成 | 稻本龍助 | 鈴木福男 | 副總理 | 渡部生一 |
| 荻原正 | 加内三郎 | 甘蔗義邦 | 新山憲次 | 與憲次 |
| 杉山文祐 | 加藤拓次郎 | 守永茂 | | |
| 田村玲 | 山田港 | 西村忠次 | | |
| 高見幸次郎 | 大西進 | 中西信 | | |
| 安田辰之助 | 平岡泰太郎 | 林昌夫 | | |
| 布村繁 | 橋口寅七 | 清水義雄 | | |
| 加藤竹雄 | 篠原雄 | 松井捨八郎 | | |
| 松井義雄 | 清水賢松 | 橋茂信 | | |
| 高井俊吉 | 吉川敏行 | 湯野川國左右 | | |
| 米澤菊二 | 川上十郎 | 宮谷利吉 | | |
| 原誠一 | 岡和一 | 根岸勝一 | | |
| 大津武敏 | 來住正雄 | 塚田清男 | | |
| 小關勉 | 北川榮一 | 石崎信次 | | |
| 橋爪庸藏 | 小島石龍 | 辻虎雄 | | |
| 西岡登 | 太田正規 | 小此木繁 | | |
| 法邑才一郎 | 牧野利家 | 芦谷政治 | | |
| 石坂脩 | 吉仲虎次郎 | | | |
| 自由黨議員 | 六十二名(姓名不順) | | | |

- | | | |
|-------|-------|-----|
| 市橋勝二 | 藤井左中 | 横山茂 |
| 成田勝五郎 | 古宅喜與司 | 忍孝全 |
| 深井龍太郎 | | |

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 矢幅正三郎 | 深山 | 長柄大信 |
| 吉利不二根 | 石田重信 | 田島太郎 |
| 高松宗直 | 持田鐵之助 | 高見喜四郎 |
| 小原正義 | 板谷德太郎 | 角田敬三 |
| 井村平次郎 | 中澤正治 | 杉本舜 |
| 草野義雄 | 高島一郎 | 田中秀太郎 |
| 梅谷與七郎 | 近江小太郎 | 杉江重誠 |
| 河崎潔 | 高田武人 | 青木英一 |
| 長尾文次郎 | 氣賀得三 | 神野俊一 |
| 田中利雄 | 松下正信 | 川上由喜 |
| 河井鐵二 | 横井享 | 安達四郎 |
| 淺若晃 | 松井宗一 | 佐治昌 |
| 菅波又三 | 加藤五一 | 齋藤淳藏 |
| 永原俊二郎 | 小林康雄 | 大橋三郎 |
| 小林晋一 | 秋月周二 | 齋藤脩一 |
| 駒原桂三 | 山川保城 | 岩田四郎 |
| 林左藏 | 横湯温良 | 宇津友二 |

「此迄爲し來りたる擬國會は往々にして議場の靜肅を缺き、もすれば騷擾に流れんとするの傾向あり諸氏はよろしく至誠に以て他の説を聞き然る後に正々堂々と賛成なり反駁なりをしなければならぬ」

年々の擬國會にも何處にか新しく改良された点は見出したのであるが此度の擬國會程眞面目に凡てが進行したのは國會創立以來未だ嘗つてない事であつて殊に特筆したいのは校長自ら、議長席に座られた事と各黨領袖には各々専門家をいたゞいた事とであつて凡てに努力の色の表はれてる校長が此處にも亦其が證例を示されたのは喜ばしい事と云はねばならないのみならず

と述べ次いで開會の宣言なし議事日程第五號に入ると宣し更に今日初頭の決議案たる「輸入米關稅撤廢に關する建議案」の提出者たる志摩榮吉君の説明を求むと云ひ終るや沈着と温厚とを以て知られたる志摩君の雄姿は徐に壇上に表はれた。そして約一時間に互る長廣舌を奮つて云ふやう。

先生が如何に校事に眞面目であるか如何に熱心に努力奮闘せられて居るか、わかるであらう。私は先生の身に幸あれと願ふそしてどうか長へに我が校のために盡力して下さらん事を冀ふ一人である。

「抑々此の問題は委員會の調査の結果社會政策上の一問題でありまして然も國家の一大問題である事がわかりました。それでありますから特に此の問題は理性の上判斷を下すべきものであると思ひます。本論に入りまして第一には其の事實と第二には此れが我が國の急務である事を述べたいのであります。」

議長は森嚴なる音調もて開會前に當つての注意を述べられた。

第一の理由とする處は國民生計問題に存するのであつて苟くも世界に國民と云はるゝ國民は皆此の問題を口にします。甚

だしきは一九〇九即ち明治二年にニューヨークにて調査した所によりますと年に六百圓では生活は絶対に不可能であり今日では九百圓でなければ生活が出来ないと云ふ有様になりました。」

この例より更に我國下層社會の狀態を説き來り説き去りて更に言をつづけて云ふやう。

「我國に於きましては中流社會と云ふよりも寧ろ下層社會より一大轉倒を起さんとしつゝあるのであります、でありますから政府たるものはよろしく此の點に眼を向けられん事を願ふ次第であります、然らば彼等下層社會の大問題とも云ふべきは那邊に存するかと申しますと實に食料問題が即ち之れであります然して食料品の主なるものは實に米にあるのでありますから下層社會を救はんと欲するものは須らく米價引下をしなければならぬのであります、それには先づ安直なる價格を以て外國米を輸入すると云ふより他に道はないのでありますから従がつて關稅撤廢と云ふ事が目下の一大急務となつて表はれた次第であります。此處に諸君の御了解を更に明にせんかために我國に於ける人口と米産格との比を申し上げたいと思ひます(此の時簡單々と呼ぶものあり)で我國の人

々條を出して以て政府をして心配ならしむるものであります」

と述べて下壇するや急進黨席より議長と叫んで立てる壯漢あり是れぞ急進黨に其の人ありと知られたる天海河内三郎君也、彼が氣骨と雄辯とは以て宇内に鳴る也、悠悠々懸河の辯を奮つて大体左の如き反駁説を唱ふ。

「本議案に對しては一昨年より社會政策の問題として研究するものなり。自分は五年以來之を研究して志摩君の様に多なる論點はなくとも私は彼の人より以上に確實なる者也」と云ふや保守黨より然りと彌次るものあり、彼は更に言を高めて云ふ。

「提出者の第一の理由とする内地米の不足は農事改良により左迄悲觀すべきものなし、收穫に際し可得米を廢する現今の收穫法養分の徒に盡に止めて穗に送らざる蒔入乾稻法の改良更に耕地整理迄に到らざるとも今少し耕地に付農民が注意を要せば餘程の收穫あるものと信ず本議員の理想法によれば優に三割の増收を見る。昨年の農家の蓄藏米は實に昨年收穫米の二割を占む本年は十二割の收穫なれば本年は内地の不足は

口は實に五千一百萬ありまして四十年に比したならば五十萬と云ふ増加を見せるにもかゝらず米産格と申しますと統計にて見らるゝ通り五千萬石より三千萬石の間を往來して更に増加する事はないのであります、耕地整理は何らの望みもなく今年と雖も僅かに五千四百萬石あるのみであります。我國に存する者四千七百萬石と朝鮮より輸入する者と合せて目下五千五十萬石。然るに一年一人に付一石三斗の割合でありますから五千萬の人民は實に一ヶ年二百五十萬石の不足を生ずるのであります。然るに一方富力増進の結果農民は米を市に出ださざるがため今時にて二十圓代を示して次第であります。外國米が如何に必要であるかは年々二百萬石より三百萬石つゝ輸入する處を以ても明かでありまして従つて社會問題の第一歩として實に關稅撤廢と云ふ事が必要となつた次第であります。或るものは内地米の下落を憂ふるかも知れませんが私と雖も此の點には反駁の餘地を有するものでありますて農民が米價の高まるのを見込んで之を市に出さず反へつて公債などを買ひ入れる所を以て見るも彼等が如何に關稅撤廢を意に解せざるか、明らかであつて只心配するものは之によりて起る財政界の一大影響でありまするが其れはほんの一時のものであつて且つ念のために別紙に認むる通りの新案三

一顧の値ある論に非ず。

第二の理由とせる下層民の困窮。實際を見るに下層民は中流民を壓する如き生活狀態を見る。勞働賃金の騰貴は米價騰貴以上なり。下層民にありても一人前働き得ざるもの即老病人又は婦女子の一家を計營する家庭にありては恒産を有せざる彼等にあつて前者に比し困窮甚しきは當然なり。彼等は生活無能力者として考ふべきもの之を以て下層社會一般を斷定し難し

次に一般物價に比し米價は必然安き性質を有す。目下は遺憾なく此の性質を發揮せり詳細は茲に述ぶる要なし。

又米は收穫期は短期にして需要期は年中なり。生糸等と共に投機的性質を有す、故に他物價と均しく單純に其の價格を測り知るべからず。本年九月中旬と現今との相場を對照すべし。終に外國米を徒に多く輸入せんこと關稅を免する等の事あるとせんか商人は徒に買ひ占め賣崩して米市場は此處に亂脈を呈す。眞に外國米を以て内地米價の低減を助けんとせば須らく内地米と同等に取扱はざるべからず即定期に掛けざるべからざるなり其時こそトーマスグレシャム貨幣法則行はれん。即内地米騰貴を助長するものなり。故に本員は本案に對し一顧の値なきものと認む。

と述べて下壇す。

此の時議長は書記官長を招きて密議する處あり
鳴澤幹長は議場を去る。

保守黨は更に新進議員佐藤一郎氏をして再駁せしむ。佐藤氏は論壇の愛兒なり彼は期する處あるものゝ如く徐に口を開いて云く。

「諸君よ、只今急進黨の人よりの反駁説を伺ひましたが其の言葉の中に皮相と云ふ言葉があるやうに承りましたが私は更に其の人の説を皮相だと云はなければなりません或る田舎の小學校で小兒の顔色が非常に悪いものが多くなりましたので教師は之を尋ねました處其の生徒の半數以上は米飯の不足から來たこと云ふ事が知れました。」

と論じ更に下谷小學校に於ける生徒の如何に悲惨なるかを詳細に論じ次いで我國經濟界に於ける現場に論及して云はく。

「我國經濟界を見らば我金澤の生糸に大影響のありましたのは實に米より來ましたものでありまして此の如く米を中心として有らゆるものは其の波動を受くるのであります。前論者の言によりまする米價は決して高くないと云はれた横だが

果しく高くないであらうか。私は物價の騰貴は決して米の騰貴と比例するものでないこと云はれた河内君に反對するものであります私は米價騰貴につきては種々の原因あるべけれど之を二つに分ちて特別なる原因と一般的原因とに分ちたいのであります、特別なる原因とは即ち四十三年の大飢饉である一般的原因と云ふのは四十三年の飢饉のため四十四年には米をすつかり出せなかつた事と其の年の麥の不作と云ふ事のためである」

と論じ其れより志摩君と同様種々の統計を上げ來りて人口の増加と米産額とは年々其の度を甚だしくすと述べ來りて氣焔萬丈當るべからざるものありしが未だ反對黨に新山與次君あるを知らず。政界の明星たる彼新山與次君は時至れりとや見けん、にはかに表はれて壇上の人となりテールをたゞきて云ふやう。

「大体にては志摩君並に佐藤君の云ふ處に賛成する者なり。然しながら事實上農民は我國人口の三分の二あるが故に労働者は甚だ少數なるを免る能はざるは事實なり。然るに農民は甚だ富めり保守黨の諸君は云へり。果して然るかならば其

の少數なる労働者其のものが國家の一問題であるとは甚だ眼穴少ではないか。要するに自分は社會政策より見る時は輸入米關稅の撤廢は賛成するものなれど國家財政の方面より見る時は一考を要するものなり。まして況や農業農民のためには斷じて撤廢すべからざるなり。故に吾人は國家てふスタンドポイントに立ちて本案に賛する事能はず」

と述べて下壇するや保守黨席より數多議長議長と連呼するものありしが井口進行博士は議長に請求する處あり、依つて直ちに投票に入り議長は「賛成者は起立を願ひます」と云ふや保守黨の全部は起立したれど少數にて否決となりて直ちに。

「第二運河開鑿に關する建議案」にうつり提出者甘蔗義邦君は左の如き報告あり。

「鐵道は進み進みて今日に至りたれど運河はと見ますと更に發達を見ないのであります陸上も必要であります然しながら我國の如き海國にありては殊に此の運河の必要を感じるものであります。之を外國に見るも明らかなる事實であつて如何に車があり如何に立派な汽車があつても河舟即ち運河がなか

つたなら自由なる交通は不可能であります歴史にても明かである隋の時代より大運河は作られ又我國にても仁德天皇を初め奉りて清盛の如き皆運河を利用して國民の幸福を計り又東京大阪の如き大都會は何れも多少にかゝはらず此の運河によりて今日の如く發達したものであります。殊に我國の如き山國にありましては汽車の便より運河の便の方が餘程利益もあり又便もよいのであります、速力の點に至りますと汽船は汽車より遅いかも知れませんが其の運搬量の大なる點に於て其の賃金の安き點に於ては到底汽車などの及ぶ能はざる處であります。でありますから本員は其の第一着手として琵琶湖及び其の附邊の河川を利用し、日本海と太平洋とを連絡する運河を開鑿して東洋交通の要路を開く事は我國目下の急務と認むるのであります之れは商業上のみではないので亦以て軍事上にも必要なのでありますから政府は速かに實地を調査し之れが開鑿に従事せられむ事を望むものであります」

と述べ終るや井口進行博士は右議案の審査を附托すべき委員の選舉を請求するや議長は其の賛否を一同にたゞして「異議がありませんか」と云ふ異議なきにより直ちに。

第四議案養老法案に入る。

議長は右提出者井村平次郎君の説明を願ひますと云ふや同情と涙とに満てる氏は得意の辯論術もて説き去り説り來りて云ふやう。

提出の理由

一、國家窮極の目的は國民大多數の生命の安全を計るに在り時に之に反したるが如き事實現せらるゝ事あるもそは單に外觀のみに止まり真相は全くこゝにあり
一、國民が多額の租税を上納し兵役の義務を有して國防に従ふも其の窮極の目的は同胞大多數の生命の安全を計るにあり
一、かくの如く國家國民共同一致して國民大多數の生命の安全を計らんご欲するにかゝはらず國民の中には國家なる其の生命の保護を受ざる者多し即ち高齢にして自存する事能はず而も他に保護者を有せざる者なりとす彼等は餓死、自殺いつれか其の一方を選ばざる可からず、然り統計の示す所に依れば七十以上の年齢に達して自存する事能はずして自殺を企つる者年々凡そ千人以上あり之に餓死、凍死、病死者を加ふれば實に數千人の多きを越ゆ而も國家は此等に對して何等の任務を盡さずして之を看過しつゝあるは實に國家の一大缺點なり

を認む。
養老の條件
年齢七十以上に達して年額四十圓以上の収入なき物にして且保護者なきものは状況により養老金一日十錢以下を給す但し
一、十年來繼續して帝國に居住せざるもの
二、正當の理由なくして職業に従事せざる男子
三、一年以上刑の執行を受けたる後未だ十年を経過せざるもの
上三條に該當せる者には本案を適用せず
四、本案は朝鮮及臺灣に之を適用せず
本案に要する費用
本案に該當せる老人を吾帝國に求むれば凡そ一萬餘人あり之に本案の養老法を適用せば全部にて三十七萬餘圓の小額にて事足る可し
抑々養老の事たるや明治七年十二月太政官達第六六十二號を以て既に公布せられし所現時實施せられずと雖も國家は消極的方策即ち國民に向つて刑法第二百七條を適用しつゝありかくの如く一方に於ては國家は國民に對し養老を命じ而も他方に於ては國家はかくの如き老者を其の壯年の間之を役役に盡し扱て老朽用にならざるに至るや抛棄て顧みずと云ふは正

に國家が其の權利のみを要求して義務を盡さざる即ち國家自身が刑法第六百十七條の罪に服せざる可からざるなり本案採用は今や國家の急務なり

と論じ終りて豪烈たるものありしが前年外務大臣として名聲高かりし現内務大臣駒井徳太郎氏は温顔に笑をたゝへて登壇徐ろに口を開きて曰

「只今井村君から此の本案に對する意見を伺ひましたが之れにつきて當局の考へを述べて見やうと思ふ眞に七十才以上の人は實に憐れなものでありまして之は君の言を待つて初めて知りたるものにはあらずして政府も種々なる方向によりて之れが救済の方法をほごこしてゐるのであります。國家が國費で救助したと云ふのは日本が國費の充實した時でありまゝやうから甚だ喜ばしい次第であります政府は四十二年度に一千名許り救助しただけであります、それと申しますのは各都市に慈善事業がありまして政府はわざ／＼之れを救ふ必要がないからであります、又之を止めて政府がなすこと云ふ事は國民の慈善心を破るものにして國民道徳上甚だ面白くないのであります。養老は日本國家には相當の關係あるものにして日本に

在ては家族制度である事は諸君の知らるゝ通りであります。此法案は國體より來りたる民法慣習には如何なる者であらうか。國民をして依頼心を起さしむる事無きか。日本の國體を見ずして徒らに英國とか米國とかにならうと云ふ事は、甚だ考ふべき事ではあるまいか此の考へは嘗てロンドンタ イムスが日本を戒めたると同じ考へである。でござるか諸君も本大臣に賛成せられて否決せられんことを望む次第である」と述べて下壇せんとするや議場は稍騷擾たり。

此の後に表はれたるは論壇一方の領袖黒瀨善次君なり。君は小軀をやをらもたぐと見る間に壇場に表はれ沈着なる態度を以ては左の如き意味の氣焔をはけり。

一、人文の發達は民力増進の歴史にして漸く四民平等ならんとするるとき古の貴族平民に代るべき資本主義労働者の生じたること。
二、此等労働者は經濟界の動搖、技術の發達改良、都會生活等のため心身非常の状態にあり一朝不意の困難に遭遇するときは直ちに糊口に迷ひ延いて不良なる虛無主義社會主義者なること。

三、貧民にも安逸怠惰によりてなりたるものと労働せんとして
も得ざるもの即ち孤兒老癯労働者の如きありて後者は嚴密な
る意義に於て貧民と稱するを得ざること

四、紳士と獵犬の話

五、國家が老癯癯者を保護するは彼等が過去に對する報酬に
して老癯者は當然之を受け得る權利ありと言ひ得ること

六、之を外國に徴するに塊太利白耳義の老癯者保護の設備は最
も完全にして佛、獨、露、和いづれも之れあらざるはなく英國
は最近に之を解決し米國も今期大統領に至りて之を行はんと
す

七、醜つて我國に徴し見るも遠くは推古帝のとき悲田院施藥院
の設けあり降つて徳川時代に至りて五保の制を設けて相寄り
相助けて貧民を生ぜしめず然るに明治聖代に於ては政府に於
て之に關する具体的計畫を見ず私設の慈善院は是等貧民を以
て満され而して老癯自殺者の多きは何等の現象を語るか

八、提案に滿七十才以上に一日十錢を給すとあるは少きに失す
財源は陸海軍等の不生産的のものを整理して五十萬乃至百萬
の金をつくり以て今後に起るべき社會政策を決せよ

九、要するに我國に於て特殊の家族制度あり、富の差甚し
からず主従の關係は外國のそれと違ふといふを以て安心せば今

民の如何を考へて作つたものでは決してない。良ろしく是等
の事は國民の体格其の他の點より國民に適する様に作らねば
ならぬのである。我國民は歐洲人に比しては体力が弱いので
あるから良ろしく六十才以上とすべきである。我法律によつ
ても六十才以上を以て隱居を許可すとあるのである。のみな
らず第二の年に四十圓以下の収入の人とあるが之では一日僅
か十錢ではないか十錢で一日を暮し得るものなりや否やは
賢明なる諸君の豈に知らざる事あらんや須らく百圓以下とす
べきものである。又帝國國民とあるが、之は當を得たりとは云へ
ないのである何となれば養老案は老人を助けると共に一方國
家の安寧を保護するのであるから之れ又須らく我國
に居る外國人の貧民に對しても行ふべきものである又十年以
上我國に居ないものは云々は勿論の事である。私は提出者が
何のためあつてかいるものを作り出したかを知るに苦しむも
のである。又提出者は如何なる方法によりて之れを行はんと
するのであるか國家が直接に手を下してなすべきものである
か將た社會をして爲さしむべきものであるか。それから世の中
には種々なる貧者があつて例へば社會から排斥せられた爲
めに貧となりたるもの或は少年より懶惰なりしたため自ら貧に
陥りたるもの之等は一々區別しなければならぬのである。

後如何なる問題となりて現はるゝやも知れず霜を踏んで堅氷
の至るあるを以て今の間にこの問題を解決するは最も得策な
りと思す

と論ずるや 保守黨の重鎮

君は慨然とし

て壇上に表はれ悠悠々迫らずして説きて曰く。

「諸君よ本員は保守黨を代表して我が黨の意志を發表せんと
欲するものであります。恒産なき者は恒心なしと云はれてゐ
るけれど恒心がない許りでなく往々にして罪を侵すに至るも
のである我國は元來餘り貧富の差が甚だしくない従つて貧者
の餘りに無かつたのであるが今日としては外交上より破れた
るものを保護する必要が生じたのである。では何故に吾輩は
反對するかと云ふに自分の反對する所以は其の内容の如何に
あるのである換言すれば内容をもつと完全にせよと云ふので
ある、かゝる不完全なるものを以て然も何にせんか欲するや
果して天命を完ふせしむる道なりや？然らずんば諸君は情民
を製造せんとする積りなりや！如何なるものを以て保護者
とすべきや此の點に關しては歐洲にありては七十才以上と云ふ
のが定めであつた。我國に於ても明治七年の制度によりて同
じく七十才であつたが之は無茶苦茶に定めたものであつて國

自ら貧を求むるが如きは救助の必要無きものである。故に此
の法案を作るには斯くの如くせば斯の如くなるものなりてふ
確信を以て然る後に爲すべきものではないかと我黨、雖もか
かる考へは有するなれど未だ其の方法の適當なるものを見出
さざるが故に之を提出しない次第である。然して之は果して
誰をして爲さしむべきであらうか知事をしてか或は村長を
てか地方によりては知事をして爲さしむる所あり將た町村長
をして爲さしむる處ありて一定はしてないのであるが要する
に國家が自身でなすこと云ふのは大なる誤りであつて是等は須
らく彼等貧民の最も近き親としか子とか又は兄弟をしてなさし
むべきものであらう。然して市町村長は其の地に住する貧民
にとりては全く親兄弟の如き位置にあるが故に我國にありて
は須らく市町村をしてなさしむべきである。もし一朝其が費
用の不足したる時だけ國家が之を補助すべきである。要する
に之等はすべて提出前に於て委細に定むべきものであるが故
にかゝる放逸不完全なる提出には全絶に不賛成を稱ふるもの
である。」

と論じ去り論じ來る處さすが専門家だけだと感
心した、井口進行博士は最早論ずる余地なきも
のと見て取り議長に對して投票を請求す依つて

議長は賛否の如何を決するため賛成者の起立を求む少数否決。

第五試験制度廢止に關する建議案に移る。

先づ自由黨深井龍太郎より委員長の説明あり。

歐洲殊に英佛兩國の教育目的を觀察するに前者は主に品性の修養と専ら智識吸収に力を用ひ、後者は一般に實力養成に勉めず單に試験通過を以て事畢れりとなすの風あり、吾國教育の目的は後者に類似して試験制度の極端なる弊害に陥りつゝあるは看過すべからざる事なり。

と言を起し次で具体的に其弊害を指示して曰くかの學期試験のごとき且つは最も困難なりと稱せらるゝ各種官立學校入學試験のごとき、更に在校中は勿論法科のごときは大學卒業後尙ほ高等文官試験を要するの類是れ眞に學力を判定する能はずと

最後に

清朝が科擧制のため其滅亡を早めたる覆轍をなす憂なきにあらざる故國家はかゝる惡制度を廢し學生が進んで學に親む適當なる法を設けられんことを

と詳細に説きて降壇す。次で川島政府委員より

大臣の主義代讀あり、其大要左の如し。

一、小學校に於ける特殊の試験は已に數年前廢止せられたれど實際に於ては成績考査に當り殆んど普通試験に等しき日課成績を以てして兒童の實力を調査し延いて學習力を督勵せんとしつゝあるもの多きにあらすや 試験制度廢止の論すでに久しき以前より囂しくして而かも實際に行はれざる理由は、これを以て明なり

一、試験制度を廢止せんとせば先づ學制を根本より改正せざる可からず、學制を依然として改めずして單に試験のみを廢せば其結果たる寒心すべきものを生ずるに至るべし。

一、試験を以て生徒の學習力を督勵し其學力を増進せしめんとするは教育上賞讃すべきことにあらず、試験なくして彼等は精力の續く限り勉強し研究せば誰か試験の要を認めんや然れども吾國現在の學制組織及び實際の情況に於ては試験は唯一の成績調査なると共に又督學獎勵の最大機關なり試験のため勉強するは不可なりといへども教育界多年の習慣と現下の趨勢なるを如何せん。

一、されば論者のごとく試験を廢止せんとするならば先づ此習慣と趨勢とを根本的に改め試験なくしてなほ且つ十分に奮勵努力して學習せしむる他の方法を案出せざるべからず、此

方法案出に就きて適當なる意見なくして徒らに試験廢止のみを唱道するは學生の習學心を萎靡せしめその實力を低下せしむる愚論と言はざるべからず。

かくて原案不信任の聲漸く高まらんとするときは急進黨副總理樞山眞氏又も反對意見を滔々縷述す、即ち。

試験制度廢止はユトピアを夢みるご等しく言ふべくして行ふを得ざる事實なり吾々現今の教育制度に徴して明なるごごとく

一、才徳充實せる教育者に缺如せるごごとく
二、財界と關係上教育の理想なる十二三人を一級として教授すべき校舎の設備不完全なるごごとく

三、小學より大學に至る連絡の不十分なるごごとく
等の諸點を有す殊に存廢問題の急は State Examination に存す而も是のステートエキザミネーションの今日廢すべからざるは白明の理にして要するに試験制度の廢止は今日の所行ふべからず、只試験に伴ふ弊害を救済すべきのみ

茲に快辯小島代議士(急進黨)立ちて亦原案反對を唱へ急進黨の綱領を貫徹す、曰く。

學生一般の傾向は常に學業放擲に赴かんとす。是れ掩ふべか

らざる事實なり。原案提出者は試験のために學生が過度の勉強をなし健康を害するの由を説かるれご分外的結果を欲せず自己の力量に相當する効果を求めんごせば是れ決してかゝる患あるごごなし。試験を恐るゝは弱者なりかゝる弱者の泣聲に耳を貸すごごなく此有効なる試験制度は存立せらるべきものなり。

原案反對の聲高く形勢穩かならざる時突如保守黨の福永代議士壇上に躍り立ち、其黨を代表して原案賛成の由を述べ。

現今の最急問題は試験制度廢止の決行に在り。我學生と歐米學生とを比較するに我學生は頗る小心翼々たるが如し。思ふに我教育制度の然らしむる所乎。我教育制度は凡人を作る制度也非凡の人間を作る制度には非ざる也、教育の眞髓は長所を飽く迄發達せしめ短所は之を補ふに在り、現今の教育主義は詰込主義也。されば現今の所謂優等生者は唯記憶力強き輩のみ。聞く年々大學卒業試験場にて卒倒者數人有り、今や彼等は社會の門出に倒る家庭及び國家の大悲痛事也。思ふに之れ試験の然らしむる也。試験は學生に取つて悪魔也。青年を不具にし又は生命をも奪はんとする惡魔也。豈唯學生の不幸

のみならんや社會の一大痛恨事たらずんば非ず。速かに試験を廢止すべし。若し是をしも廢止す可からずば何をか廢せん。以上の如きは尙ほく忍び得とせんも次の事如何。東京の中學校は高等學校志望者と實業志望者とを分離して教育す。夫れ中等教育は國家の中堅の養成を以て目的とす。高等學校志望者なるの故に他生を分離するが如きは誤れるも甚し。斯の如き校長は恐らく事理を解せざる人乎。我は驚けり是の如き無智、無能、無頓着なる者にして尙ほ且つ重大なる國民教育に携り得る帝國人物の拂底せるに驚けり。蓋し中學校長たる者何ぞ中等教育の目的を知らざる可き。然し事實是の如きは試験制の然らしむも也高等學校入學者數の多寡によりて學校を評價せんとする誤れる見解の然らしむる也。高等學校入學試験の爲めに國民教育をも犠牲に供せんとするか、嘆ず可き極み也。若し國家の前途を患へずんば止む苟くも國家を思ふ一念あらば速に斯る制度を破壊すべし。患ふ可きは此時に在り。支那の科擧。佛國の試験制。思ふだに總身の慄然たるを覺ゆ。あゝ國家の前途。

先づ委員長中平政雄氏より滔々次の如く其提出の理由を述べらるる。
一、國民が年々巨萬の財を投じて學校教育の施設經營に資する所以のものは國家有用の材善良勇武の國民を養成せむが爲めにして師範學校はこの根本義に基き第一に設立せられたるものなり

此に於て井口進行博士より議案の採決を請求し結果少數を以て否決となる。
第六師範學校廢止に關する建議案に移る。

二、然れども此師範學校制度は今より殆ど三十年前に布かれたるものにして當時該入學者數少かりしため給費を以て辛うじて社會の要求に應じたる有様なりしも漸々生存競争に追はれ或は兵役上の義務を免れんが爲め年々師範學校志望者増加し更に私費を以てしてもこれが入學を希望する者益々其數の多きを加ふる現今さなれり

五、一方中學校又は高等女學校卒業生にして家庭の實務に服し又は高等の學校に入學し能はざるもの過半數を占むる現時の社會状態に鑑み人物の經濟及び地方費の節減を計らむがため師範第二部制度を更に擴張して従来より優良なる中學校及女學校の卒業生を之に收容し一層其教員たるに要する二ヶ年の補充教育を施し得る設備を中學校又は女學校に附設し以て現行府縣師範學校令を全廢せられむことを望む

三、その制度の現今の時勢を背馳する所あると共に學校は依然として重箱主義を取り従ひて教員も自ら因循となり其結果之に學ぶ生徒は己が個性を矯められ豊富なる學識を養ひ十分な人格の修養をなすことなくして混沌たる社會の風潮と戦はざるべからざるに至れり

もの甚だ多し
四、故に往々世人より學識の淺薄にして人格の劣等なる批難を受くるに至り延ひて教員の待遇は高められずして家計上の不如意を招き加ふるに始めより虚弱なる身體のため疾病を醸す

四、故に往々世人より學識の淺薄にして人格の劣等なる批難を受くるに至り延ひて教員の待遇は高められずして家計上の不如意を招き加ふるに始めより虚弱なる身體のため疾病を醸す

物經濟の上より見るも經費節減の上より見るも國家の慶事に於ては過ぐるものなし
三、然れどもこの種の論は小學校教師の職責を輕視し小學校教員の國家的重大事業なることを忘れたるものにして國家百年の長計を誤るものと云はざるべからず

見よ師範學校に於て二部制度布かれてより茲に僅に四ヶ年しかもその卒業生の成績に至りてはこれを一部生のそれに比すべくもあらずとせば、かくに實際家の間に唱へらるる所且つ彼等は任地の如何により又些々たる不満によりて職を抛つもの相つぐの情態にあらずや而してその事たるもさより怪しむに足らず

一、師範學校廢止論は多年來一部人士の間に唱道せらるる所なるが若し現在の師範學校を廢して教員養成所の如きものを設けんとするならば師範學校の廢止必ずしも不可なきにあらざるも全然この種のもの除去せんとするならば國家の現状を顧みざる極端論と云はざるべからず

次に中學校高等女學校の卒業生にして小學校教員たらんことを志し二部入學を志願するもの比較的僅少なることも亦注意すべき事なり之れを全國の統計に徴することは今急に材料を有せざれども之れを石川縣に於ける五ヶ年間の募集人員と應募人員とを比較すれば所要の人員を満すことすら甚だ困難なることを知るに足るべし

二、師範學校廢止論者の多く唱ふる所は近時中學校高等女學校等増設の結果その卒業生にして職を得ざるもの極めて多しこれらのもを適當に採用せば僅に小學校教師の數を滿たすことを得べくこれに仍りて莫大の師範學校費を節減し得べく人

試みに全國に於ける正教員の不足數を文部省四十三年報によりて見れば五萬四千八百人の多きに及ぶ且つや現況小學校教師の職をやめるもの多し且又人口増加(年六十萬人)に比例し

て學級増加夥多なり然るに今若し假りに師範學校を廢止し前述の如き教師を以てこの不足數を満たすせんか小學教育の前途誠に暗澹たることは自明の理と云はざるべからず

されば小學校教育の中心となる多數の小學校教師は師範學校の如き特殊の設備嚴格なる規律の下に養成し確乎たる決心を以て國民教育に盡さんとする人を以てこれに當てこれを補ふに中學校高等女學校の卒業生を以てするを當然とす。かの中學校卒業生に職を得しめんため又は經費を節減せんため國家盛衰興亡と至大の關係ある小學校教育の中心たる小學校教師の養成法を謬る如きことあらば實に由々しき大事と云はざるべからず

茲にまた採決を要求することとなり、議長は賛否の數を調査したところ少數を以て原案は否決となる。

第七現行刑法中改正に關する建議案

先づ委員長海老名敬信氏より建議の主旨を大要左のごとく述べらる。

現行刑法の明文に記載しある死刑の二字を削除して明治四十四年四月公布になつた新刑法により削除された無期徒刑を復活

と述べ次で左の如く訂正すべしと主張す。

一從來の死刑を無期徒刑に改む

一無期徒刑は島地に派遣して勞役に服せしむ

一假出獄保釋等は無期徒刑にも之を適用す

更に進むで其理由として滔々數萬言をあげて進歩したる現代に於て死刑廢止は當然行はざるべからざるものにして是を躊躇するは實に國家の大損害なれば切に此委員會の決議に賛成ありたしと詳述して降壇す。

此に於て急進黨總理平泉法學士壯重なる辯を以て登壇して痛烈に原案の實行すべからざることを、其根本的より誤れることを説く。

論者の死刑に代へんと欲する終身刑なるものは何なりや、終身刑は畢竟死刑に等しきものならずや
死刑は人民に殺伐なる氣風を養ふに至るの主張はむしろ滑稽に類す吾人はいかにしても此の憂を想起する能はず、次に文明と死刑とは相反すは其確たる理由を發見する能はず、

講演部報

有志演說會

かの大逆事件又は佛國郊外自動車泥棒のごときは吾人死刑を措きて他に其刑を發見する能はず。刑權は契約なりとするは甚しき誤解と言はざるべからず刑權はかかる平等權にあらす。次に死刑は人をして自暴自棄に至らしむと主張すれど無期徒刑はいかに

と縷々數千言を以て建議案の採用すべからざるを説き
故に死刑は廢すべからざるは理論上明白なり、裁判官には往々にして誤判ありと言ひ彼等に絶對的に誤判なかれと要求するは當を得ず。而も裁判の目的は改化遷善にあるが故に其大罪を冒し改化遷善を望むべからざる輩を社會に殘留するは最も危険多きを思ひ茲に死刑は執行さるゝなり。此極悪非道の人を他人と隔離するがためには死刑に若くはなし。故に現下の社會狀態としては死刑廢止の必要毫もなく却て益其用を増すのみ。

最後に裁決となり結局少數原案否決となる。殘れるは海軍擴張案のみとなりしが時間に餘裕なかりしため日程を變更して閉會を告ぐ。

武士に非ざれば人に非ずとは幕府時代の武士の驍言劔即ち權を永劫不朽の眞理とせしを自由平等を知らざる封建治下の國民なりき。苟くも萬機を公論に依て決す可き憲政の下時代遅れの武斷政治は一日も許す可からず。劔力竟に内に於ては何等のオーソリティーをも値す可からざるなり。天下の政權頭者漸くサーベル黨を離れて政黨に歸し官僚内閣顛覆して理想的責任内閣又近くに出現せむとす。憲政運用上の一大進歩として大に賀す可きなり。然れども吾人一度翻つて所謂言論の府に列し七千萬國民に代つて天下を議す可き彼等堂々四百の議員にすらなほ且つ所信を掲げて議政壇上諤々の辯を揮ひ得る者寥

寥數ふ可き國家現時の狀勢に想到しては轉た憲政の前途危い哉と嘆せざる能はず、憲政有終の美は健全なる言論に待つや頗る大。沈滞せる言論界の活動正に之帝國刻下の急務なりとす。一等國の資格何處にあるか 杉本君

十一月九日午後一時有志演說會を開く。先づ石端委員登壇。多年望むで得ざりし有志演說會の開催を見るは全く諸子の努力に依る。北辰言論界の爲め萬丈の氣を吐かれむことを望むも述べて降壇。積極主義に活動して勇往邁進すべく保守消極は絕對に之を避く可しと絶叫し最後に理想的國民

諸君樂觀せよ 中澤君

天保生の先輩口を開けば必ず現時の青年は腐敗せり墮落せり輕佻なり浮薄なりと稱してあらゆる冷嘲惡罵を青年に浴する傾向あれども事實は決して然らずと斷じて其實證を過去二戰役に於ける青年の勳功にとり更に語を進め先輩は青年の金を目的として學ぶを難すれども必ずしも墮落とは高きより低きに下ること腐敗とは潔き

田村君

忌むべき現象ならず。利己主義時には必要なりより不潔に變ずる事なり。後人の謳歌して已ま

ざる堯舜時代及び希臘羅馬時代は果してしかく高く潔かりしか。否々然らず。吾人は寧ろ現時の之に比して優ること數等なるを認むと述べて其理由を説き更に現時青年の道義頹廢を嘆ずる者あるは全く其着眼点をあやまれるに起因すと痛論して氣焔萬丈。次で世界の大勢より現時青年の責務を論定し高く且つ潔き現時の青年は益奮勵努力して以て向上發展の道を講せざる可からずと結ぶ。稍朗讀演說に傾きたれども至誠溢れて而も熱せず急がず焦らず理路整然として亂れざるところ君が平生も偲ばれてゆかし。知識慾を齎す、然るに知る可きこと無限にして

文明の齎せる悲哀

近藤君

人の精力は有限なり。知らむとして得ず。即ち

滿目蕭條たる冬枯の都大路荒れ狂ふ風の中を匆忙として去來する人の子を見よ。不斷の苦闘に疲れて頬こけ色褪せ眼には悲哀の光を宿せり。而もなほ彼等は或物に追はれて來り或物を求めて去る。やがては消え果つ可き露の身の何を苦た恐る可き哉と結びて降る。思想豊富にして説

くこと明快。但し抑揚に缺け多少單調の嫌あり 慷慨悲憤の涙の乾きし國は終に滅亡なり終に滅亡なりと咆哮して降壇。熱誠面に溢れて意氣正しは遺憾なり。

悲憤の涙

井村君

君元來四高論壇稀に見るの熱血男兒。開口一番に自重せよ。に天を衝く。辯は人なり。君希くば國家の爲め

彌次大にやる可し。辯士至誠の叫を發す聽衆の胸裡豈に之に應ずるの響なくして可ならんやとあり。大体次の如し。 喝破す。

雄辯の權化デモステネスの一生は實に慘憺たる 2、街ふ可からず。率直に意思を發表すべし。 悲劇なりき。コロリヤ島に敗殘の身を横ふるや 3、積極的なれ。 彼は彼を思ひ此を思ひ悲憤慷慨の熱情禁じ難く 4、眞面目なれ。 終に百尺の巖頭に攀ち狂瀾怒濤の逆卷く海に向 5、各辯士に就ての批評。 つて彼獨特の雄辯を恣にしたり吾人は彼の態度 永井委員登壇。講演部今後の抱負を述べ辯士及を欽す。同情の涙は高尚なれども未だ以て悲憤 石川教授の熱心を感謝して降る。三時半閉會。 の涙の尊ぶ可きには及ばず。彼の大雄辯は實に 風寒く天暗し。(石端生) 悲憤の涙に依て培はれたるなり、又見よ維新の 大業は全く幾多の勇士幾多の志士が流せし悲憤

第一回演説會

一月二十五日

の涙の痕に非ずや。諸子大に慷慨悲憤して泣け

浦賀灣頭一發の砲聲に二千年の芳夢は破れ、旭す。平家没落の悲運また已むを得ずとなす。彼 日堂々東海の波上に躍つてこゝに五十年。内に や優柔不斷にして怯懦、馬に乗れども進むを知 憲法發布せられて施政の基礎定まり、外に清露 らず、劍をとれども抜くこと能はず、只管血を怖 二國を破つて國威八紘に輝き、日東帝國一舉直 れて死を好まぬ犬武士なりき。然れども冷かに ちに世界諸強の伍班に列せり。之正に我國長足 觀察すれば彼にも彼として採る可き長所なしと の進歩となすべし。然れども明治は未だ憲政の せず。古今稀に見るの人情美即ち之なり。彼は 運用十分ならず、且つ増税につぐに増税を以て 劍を握つて戰場に馳驅する武人に非ず。深窓花 したる結果民力の疲弊となつて名實甚だ沿はざ を詠み月を歌ひ。人情に絡まれ人情に泣かれて る者あり。四十五年の明治は竟に眠より活動に 終始すべき粉黛の公達なりき。木曾の山氣漸く 移らんとする過度時代に過ぎずして、眞の大飛 迫りて一門身を置くに處なし。住なれし花の都 躍は正に大正の今日より始まらんとするなり。 を燒野の原と眺め西に向つてさすらひ出でし時 大正第一の新年を迎へたる本部は、新しき希望 の彼が感慨果して如何。憶へば彼の爲めに一掬 と抱負を持ってこゝに至誠の迷る革新の第一聲を の涙禁する能はず。吾人は冷かなる社會の勝利 放てり。渡邊委員年頭の所感を述べて開會の辭 者たらむよりも寧ろ温き人情の權化として敗れ となす。 たしと叫びてをいる心ある人の胸を刺る。

平宗盛を憶ふ

田村君

忠孝

杉本君

清盛逝き重盛死して繼ぐに宗盛の凡骨を以て 他國は知らず。我國にては文學宗教教育すべて

忠孝を以て基礎となす。屢、歐米諸國に見るが如き、父子法廷に争ふ醜体斷じて之を我國に見る可からざるは全く以上の事實の存すればなり。然れども思想は刻々に變化す。不健全極まる歐米思想の潮流我思想界に侵入して、恐る可き動亂を來さんことなしとせず。忠孝あつて初めて日本あり。警むべし。大正は正に國家活動の時機。活動の根本は必ず之を忠孝に置かざる可からずと説く。説き去り説き來つて意氣自ら昂る。君や正に至誠の人なり。

北國健兒の意氣 深井君 而も日清日露の戦起るや、五千萬の同胞舉つて越中は横綱の産地、又反魂丹を以て天下に名高し。此二つを度外して人の頭に果して越中ありや。加賀は百萬石の城下と兼六公園とを以て天下に知らる。此二者を除ける加賀は、天下の加賀として果して何等の意義をか有する。越前能登の如きに到つては元より語るに足らず。嘆す

建國と武士道 山岸君 徳川三百年は士風の最も衰へたる時代なり。而も幕府の將に到れんとするや、所謂彰義隊及び白虎隊突發して士道の爲めに氣焔を吐けり。王政復古となりて武士の階級を廢し、國民皆兵の制を布くや又一人士道を語るものなし。

諸君は SPRONG IMAGINATION を有す。即ち解し難き演題を故意に選びし所以なりとの前提して本論に入る。人は皆哲學宗教文學其他種々の分子を合せ有するものなり。青年時代に於て其等分子の増殖殊に甚しく、時として休火山の爆發するが如くに突發することあり。突發に二種あり。社會を益するものと害するもの即ち之なり。世に三文文士なるもの存す。彼等は自然主義享樂主義星望主義曰く何主義何主義變挺極まる主義を振廻し矢鱈に甘つ垂き言を弄して自ら豪ぶる。彼等の突發は正に後者に屬す。過日佐藤海軍少將を聘して講話を聴く。少將が確固不拔の信念燃ゆるが如き誠の發露、實に神に迫るを覺わたり。之勿論前者に屬す。吾人は飽迄前者を尊んで後者を排斥せざる可からずと結ぶ。縦横の辯、潑刺たる意氣共に四高論壇の誇たるに負かず。

輝く旭光の下に 早川君 燃ゆるが如き努力は之より生ずればなりと喝破

輝く旭光の下に 早川君

燃ゆるが如き努力は之より生ずればなりと喝破

し學生の滴々は休暇にあり。休暇は成可く潜勢あり。之をドムレミーといふ。オルレアン城危力を養ふに用ふべしと説く、着想新奇に非ざれ急の報村より村に響き人は皆一種不安の念に驅ごも何となく新しくきかされたり。

釋迦と佛教

谷山君

一人の花を欺く美少女ありき。偉人ジャンダ

釋迦降誕當時の印度は階級制度厳しく、波羅門一ク即ちかれなり。彼女時に芳齒十六。祖國の專横を極めて恰も火山の將に爆發せむとして間難を救はむが爲め自ら馬を陣頭に進めて防戦大隙を窺ふが如き状態なりき。彼が教義の忽ち印に努む、後三年遂に英軍に捕へられて殺さる。度に普及したるは、彼が不撓不屈の努力に依る。我は彼の可憐なるベトリオット、ジャンダークこと勿論なれども、當時の時勢も亦與つて之にを慕ふ。

力ありしこと疑ふ可からず。彼は空想家に非ず。伊太利のカブールは十九歳にして既に伊太利のして實行的精神強烈なりき。クリスト教の感情ワシントンで以て自ら任せり。伊太利の隆盛はを尊ぶに反し、佛教の理論を根據として立つは彼が時勢を洞察するの明及び彼が不撓不屈の精全く之が爲なりと論じ、更に進んで釋迦の臨終神に負ふこと頗る大なり云々と述べ來つて最後を説く。説くこと時餘。近來稀に聽く内容の充に使命を自覺せよ犠牲的精神を以て活動せよと實せる演説なりき。絶叫す。

可憐なるベトリオット 井村君

佛蘭西の東北山又山に圍まれ四時綠色濃き一郷時閉會。

巢山委員登壇して辯士諸君の熱誠を感謝す。十

此日北國自然の雄辯天空に叫むで、柳絮頻りに窓を撲つ。(石端生)

第三回北陸各中學校

聯合演説大會

一、開會の辭

巢山委員

吾人の活躍の時期は將來の生存競争の激甚なる時に存するなり、されは吾等大なる未來を有する青年は活動の利劍の辯説を練るべきなりと説きて降壇。

二、疑問の英雄 金澤一中 石川君

徒に物質文明にのみ心醉せるものにあらず、思想界は決して眠れる者にあらずと確證せられし新時代にあたり益志意を修め、身行を慙にしこの確證を一層明確ならしむべきは吾人の責務に非ずや、北陸論壇の統一を對象として立てるこの聯合演説會の企てられて茲に三星霜、寂寥なる北國の言論界を資せしこと纔少ならざるを信ず、今や修養の好機なり、質的既に張るる弓矢至るべきなり。金城の一角鐘鼓響き銀鞍白馬の幾多の辯士を迎へ新時代の青年の意氣のバロメーターたらんとて茲にこの會を開くに至りぬ。

悠々迫らざる態度、透つた聲にて小學時代より漠然崇拜し來れる南洲翁を分解的に説き彼の偉大はたゞ同情に存すごなし彼の一切の節奏皆同情心を基とせり、而して此の同情心は又乃木大將につきても見らるゝなり、大將の恩賜金を部下に配たれし如は又無限の同情心にあらずや、古來英雄は皆同情心ありしなり而して同情は至誠より出づ、至誠の人たれと叫んで終る。

三、不平と満足 礪波中學 山森君

遠來の好賓質素なる制服姿にて無邪氣眞摯なる態度にて豊富なる内容を携へ先づ満足の何たる時は二月八日午後六時より。至誠堂に於て。

をいひ、その境遇の如何によりて來れるものを
斥けルッソの如き彼の満足は境遇によりて來

五、無形の大山こそ嶮しけれ
農業 本城君

れるもの故に排斥すこなし眞の満足は良心の叫
吾々青年は春の若草なり、而して最肥料を要す
なるべし。而して良心の満足は人格の圓滿發達
の時代なりさればこの春を徒にすごさんか農事
なりと説き、次ぎに不平を説いて人生の最大不
の余々水泡に歸するが如く遂に世をはかなむに
幸なり而し不平は人格の修養の缺如に來るもの
至るべきなり。ファウストが青年に歸らんと叫
なればと修養の要を説く。

四、ハンニバルを論ず

小松中學 前川君

朗々の音滔々の辯堂をゆるがす、今少し落着が
任ある吾々中流社會の青年の前途の大山を越ゆ
ほしかつた。古來英雄の士の偉功を遂げしは皆
るを用意せよと。

六、吾人の使命
商業 中田君

統一せる民族、愛國心もゆる國民を以てせり然
熱しきつた態度にて世界商業史をひもとき東西
るに彼ハンニバルは然らずたゞ一片部下を愛す
共に商業の卑しめられプラトン、ソクラテスにも
の一事にして彼の大業をなせりと讚し、彼が
虐待されスバルタにては公民權なかりしとて憤
ローマに迫りて之を攻むるを得ざりし心事に、
彼の悲惨の最後に同情し更に彼が文武の將相た
概し、かゝる不法は決して永久的のものにあら
りしを叫んで降壇。

す見よ十九世紀の自由産業主義の發達にともな

る商業の發展をと、大に痛快を叫び大正の新天
て吸収力の偉大なりしより説き起し、過去五十
地にては一切が商人の前に胃を脱ぐべしとて大
年間の歐洲文明を吸収するの敏活を讚歎し、翻
に氣焔を吐き、一切の商業にむけらるゝ批難を
つて歐洲文明の暗黒面を説き我國が未だかゝる
駁して、需要供給の必要、投機の妙用を巧にい
弊害の侵略をうけざるを喜び今後益々其の文明
ひ、ナポレオン、コロンブスの投機を寛容する
を輸入するにあたりての注意をもとめ、更に日
世人か商人の投機をとがむるの不合理をいひ。
本の文明の缺陷を痛快に指摘して餘すところな
商人の競争心を尊重して社會發展の油なりと
く、明治の四十五年間は歐洲文明のコレクション
し。その理想の萬里の異境に國旗を輝すにある
ンなりしなり之を整頓し統一するは大正の青年
をいひ。次て拜金主義に對する批難を攻撃し我
の責任なりと明快なる頭腦を以て説けり。

八、日本の産馬
農業 小林君

國の現状を説きて大に黄金萬能をいひ、將來の
容貌堂々たる一偉丈夫立てり。老成なる口調に
覺悟として第一にパナマ運河の利用を商人的に
て馬は哺乳動物なりと動物學上の分類より始め
説いて降壇す、説き去り説き來る熱烈の辯人を
て歐洲の馬は人間より以前にありて現在の形
動かすに足れり。

七、現代文明と吾人の覺悟

七尾中學 坊城君

ゲートルを着けて歩調正しく登壇、徹底した態度
使用せられ天智天皇時代には牧場の制定められ
にて明晰に説く、我國の特長の進歩發展的にし
天武天皇の朝には馬に關する法律制定せられ頼

朝の時代に至りては馬の占有によりて一國を動策に外ならず、米國のおそれらるゝ富は南北戦すに至りたりと馬史が馬鹿に詳しい。更に現状争以後の工業の發展によるに外ならず。而してを説いて世界の馬の總數は九千五百七十一萬千我國の發達の武力的なる變態と不安を説き決し五百七十一頭、我國はロシアの二十九分の一してかゝる状態は永久的のものにあらず今日既にかないそうた。かくて大農制と馬匹の關係、軍危機に迫れるものなりと悲觀し國民が工業の發事上の必要に論及し、戦争當時僅かに十五六萬展に援助せんことを希望し我國が化學工業の發頭の馬を徵發してすつからかんとなりて外國よ展に恰好の境遇にあるを専門的に説きて、更に輸入せる我國馬界の貧弱を慨ぎ、實に人力車警醒して獨乙人の一化學者の試験管は彼の一艦人種、こたつ民族には馬思想なしと痛罵し大に隊よりも恐るべきものなりと。嚴格なしんみり馬匹の改善を要求し一國の強弱は國民の馬思想した調子にて説く。

によつて窺ひ知るべく、文明の程度は馬を以て 十、自我論 礪波中學 中村君
知るべきなりとて馬匹の改良發達は國威を保つ 自我保存愛重は吾人の本能なり。而して自我と所以なりと説けり。専門家の豊富なる内容ある は何ぞや、五尺の空間五十年の歲月の自我はあものとて大に喝采を博したり。 まりに貧弱ならずや、吾人の所謂自我はかゝる

九、工業立國論

工業 紺谷君

英國の發展はビクトリア女皇の産業立國策工業 部分のものにあらず、五尺の身は自我の一部政策に、獨乙の勃興はツイヘルム二世の産業政 社會之皆自我の一部なり、之を去りて自我なき

也、この意味の自我を發展して賢者聖人の域に を痛罵し慷慨す。二十世紀の活舞臺の太平洋を達し得るなりと説き次で小なる自我にとらはれ 活用し我國其の覇たらしむるは吾人の使命なり、し利己主義目前主義一時主義を罵倒し、志士仁 かくして吾人は正義の示す所に向つて奮闘すべ人の身を殺して仁をなせるは小なる自我を捨て きなりと元氣洋溢した態度を持して。

たる大達觀者なり、釋迦自我の領域大なりし故

十二、誠

金澤一中 宮西君

其の生命は永遠なりと説き。次で自我愛の本能 吾人の天地間に介在するはたゞ逆旅にあるのを説き吾人は自我愛のためにはたらき自我愛に み、而して之が宿賃を拂はずして良心に恥るなよりて忠君孝悌愛國の美德を生じ、之を萬物に きや、豪傑も英雄も孤立し得るものにあらず協及ばせば博愛の徳生ず、自我保存により一切の 同生活の恩恵に浴せる以上は之に對し報ふる所人道社會の問題は説き終らるべし。吾人は大な なかるべからず、之人の道なり。この道のためる自我のために奮闘せん、と説き終りて昂然。 吾人は動くなり、而して堅忍不拔斷乎として事

十一、正氣

魚津中學 小澤君

をなすべく、この時や吾人はたゞ義を守りて奮

動は一般的宇宙的なり、而して動かすものは靈 戰す、而してこの義たるや生死を超越せるもの氣なり、正氣なり、と説いて文天祥の正氣の歌 にして其の由來する所は皎々たる衷心一片の誠を誦し正義の須臾もはなるべからざるをいひ楠 なりこの誠は天氣の靈氣に合致するなり。要之公の不死、松陰の正義に殉せるを説き熱血をお 吾人は誠によりて始めて圓滿なる完全なる大人とらしむ、更に阿修羅の如く雄たけびして時弊 格を作り得るなりと、自由自在の辯、操る演説

であつたが落ち着きすぎて生氣に乏しかつたのを惜む。

十三、人間到所青山あり

小松中學 今井君

舊時代の陋習を罵りて海外發展の急を説き、東西南北に自由の天地の介在するも西米國は偏狹大國の資質を缺く故に、北進は人間の本能に背く故に何れも永遠の方法にあらず、吾人の眞の頼るべきは南なり、熱帯は世界の寶庫なり、寶庫さぐらざるべからず、已に世界の大勢は南へ南へと進めるにあらずや、次て我國と南洋との各種の關係より大に發展の餘地多きをいひ、パナ、の實熟する所に吾人の樂土は見出さるべきなり、吾人は山田長政を忘るべからずと。

十四、日本我 金澤二中 丹羽君

明は呪ふべきにあらずたゞ之を以て現代の一切の動力とせんとするは誤れるなり、而して吾人は列國の好意は畏懼嫉妬となり内にありては自

泰西崇拜止みて國民性の自覺となり外にありては自

十四、日本我

金澤二中 丹羽君

泰西崇拜止みて國民性の自覺となり外にありては自生活の裡面は世紀末の痼疾によりて、この潮流

本校 樅山君

十五、自然を憧憬して力の人たらんとす

例の絢爛の修辭と質量に富んだ音吐で雅趣に富んだ辯を操る所矢張當夜の花であつた、物質文

によりて壓迫されつゝあるなり、一は社會的生理的即人間的のもの、一は超人間的のもの之の壇上に立ちて説を吐くは道德上の背水の陣を布けるものなり故に常に精神修養に怠られざらぬなり、此主義は心の權威、良心の叫に耳をかかんと祈るものなり又諸君の演説は未來に富す人即人たる人はとりて道德の徑路とすべし、この主義の源泉は自然なり、自然は偉大なる真理の源泉にして何等の僞なし、吾人は眞生活を營まんには自然にすぎるべきなり、と説き次で社會の風潮の混濁を罵り人爵を侮り吾人はむしろコスモスの花にやごれる自然の大をよるこふものなりといひ、徳なく權力に眩惑せる輩を猿の月をどらんとするに比す。而して最後に將來の國運を荷へる諸君よ乞ふ自然の力をとれよと絶叫す。

十六、感謝の辭

八波先生

い。白い白い廣坂通を黒いかたまりが西へ東へ各辯士の遠來の勞を謝し演説に對する注意としと散つて行く、薄黒く見えた足あとには直ちに白く散つてしまつた、自然ははたらきの手をやめ

ない、自然の不休の活動に屈従するはあまり男らしくないではないか。雨も降り雪も積れ我等は至誠の利劍を提げて永遠に戦ふものである。

飽くことを知らずに語り合つた。清遊とは之をしもいふならんと思つた。(永井生記)

第二回演説會

殊に當夜の辯士の意氣をもて進まんか行く所青草をどめざるべきなり。

二月二十二日午後二時より至誠堂に於て開會。

辯はアートにあらず、血の迸なり、意氣の權化なり。内心の叫は之最大の雄辯なり。一切の扮飾は偽のみ。吾々は質實なる北人に於てこの偽なき雄辯、熱と血に充てる雄辯をき、得たるを悦ぶものなり。さらば辯士諸君幸に健在なれ。

四邊に堆い雪で堂は薄暗い程であつたが灼熱せる意氣の迸に充ち滿ち論壇は潑刺たる氣焔で賑ふので聴衆が一層色めきたちて見えた。

附記

一、開會の辭 新山委員

簡潔に開會を宣して拍手の裡に降壇。

二、成敗と忍 藤平君

翌九日の朝桂月の二階でさゝやかな茶話會を開いて當日の辯士諸君を招いた。當日は近來の大雪で積雪二尺にも及んだが若い血にみなきつた辯士諸君にはこの雪も何ものをも意味しなかつた。二十人の團欒は十年の舊知の如くに睦しく、九時から十二時迄。

成功の語は必然的に忍の字を想起せしむと斷定し、引例懇切先づ彼の赤穂義士が蕩々たる頽廢の時代にあたり毅然節を屈せず遂に不朽の名を成したるは實に忍の字の然らしむるものに外ならずと説き、次ぎに史記の列傳を誦すること數

次沛公を説き韓信、張良、藺相如を説いて其の斷定を論證し、最後に易、孟子の忍の説を紹介し、成敗を前にせる諸君のどらんとする所は何ぞやと喝して壇を退く。

三、曉鐘の響

加内君

開口一番聴衆に喝采を要求す、吾々は徒に吾人の存在の意義の研究を哲學にのみ委ぬべきにあらず。苟くも其の主体たる以上は大に研究すべきものなりとて獨特の人生觀を引證巧妙に説いて、先づ一切の科學の疑点より善惡の觀察の差異に説き及び、一切の状態は交錯せる二の平面より觀察せられ人々皆其の立脚点を異にして觀る故に其の疑点の解くべからざるなりといひ完全を以て稱せらる印度の五段論法も亦信すべからざるなりと音吐朗々聴衆を煙にまく。

四、生の泉

井村君

眞面目に宗教にはしりて失望するは其のなす手

段誤れるなり、即人多くは自己の生命の即生活活動の源泉を外に仰ぐの故なり。吾人の活動の源は其の腹に湧くべきものなり、自己の腹の水は永久に涸れず、吾人の依るべきはたゞこの源泉のみ、基督の所謂天國、佛の極樂は即ち之に他ならず、吾人の叫ぶ至誠之なり、即ち至誠は人生の慰安者たり生命の泉たり。自己の泉を負ひて立つものは永遠の未來を有す、自己の泉により生活を實現するものは其の生涯は神聖にして自然は之に靈感を興ふ、自己の泉により活動する人は人生の最大勇者なり、失望悲觀の毒舌より救ひ得るの途は唯自己の覺醒にあるのみ。

五、ナポレオンを憶ふ

角田君

永生は人の欲する所なり、されど奈翁は己の永生の爲國民の永生を忘れたるなり、彼は愛國の念を忘却して國を危くしかくして自己の永遠を

を今一日早からしめんにはと、彼のために一掬 盾を指摘し、彼の傳記が當時の一切の記録に於
の涙をそゞぎ、更に翻つて民族の永遠といふ点 て見るを得ざるの故を以てキリストを全然神話
より我國の歴史を尊敬し、自己に囚はれんとす 的小説的のものど断定せしが彼は又基督教と我
るは實に國民的悲劇ならずやと反覆す。 天理教と比較すべきものとせる点に於て大なる

六、雄 辯

藤本 君

撞着をなせりと喝破して曰く、彼幸徳某は基督

一切の事物は自己を表示せんとする傾向を有す は天理教の中山某に比すべきものといへり、然
就中動物は最巧にして人は最激く表さんどす、 らは今日の我國に於て中山某を知る者幾人ぞ、
而して之をなすに音は最も人を動す、音樂雄辯 又彼の傳記は彼等天理教徒の手になれる哀れな
是なり、而も雄辯は實に世界を動すものなり。 る貧しきものあるに過ぎざるにあらざるや、彼基
雄辯とは其の心がいはざるべからざるの時に噴 督も亦實に一労働者の子にすぎずや、一労働者
火山的に爆裂せるものなり、ルーテルの叫は實 の子が青史に名をとめずとて之を抹殺し去る
に是なり、我國の現状は漸く世界的大事業の端 は甚た遺憾とする所なりと、又説いて其の十字
をとれるのみ、向後世界を動すの雄辯を要する 架の神話的なる故にとて抹殺せるを駁し、宗教
や多々なりと大に演説奨励に努む。 は信仰者によりて作らるゝものにて信仰理想の
人格化せしものなり然るに著者は徒に抹殺に急
にして之を顧みざりしを惜めり。

七、キリスト抹殺論を讀む

志摩 君

八、來る可き問題

著者幸徳某はキリストの履歴の聖書に顯れし矛

八、來る可き問題

黒瀬 君

來る可き問題は貧富の懸隔より來るものにして 北辰光芒の燦たる所を明にすべし、物論囂々辯
前代よりも現代に於て殊に甚しきは前代には農 論日々に旺なる今日聽衆の數十に過ぎざるは之
業上より來り現代にては工業上より來ればなり れ徒に偷安の夢に耽れるものにあらざるかと叫
而してこの工業に於ける資本主と労働者との關 び、篠原先生の御好意を謝して閉會の辭とせり。
係は地位の不安、身体の自由、勞銀等のことよ 時に五時。冷い冷い春雨が堆い雪にしとくと
り常に論争絶ゆることなき状態なり、産業の發 降りかゝつて止まぬ、吾人に革新性を要求さす
展は常にかゝる暗黒面を含むなり、されば國家 原因の一は又この雨に外ならない。吾々は雨
の發展と共にこの労働問題の解決は國家社會の に呪はれて居る、呪に屈するは男子の意氣であ
あらゆる方面より最急務なり。 らうか。(N生)

九、悲哀の情緒

篠原先生

(先生の演説の大意は本欄に掲ぐ)

十、閉會の辭

金本委員

柔道部報

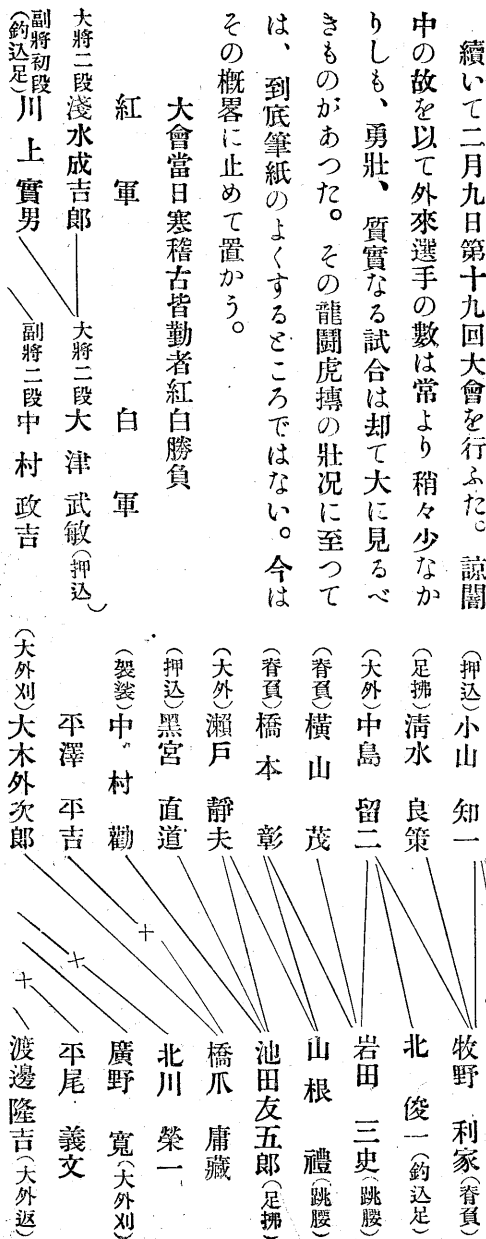
百萬石の雄藩なる過去の追想にのみ驅られ刺戟
なき身は徒に小なる安佚に耽れる金澤の空氣は
停滯沈澱動くことを知らず、周圍は退嬰の氣に

我部の近況

我が柔道部が一校士氣の鍾まるどころたる。
充つるとて吾人は之に誘惑せらるゝ可からずよ 今更賑々する必要はない。而しながら、嘗て南
ろしく革新性を齎し以て北人の意氣の存する所 下軍の劈頭に於て、洛陽の人士をして顔色なか

らしめた以來、目覺しい外部の活動はしなかつ 講道館五段三船久藏氏を招聘し、間餘に互る講
 た。自餘の運動部が其の精銳を掲げて、捲土再 習を願つたのであつた。降りしきつて居つた雨
 び中原に轉鬪馳驅せるに比べは、我が部は、寧に、凜烈たる北風でさへ、交つて来て、今は白
 ろ消極的とも思はれたかも知れぬ。蓋し炯々たる 雪皚々、北國の天地は爲に如何な戸外運動をも
 る北斗の群星中に超然たる如く、我また敵を四 許さないやうになつて來たのである、北辰健兒
 方に求むる要がなかつた、即ち、我が部の活動 の意氣が、たゞ無聲堂裡の一角に於てのみ現は
 が動的でなくて靜的であつたからである。是れ れて居つた其際、例ひ短日月と雖も、これが爲
 所謂至誠の默示に外ならぬといふことが出來や に得たる利益は、少くとも部員諸兄にとつては、
 う。然り、吾人が錐股の暇にも無聲堂に於ける鍊 多大のものであつたに相違ない。去歲春、嘉納
 磨の實は、滄渤として我が部の雄心を動かすも 講道館師範が來澤の折、特に我が部の爲に有益
 のがあつたのである。圖らずも吾人は國家の大 なる講演を以てせられたると共に、益々向上の
 故にあひ、外部的の活躍は遠慮せざるを得ない 途にある我が柔道部の發達史上、特書すべきこ
 こととなつた。謹嚴自重は、いふまでもなく、 どであると思ふ。
 臣子の分であると雖も 徒に愁雲に鎖され、蒼 寒稽古及大會
 然として、意氣の銷沈せるを以て、諒闇に處す 六花粉々、寒風膚を劈く、一月十日午後五時よ
 るの道となすのは、思はざるの甚しいものであ り、毎日二時間、四週間の豫定で、我部は例年
 る。茲に於てか、我が部は舊臘二十五日より、 の如く、寒稽古を初めた。時や遅しと馳せ集つ

た、稜々の士は、無量百三十余名。百疊に餘る 初段森 長四郎 ×
 無聲堂も、ために、立錐の餘地さへなかつた。 石澤儀兵衛 ×
 殊に溝淵校長を初め、西川、佐藤兩先生が率先雄 直江 忠也 ×
 姿をこゝに現はさるゝありて、三旬の修業中殆 仁科 武雄 ×
 ど、中絶者を見なかつた、如斯、盛大な有様は前 住吉 四郎 ×
 代未聞なことで、實に我が部の誇りとすべきで (巴) 梶 長 作 ×
 ある。 阿部 明正 ×
 續いて二月九日第十九回大會を行ふた。諒闇 (押込) 小山 知一 ×
 中の故を以て外來選手の数は常より稍々少な (足拂) 清水 良策 ×
 りしも、勇壯、質實なる試合は却て大に見るべ (大外) 中島 留二 ×
 きものがあつた。その龍鬪虎搏の壯況に至つて (春負) 横山 茂 ×
 は、到底筆紙のよくするところではない。今は (春負) 橋本 彰 ×
 その概畧に止めて置かう。 (大外) 瀬戸 静夫 ×
 大會當日寒稽古皆勤者紅白勝負 (押込) 黒宮 直道 ×
 大將二段淺水成吉郎 (嬰婆) 中 村 勸 ×
 副將初段 上 實男 (大外刈) 大木外次郎 ×
 (釣込足) 副將二段中 村 政吉 ×



○(押込)商 中田勝吉

○(綾)○(綾)岩田四郎

右二級

膳龜 純三

平澤 平吉

高辻 眞

○(押込)一中 中村 實

○(商)○(中橋安) 瀨戶靜夫

大木外次郎

中村 勸

増林 榮作

○(合業)二中 北村昌幸

×(橋本) 吉村正作

北川 秀一

横山 茂

平尾 義文

○(拂腰)支足)二中 小竹政吉

(大外)○(大外)○(大外) 梶 長作

大塚 武夫

久德 覺平

○(山田) 湊

(大外)列) 小山知一

小原 靖

唐生 信義

渡邊 隆吉

○(釣込腰)○(阿部) 明正

(跳腰)○(跳腰) 住吉四郎

渡邊 生一

奥村 内膳

高森卯太郎

×(拂腰)○(中) 岩井 清

○(釣込腰)○(同) 直江忠也

御影池四男

北川 秀二

福島藤次郎

×(仁科) 武雄

○(古谷) 恒俊

竹越虎之助

奥村 尙輔

高橋 良策

本年一月後に於て進級せられし諸氏次の如し

右四級

田多野信孝

小山 知一

以上一月

清水 良策

牧野 利家

和田勢一郎

右二級に編入

仁科 武雄

土田與三郎

梶 長作

住吉 四郎

岩田 三史

北 俊一

土肥 善三

岩田 三史

右一級

中島 留二

橋本 彰

橋爪 庸藏

出島 嘉吉

栗田 茂作

右二級

大塚 武夫

右四級

以上二月

林 盛雄

渡邊 隆吉

木村 修二

布村 繁

唐生 信義

小原 靖

林 昌夫

上垣 準三

米澤喜久松

右三級

小野 淡路

山田 湊

河瀬 友次

磯田 謙雄

岩田 四郎

改田 四郎

御影池四男

北川 秀二

山田 湊

河瀬 友次

寺田 昇平

塚原 順英

藤野 勘次

松島 喜作

梅谷與七郎

福永 園松

木戸 健吉

中平 政雄

寺田 金治

日俣八郎平

平岩 健吉

小林 大乗

庭球部報

◎金澤醫學專門學校庭球部

對本部對抗定期仕合規約

金澤醫學專門學校庭球部對本部定期マツチは春季五季に之を行ふ事に決定せり

秋季十月第一日曜日金澤病院内コートに於て
春季五月第一日曜日 本校庭内コートに於て

當日雨天なれば順延とする事

大正元年十月決定

◎第一回對醫專庭球部秋季仕合

病院内コート 十一月十七日

醫 軍

×	秋山	○	内藤	三
×	谷澤	○	大西	三
×	白井	○	内藤	三
×	伊藤	○	大西	三
×	下間	○	金子	三
×	關	○	金子	三
×	眞本	○	金子	三
×	鈴木	○	金子	三
×	芝田	○	金子	三
×	小島	○	金子	三
×	芥川	○	金子	三
×	高倉	○	金子	三
○	河口	○	金子	三

不戦組

(石邊坂)
(大河合)
(高泉)

青葉に裏まれた初夏五月盟を城下にいたさしめ
た凱歌の轟はまだ耳底を去りやらぬ近い過去で
あつた、我部は捲土重來の醫軍を迎ふるの準備
を怠らなかつた、けれども千鈞の弩は徒らに
張られ碎巖の鏃は徒らに研かれ、四年の歳月は
無異と倦怠とに過ぎ去つた、吾部が大義名分
持して自から軽々しく動かかなかつたのは醫軍の
酬ゆるあるを期待して居つたからである、敵を
尊敬するの道を思ふたからであつた。
悲しいかな破壊の時は流轉して止まない、無異
に過した四年の歳月は、吾部にとりては多大な
損失であつた。

吾部は先輩の遺志と吾部の方針とに則つて今秋
始めて醫軍との定期マッチを確立するを得た、
従來ありし對醫のマッチの繼續てはあるが其内
容と其面目は茲に一新紀元を劃したのである、
今日の試合はまさに對醫マッチの歴史の第一頁
に第一筆を下さんとするのである。

此日朝來細雨病葉に時雨れて斷雲はたゞ東より
西に飛んでた血に渴したる壯士はたゞ天を睨ん
で脾肉を歎ずるのみであつた、午前十一時天全
く晴れ、軟風は濕を拂つて清々しい。

午後一時には小春の暖かさが身に沁む様に眩し
く照りつけた。

午後二時工業學校本多先生の審判の下に戦は開
始された。

先鋒内藤大西組平生に比して氣勢甚だ昂らさり
しと雖も猶ほ敵の秋山組を屠るの餘力はあつた
西隅の小丘に陣せる、彌次の一群は石油鑛、砂

も、勝に乗じた我軍に對しては大山鳴動して鼠
の討死をしてしまつた、眞下組と名乗りを上げ
た花の若武者は、無残や我が鎧袖の一觸にも價
せずして、我れは既に二組の優退を得た。

石油鑛の響か地神の夢を醒しても、振鐘の振子
が天に沖しても彌次の喉から血河が漲りいでて

一疋であつた。

戦は我れに利があつた。

新進の武者奥村組は叫喚の間に華々しくも、敵の首級二ツを上げて初陣の功名を誇つた。我部は對醫仕合の第一頁に「零敗せしめた」といふ大文字を記載するの名譽を得た。

大風の草を伏す様に、我は遮さらるゝ手強き敵もなしに一擧して敵の牙營に乗り入れた、敵の暮靄かせまつて晩秋の寒さか、身に沁むた、情主將高倉組は敵ながら天晴な武者振りである、ある武士の別離を爲して醫專をひきあげた。

洛陽の櫻花に照り映えて北國高名（よこな）の名將よと讚を紛碎し盡した、我部は勝利を得た然し勝利を歎かれたのは彼れてある、算を亂して討死した得たのは醫軍に對してのみである。

味方を乗り越え我七組を悉く屠りて翻手雲を起北國の天地に踟躇して野郎自大を事とするのはさんずるものは彼れである。我部のとらさる所である、洛陽の地陽春の氣か

醫軍は彼によりて活路を求め、我れは彼によつ嫩葉を訪るゝときに我部は眞に北辰の光芒を天て始めて敵を見いたしたのである。下に輝かさねはならぬのである、小成に安んず

我早川組の責任や大である。

新進の好漢早川組を茲にたてたのは人意にしてるは愚者の爲す所久遠の理想を追はんとするものは凱歌の喜に此の大なる目的を忘れてはなら

又天意であつた、龍擣虎噬の活劇は妖雲を起した、精氣の相撃つ所、光彩陸離として人目を眩惑した。

投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限る

一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

大正二年四月十五日印刷
大正二年四月二十日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

生沼倍男

印刷所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

